林孫蔵家文書「松前町年寄詰所日記抜書」II

神奈川大学日本常民文化研究所所蔵

余市水産博物館研究報告別冊

2014年 3月

三浦泰之・田島佳也：林孫蔵家文書「松前町年寄詰所日記抜書」II

余市水産博物館

余市水産博物館
研究報告別冊

2014年 3月

余市水産博物館

余市水産博物館研究報告別冊：Mar. 2014

神奈川大学日本常民文化研究所所蔵　林孫蔵家文書「松前町年寄詰所日記抜書」Ⅱ

三浦　泰之・田島　佳也

【凡例】

① 本書では、二〇一三（平成二十五）年三月に『余市水産博物館研究報告別冊』として刊行した「林孫蔵家文書「松前町年寄詰所日記抜書」」（以下、前書と略称）に引き続き、神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵する「松前町年寄詰所日記抜書」の内、天保八年（一八三七）と天保九年（一八三八）の分（表1のNo.19の一部～No.22、No.24～No.25の一部）を対象に翻刻紹介した。天保十年（一八三九）以降の分（No.25の続き～No.30）については、次年度以降、継続的に翻刻紹介していく予定である。なお、「松前町年寄詰所日記抜書」の史料的な特徴については、前書に収めた「解題」を参照いただきたい。

② 旧字体・異体字・略字は、原則として新字体・正字に改めた。

③ 変体仮名は、普通の平仮名に改め、合字も分解して普通の仮名とした。但し、ゟ(より)、江(え)、之(の)、者(は)、茂(も)は、原則としてそのままとした。

④ 読点及び「・」は翻刻者が付し、翻刻者による注記は〔　〕で示した。

⑤ 原文中で割注になっている箇所については、〈　〉で示した。

⑥ 本史料の翻刻作業は、三浦泰之（北海道開拓記念館学芸員）が担当し、三浦と田島佳也（神奈川大学経済学部教授）で確認作業を行った。

※史料の翻刻紹介をご承諾くださいました神奈川大学日本常民文化研究所に感謝申し上げます。

表１　林家文書に確認される「松前町年寄日記抜書」

No.	資料名	数量	所蔵	記載期間・備考	綴
1	〔松前町年寄日記抜書〕	62枚	常民	文政６年(1823) １月２日～12月30日 文政７年(1824) １月１日～12月30日 文政８年(1825) １月29日～８月19日(途中) ※綴外れ墨付62丁分。最後の丁に相当する一紙の奥に「八ノ一」と墨書あり	I
2	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	余市	文政８年(1825) ８月19日(途中)～８月27日 文政９年(1826) ３月４日～11月13日 文政10年(1827) ４月４日～９月17日(途中) ※墨付34丁。最初の丁の端に「八ノ二」、最後の丁の奥に「文十ノ一」と墨書あり	○
3	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	余市	文政10年(1827) ９月17日(途中)～12月28日 文政11年(1828) １月３日～９月23日(途中) ※墨付31丁。最初の丁の端に「文十ノ二」、最後の丁の奥に「文十一　イノ一」と墨書あり	○
4	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	余市	文政11年(1828) ９月23日(途中)～24日 文政12年(1829) １月９日～５月８日(途中) ※墨付22丁。最初の丁の端に「文十一　イノ二」、最後の丁の奥に「文十一ノ三」と墨書あり	○
5	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	余市	文政12年(1829) ５月８日(途中)～12月１日 ※墨付26丁。最初の丁の端に「文十一ノ四」と墨書あり	○
6	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	余市	文政13年(天保元年・1830) ２月８日～12月30日 天保２年(1831) １月１日～２月27日(途中) ※墨付37丁。最後の丁の奥に「天保二ノ一」と墨書あり	○
7	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	余市	天保２年(1831) ２月27日(途中)～12月27日 ※墨付39丁。最初の丁の端に「天保二ノ二」、最後の丁の奥に「天保二ノ三」と墨書あり	○
8	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	余市	天保３年(1832) １月11日～９月22日(途中) ※墨付23丁。最初の丁の端に「天保二ノ次四」、最後の丁の奥に「天保三ノ五」と墨書あり	○
9	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	余市	天保３年(1832) ９月22日(途中)～12月20日 天保４年(1833) １月７日～９月18日(途中) ※墨付37丁。最初の丁の端に「天保三ノ次六」、最後の丁の奥に「天保四ノ七」と墨書あり	○
10	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	余市	天保４年(1833) ９月18日(途中)～12月30日 ※墨付35丁。最初の丁の端に「天保四ノ次八」、最後の丁の奥に「天保四終次ノ九」と墨書あり	○
11	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	余市	天保５年(1834) １月13日～３月20日(途中) ※墨付23丁。最初の丁の端に「天保五初次ノ十」、最後の丁の奥に「天保五次ノ十一」と墨書あり	○
12	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	余市	天保５年(1834) ３月20日(途中)～７月23日(途中) ※墨付32丁。最初の丁の端に「天保五次ノ十二」、最後の丁の奥に「天保五次十三」と墨書あり	○
13	〔松前町年寄日記抜書〕	32枚	常民	天保５年(1834) ７月23日(途中)～11月10日(途中) ※綴外れ墨付32丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保五次ノ十四」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保五午ノ十五」と墨書あり	I
14	〔松前町年寄日記抜書〕	19枚	常民	天保５年(1834)11月10日(途中)～12月29日 ※綴外れ墨付19丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保五午ノ次十六」と墨書あり	I
15	〔松前町年寄日記抜書〕	39枚	常民	天保６年(1835) １月６日～閏７月22日(途中) ※綴外れ墨付39丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保六乙未年ゟ始り」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保六未一終」と墨書あり	I
16	〔松前町年寄日記抜書〕	29枚	常民	天保６年(1835)閏７月22日(途中)～10月22日 ※綴外れ墨付29丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保六未ノ二」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保六未年ノ三」と墨書あり	I
17	〔松前町年寄日記抜書〕	36枚	常民	天保６年(1835)10月23日～12月27日 ※綴外れ墨付36丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保六未ノ四」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保六未ノ〔抹消〕「五」終五。」と墨書あり	I
18	〔松前町年寄日記抜書〕	42枚	常民	天保７年(1836) １月３日～４月12日(途中) ※綴外れ墨付42丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保七丙申年始り。六」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保七申年七」と墨書あり	I

No.	資料名	数量	所蔵	記載期間・備考	翻
19	〔松前町年寄日記抜書〕	36枚	常民	天保７年(1836)４月12日(途中)～６月28日 天保８年(1837)１月８日（途中） ※綴外れ墨付36丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保七申年八」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保七終八始九」と墨書あり	Ⅰ Ⅱ
20	〔松前町年寄日記抜書〕	45枚	常民	天保８年(1837)１月８日（途中）～４月13日(途中) ※綴外れ墨付45丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保八年十」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保八ノ十一」と墨書あり	Ⅱ
21	〔松前町年寄日記抜書〕	45枚	常民	天保８年(1837)４月13日(途中)～９月23日(途中) ※綴外れ墨付45丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保八ノ十二」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保八ノ十三」と墨書あり	Ⅱ
22	〔松前町年寄日記抜書〕	53枚	常民	天保８年(1837)９月23日(途中)～11月14日(途中) 天保９年(1838)１月４日～閏４月23日(途中) ※綴外れ墨付53丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保八ノ十四」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保九ノ十五」と墨書あり	Ⅱ
23	〔松前町年寄日記抜書断簡〕	１綴	余市	天保８年(1837)11月18日～12月29日 ※墨付13丁。前後欠や、上記の期間内にも欠落箇所がある。１丁目には別の日記が混在。No.22との関係は不詳	
24	〔松前町年寄日記抜書〕	43枚	常民	天保９年(1838)閏４月23日(途中)～８月15日(途中) ※綴外れ墨付43丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保九ノ十六」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保九ノ十七」と墨書あり	Ⅱ
25	〔松前町年寄日記抜書〕	33枚	常民	天保９年(1838)８月15日(途中)～12月26日 天保10年(1839)１月６日～４月13日(途中) ※綴外れ墨付33丁分。最初の丁に相当する一紙の端に「天保九ノ十八」、最後の丁に相当する一紙の奥に「天保十ノ十九」と墨書あり	Ⅱ
26	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	常民	天保10年(1839)４月13日(途中)～11月23日 天保11年(1840)１月25日～３月８日(途中) ※墨付41丁。最初の丁の端に「天保十ノ二十」、最後の丁の奥に「天保十ノ二十一」と墨書あり	
27	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	常民	天保11年(1840)３月８日(途中)～６月９日(途中) ※墨付23丁。最初の丁の端に「天保十一ノ二十二」、最後の丁の奥に「天保十一ノ二十三」と墨書あり	
28	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	常民	天保11年(1840)６月９日(途中)～８月17日(途中) ※墨付31丁。最初の丁の端に「天保〔抹消〕「十二」〔朱書〕「十一」ノ二十四」、最後の丁の奥に「天保〔抹消〕「十二」〔朱書〕「十一」十一ノ二十五」と墨書あり	
29	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	常民	天保11年(1840)８月17日(途中)～12月〔日不詳〕 天保12年(1841)１月13日～２月16日(途中) ※墨付48丁。最初の丁の端に「天保〔抹消〕「十二」ノ二十六　〔朱書〕「十一」」、最後の丁の奥に「二十七」と墨書あり	
30	〔松前町年寄日記抜書〕	１綴	常民	天保12年(1841)２月16日(途中)～３月26日 ※墨付30丁。最初の丁の端に「天保十一ノ二十八」、最後の丁の奥に「天保十一　二十九」と墨書あり	

注１）No.１～No.30は全て同じ筆跡で、筆写者は三代林長左衛門（源左衛門）である。
注２）「所蔵」欄の「常民」は「神奈川大学日本常民文化研究所」、「余市」は「余市町」の略記である。
注３）「記載期間・備考」欄では、まずゴチック体で当該資料の記載期間を示して、「※」以下にその他の情報を記した。
注４）「翻」欄の「○」は、当該資料が、松前町史編集室編『松前町史』史料編第２巻(松前町、1977年)で翻刻紹介されていること、「Ⅰ」は、前書で翻刻紹介した分であること、「Ⅱ」は、本書で翻刻紹介した分であることを示している。

【天保八年】

天保八丁酉年日記之内

抜書左ニ

正月八日、芝居之もの共合力米七度目御渡被下度旨、名主田中九八願出候間、山崎屋新兵衛、福嶋屋新右衛門両家組ニ而四斗入壱俵相渡候様書付、九八江遣し候、

一、唐津内町梶浦屋五三郎宅江当月二日之夜三歳程之捨子有之趣御訴申上、御見分相済候処、右小児守之内ニ天保三辰年出生房女と有之候、左候へ者当年六歳相成候而訴書与不相当之旨、依之能々取調候様被仰出候間、若右子供見知り之もの有之哉、町々相尋候様御吟味役ゟ被仰付候間、名主田中九八江相達、

一、殿様　御服中付、正月獅子祓之神事御城内并御役所向者御門前ニ而獅子祓可致候、御家中一同ハ是迄之通ニ而不苦趣、佐々木大和へ御達相成候、

一、御本国已来御城内并法幢寺・光善寺・阿吽寺・八幡宮・神明宮其外御寄合中御役人方一同江御松被下候分共書上可致旨被仰付、名主田中九八ゟ書付差上候、尤、御旧領の節之儀も相分候半々、是も諸記可差上様被仰付候得共、御旧領の義者相分不申趣申上候、

一、津軽十三湊長之七ヒクニ一件付、津軽家ゟ御目録被下候、其節取扱懸り

相成候者　金三百疋ツヽ　村山伝兵衛　桜庭梅太郎　金百疋ツヽ　工藤忠兵衛　沢田屋九兵衛

金二百疋　旅人宿喜右衛門

一、当春南部宮古ニおゐて長者丸ニテ水主共之内鉄炮打候一件、江戸表おゐて去申十一月十七日ニ内済仕候趣御船頭金蔵ゟ申来候趣、藤野喜兵衛直々罷出申出候付、為御含御奉行所へ申上候、

一、兼而御用達并請負人ゟ市中難渋者へ合力ニ差出候魚るい、此節割渡可申旨御達ス、

一、阿部屋伝治郎方ニ而施塩引壱人付三本ツヽ之処、格別多人数付弐本ツヽ被仰付候、先達相渡候、其節壱人付壱本ツヽ三分凡八百何十本伝二郎方ニ而用意致置候分、此後為取候ニ不及旨被仰付、其段伝二郎手代申達候、

一、先番ニ被仰出候　殿様　御服中付、明十三日当御役所御門前おゐて門獅子有之候間、開門之義田中九八江申達置、尚又、例も有之候事故、御吟味役衆申上候、拙者共之内壱人継片衣ニ而相詰候様御達有之候、

一、上ノ国名主ゟ旧冬願書差上置候御用胴船新規造舟願の義難仰付、願書御下ケ相成候、右ニ付献上御賄年々差上候内御減被仰付、以来者左之通年々相納可申、尤、献残之義者是迄両度ツヽ差上置候事ニ候へとも、以後者献残一切差上候ニ不及趣共被仰出候、献上左ニ、

壱番鮭壱尺　弐番鮭二尺　三番鮭三尺　御賄鮓四樽

難肉二樽　塩引百尺　大塩引七尺　右之通改而被仰付候、尤、外ニ背綿年々納来候半々此分ハ拙者共限り是迄之通り相納候様申談候積り、

一、当時栖原屋庄兵衛所持之西館町元伊沢司殿地面建有之家余り芩落いたし、町並甚見苦敷相損じ候間、早速為取解可申、延日相成候而者庄兵衛義迷惑筋も可有之哉之趣、新井田周治殿ゟ御内意有之候間、則庄兵衛呼出ス申付候処、奉畏候趣申上候間、明日申上候積り、

一、津軽長之七船并中荷物ヒクニ御場所へ昨年ゟ囲置候分、今般津軽家ゟ御飛脚被差越、御奉行所へ御願の趣、同所請負人并最初(ヨリ)隣場請負人共へ入札

被仰付、御飛脚宿工藤忠兵衛宅おゐて開札立会として中村権平、名主九兵衛罷越、左之通入札、〇印之分ハ高札有之候趣相認メ新井田周治殿差上候、

荷金四両・船金二両一分一朱岡田半兵衛、

〔奥端書〕「天保七終八始九」

〔端書〕「天保八年十」

荷金三両三分二朱・船〇二両三分岩田金蔵、荷〇金四両壱分・船金弐両壱分福嶋屋新右衛門、

一、年々日岸ニ入候得者鯡始納中ニ相成候付、時鐘堂始寺々大鐘其外きぬた打并沖留諸漁やす入等是迄御停止被仰付候へとも、近年諸国米穀不作旁々ニ就而者、万一鯡不漁之節者鯡取始小前之もの共難渋可致候間、鯡始納中ニ而も諸漁沖留やす入等御免願仕度存寄も候半々不苦候間、一同ゟ願書可差出、左候へ者万々一鯡不漁等有之候而も外漁致居候半々ヶ成喰料之足しニも可致旨御内意、新井田周治殿ゟ御達有之候間、同役一同申談、今晩村山重左衛門宅おゐて鯡取一同へ申談候積り、尤、陸ニテ停止之義者是迄之通被仰出候、

一、江戸大中寺行金百五両入壱包書状壱封預り置、追而御便り之節為登候様、蝋　四郎左衛門殿ゟ被仰聞候、尤、法幢寺之分有之候、

一、生府御米蔵ニおゐて御米蔵出ス之節、何廉不調法之義有之候付、其節立会出候、内吟味役藤林重治、内下代田中斧三郎、同仮勤盛野勝司、御足軽升取岡口嘉七、同蔵番増田兵八、右者昨十九日ゟ五人御沙汰中慎ミ被仰付候、

一、名主田中九八、同苗斧三郎慎付差扣之義伺上候処、御沙汰中故差扣ニ不及旨蝋崎四郎左衛門ゟ御達、

一、木村兵部儀、藤林重治兄弟付重治慎付差扣伺上候処、御沙汰中故差扣ニ不及旨御達付、白鳥形部へ相達ス、

一、昨十九日、極究もの〈家数廿四軒、人数六十六人〉、右江ヲシメ昆布壱人付壱升八合ツヽ遣候、岩田金蔵ゟ合力之分、

一、当廿日、極難もの〈家数弐百拾八軒、人数六百廿二人〉、右江干鮒壱人付壱掛ケツヽ遣候、伊達林右衛門ゟ合力之分、

右両用共町役所台所土間ニ而名主・町代立会相渡候、

一、御料中抱女御役御取立定、

一、正月ゟ五月迄之内暇差遣候分者　差免

一、六月ゟ暇差遣候分者　半役

一、七月至り十二月迄暇差遣候分者　本役

一、正月ゟ六月迄ニ抱入候分者　本役

一、七月抱入候分者　半役

一、八月ゟ十二月迄抱入候分者　差免

一、拾五歳以下拾四歳迄者　差免

一、病死者何月ニ而も　同断

但、病身聞届なし、

〆　田中九八

一、極難之もの・極窮もの身欠外割鯡、御用達・請負人ゟ合力ニ出ス候分、町役所西ノ方明土間ニ而名主・町代立会、尤、巨細書名主方有之候、

一、芝居之もの合力米四斗入壱俵九度目米屋孫兵衛ヨリ甚太郎へ相渡、

一、鯡漁事前鮭網・鱒網・やす入等其外願之通御聞済被仰付候、尤、右請書可差出旨被仰付候、

一、栖原屋主人北村徳兵衛書付を以、支配人庄兵衛子細有之、暇差遣し、跡支配人見立候迄当分之内私直支配仕度趣、一名ニ而願書差出候間、御内々御奉行所へ入御覧、旅人ニ而請負致御用相勤候義難相成候間、庄兵衛代り支配人見立候上ニ而書面差出候而も工藤忠兵衛加印為致可申、右願書昨日差出候得共今日下ケ遣、

正月廿五日、今日市中極難之者共江請負人共ゟ合力差出候米之内ゟ三度目施行割渡遣候、左之通り、

一、家数百五十七軒
　人数四百五十九軒（マヽ）　市中極難之者

一、家数四十壱軒
　人数九十壱人　同断申十二月追願極難ニなる

一、家数廿三軒
　人数七十九人　同断当正月ゟ追願極難ニなる

此分者京御用之間江伺済相成候、

家数弐百廿壱軒　此石拾七石壱升
人数六百廿九人　此四斗入四十二俵ト弐斗壱升

内訳

拾五歳以上之もの四百四十三人　壱人付米三升宛　此石拾三石弐斗九升
拾四歳以下之もの百八十六人　壱人付米弐升宛　此石三石七斗弐升

一、北村徳兵衛并喜六両名ニ而、一昨又候直支配仕度趣書面差出候ニ付、御内々御奉行所へ御覧入候処、御用之間江御上ケ相成候ニ付、同日御用番鈴木紀三郎殿ゟ御用付伝兵衛罷越候処、旅人ニ而者直支配并御請負等不相成ニ付、御料已来之御手法ニ而引続罷在候間、百姓入いたし候上ニ而店支配いたし候歟、又者本人庄兵衛病身等ニ而御請負并御用向勤兼候ハヽ、其旨ニ而庄兵衛名前ニ而願書差上候様ニ可仕、委細ニ被仰聞候間、同勤へ此旨相噺申候、其後御番新井田周治殿ゟ御用ニ付重左衛門罷上り候処、前同様又候委敷被仰聞候間、右様之義大事可有之候間、鈴木紀三郎殿同様徳兵衛義町年寄宅江呼寄、当所之振合等申聞利解可申聞様被仰付候間、重左衛門宅ニおゐて一同罷越候処、本人病身ニ而忰半蔵・喜六両人江工藤忠兵衛同道ニ而前書之訳合三人江申聞候間、弐度目願書下ケ遣候得与勘弁可致旨相噺候而返ス申候、

一、北村徳兵衛・喜六両人ゟ三度目書面差出候間、評儀之上ニ而御奉行所江御内意御覧入候処、何れニも一同申談相下ケ遣方可有之候様ニ被仰聞候間、喜六呼出し訳合申聞、書面下ケ遣、尤、写別ニ有之、

一、津軽ノ長之七一件付、同所町奉行両人ゟ御状先日参候御返書壱封并金子入壱包、外ニ足軽両人江御目録百疋ツヽ、蝋崎四郎左衛門殿ゟ昨日御渡付、名主野坂吉六江相渡、宿工藤忠兵衛方へ為持遣し、

一、紀州北村徳兵衛煩ニ付、代喜六名前之書付を以、支配人庄兵衛儀子細有之暇差遣候付、御場所御用向御太切之御儀ニ奉存候間、自今御用向取斗方如何可仕哉乍恐奉窺候趣、此間中差出候書面同様之文言ニ而差出、同勤共種々申談、御奉行所江茂御内意相伺候得共、何れ共差図難相成候間、得与談事之上、場所証文山田屋文右衛門とか宿工藤忠兵衛とか又者請負人仲間之内ニ而も跡支配之相極り候迄当分頼合、御用向為承可然と被仰聞、猶、同勤共談事之上、其段喜六江申聞、昨日之書面相下ケ候、願書之写諸綴込

有之候、

一、極窮御救米三石八斗弐升八合　此四斗入九俵ト弐斗弐升八合也

（市中極窮之もの廿四軒
人数六十六人）

壱人付一日米弐合ツヽ、惣人数ニ而

但　一日壱斗三升二合二月一ヶ月日数廿九日分如高

右者市中極窮之もの御救米去十二月・当正月分、兼而御下ケ相成、且又相凌居候ニ付、来二月一ヶ月分書面之通此度御下ケニ被成下候様名主ゟ書上候間、御奉行所へ申上候処、今日内御役所吟味役中へ御達之積り、

二月二日、栖原屋庄兵衛主人北村徳兵衛ゟ差出ス候書面内々御用番江懸御目ニ候而其後徳兵衛代喜六呼上ケ、右書面下ケ遣、其訳者庄兵衛名前相離不申内、徳兵衛相願者不相成事ニ候、徳兵衛者他邦之人ニ候、旅人ニ而者一日たり共御場所請負者不相成御定候、然ニ庄兵衛名前差置、徳兵衛者主人ニ而も表立候願者不相成候、此願書者北蝦夷地半方御引上ニ相成候付、同所ニ残荷物・残諸品代当時当所ニ而帳面を以引渡度趣意、委細者右願書之写者次ニ綴込有之候、此願書喜六へ相下ケ候処、願書取上ケ無之候上者徳兵衛相登り可申候、随而残荷并残諸品者何方ゟも手入候事不相成義ニ候間、同役四人江此段相届置候段申聞候、依而此方ゟ申聞候ニ者、如ヶ様之義届候共庄兵衛ゟ之書面ニ無之候而者当時取上ケ無之候間、此段相心得候様申聞遣し候、

乍恐以書付奉願上候

文化六巳年北蝦夷地御場所之儀者伊達林右衛門并私出店支配人半助両人江格別之御趣意を以御預ケ被仰付、冥加至極難有相続仕来候処、其後当御代ニ被為成、度々年限御切替被仰出候而茂先規之通引続御預ケ被仰付冥加至極難有相続罷在候処、去申年中私出店持半方之分御預御請負年季中当酉年ヨリ御引上ケ被仰出候付、如何之御訳合可有御座哉不奉存候得共、御沙汰之趣恐入御請為奉申上候、然処、一体御場所仕込ニ不限金子之儀者重従御方様御下ケ金ニ御座候故御場所御引上ケ之趣申上候処、右仕入金并残り物共金上納可致旨以御書取蒙御沙汰恐入奉畏候段御請奉申上候処、

御尊翰御下ケ相成則奉拝領候、随而残物之義者御場所支配人・通辞・番人共取調子持参仕候帳面を以代付致呉候様林右衛門方へ庄兵衛手ゟ数度為願入候得共、承知之趣斗りニ而延日ニ相成、既ニ旧冬押詰候間、尚又為申入候処、当五月中見分之上ニ無之候而者直段付相成兼候趣申ニ付、左候而者追々漁業之差支ニも可相成候ハヽ、　御上様江対ス恐入奉存候段申聞候処、決して漁業之御差支者無之旨申候付、是迄外移替之振合茂可有之候へ者、御用達中江成共相願、直段付致貰可申哉等迄種々為申入候得共、兎角不承知之趣被申候付、無拠庄兵衛手代を以御会所江引合候処、名代ニ而者名代（ママ）ニ而者難取用、林右衛門同道当人可参、尤、当人病身有之候半々徳兵衛・半蔵両人之内可罷出との挨拶之趣御座候、一体是迄庄兵衛手切ニ而取扱候義者何事も穏便之御相談ニ仕度心得ニ而取斗候趣庄兵衛申聞候得共、段々延引ニ相成候而者蒙御沙汰候御尊翰江恐入奉存候間、御沙汰之通私ゟ奉申上候間、北蝦夷地仕入物之内残り物并残荷物共代金相成候上、私手ニ入前書奉申上候通、御金上納ニ相成候様御取扱奉願上候、何卒以御憐愍願之通被仰付

被下置候様、此段御執成奉願上候、以上、

天保八酉年二月　　跡支配願中ニ付

北村徳兵衛

煩付

代喜六

村山伝兵衛殿

桜庭梅太郎殿

張江又八殿

村山重左衛門殿

右書面差出候付、小川九兵衛呼出ス相糺候処、外ニ子細も無之、栖原屋手代彦七与申もの去申十二月十八日北会所江相見得、栖原屋庄兵衛ゟ之使口上北蝦夷地残物之義帳面を以爰元ニ而相渡度旨申聞候間、右者残物帳去申七月頃相調候分ニ而其後支配人・番人北蝦夷地ヨリ引取候後ニ而春漁・夏漁之夷人勘定致候ものニ候間、帳面高ゟ余程品物不足相立、其上去申年大三十日迄者半高庄兵衛方之持候得者、右等之調も相分り不申候間、何れ五月中北会所ゟも立会相越候間、其節残品相改取引可致旨返事致遣候由申聞候趣申立候、

一、津軽家飛脚、工藤忠兵衛方ニ而逼（マヽ）留中賄取扱方、是迄壱泊り銭百八十文ツヽ仕来之処、打続米并諸品共高直付、壱泊り銭三百文宛被成下度願書差上候処、御奉行所御沙汰之上、百八十文仕来者是迄之通内御役所ゟ相下ケ可申候、百廿文足銭之義者除金ゟ差出ス可遣候趣ニ被仰付候、尤、時節相直り候得者元之通り百八十文ツヽ御下ケ被成下度候、

一、御米蔵ゟ御米出ス入之節人足相越候付、已来御取締之ため町代壱人ツヽ差添可遣旨御奉行所ゟ御沙汰付、名主へ相達、

一、鯡漁事前、やす入、鱒・鮭網入候事御免付、東西在々之分請書印形相済、二月六日、竹屋彦左衛門書付を以、請負所上下御場所来戌年限り季明付、明後亥年ゟ向巳年迄引続七ヶ年御請負被仰付度、尤、跡年季奉願上候付、聊御座候得共金五拾両御冥加金奉上納度趣願書差出候間、奥印致ス差上候、則別紙運上金高書上共上ル、

一、昨日被仰渡候市中鯡取之もの、已来者数納中ニ而も鱒・鮭都テ外漁事仕度、今般願之通被仰付候付、今日請書蝋　四郎左衛門殿上ル、

一、惣社堂町しの女ゟ御米三俵願受仕度願書奥印いたし、蝋　四郎左衛門殿へ上ル、

一、御用達・請負人一同江場所々江差下し船々船中共心得違ニ而鉄炮持参不致様厳敷申付、請証文為差出候様被仰付候、

一、栖原屋主人北村徳兵衛煩代喜六ゟ北蝦夷地半方残物代金請取度旨、先日願書差出候得共、右店未タ上向者庄兵衛名前有之候間、喜六ゟ書面等相下ケ、其後伊達林右衛門儀是迄年来仲間ニ而商売致候故、右残物代如何様とも取斗可申旨、林右衛門、栖原屋相越、喜六江申入候得共、御役所ニ而願書御下ケ相成候事故何共致方無之、依之此度半蔵為差登候積り相成、風待中ニ候得者、此上者勘弁茂無之旨喜六申聞、林右衛門、夫ゟ両三度モ相越願候得共同様之挨拶故、其後御用達藤野喜兵衛・西川准兵衛・岡田半兵衛、右三人三度迄栖原屋へ相越取扱申入候得共、承知無之候付、去九日新井田周治殿ゟ御内意有之、翌十日梅太郎宅江栖原屋店喜六相招、村山重左衛門両人ニ而種々利解申聞候処、何れ半蔵儀も未風待中ニ候間、徳兵衛へも得与申聞候上、返事可致趣申聞、喜六引取申候、

一、栖原屋一件、一昨十日喜六呼寄、桜庭梅太郎宅ニ而利解申聞遣候処、今朝迄も返事無之候間、尚又、御用達藤野喜兵衛・西川准兵衛両人栖原屋へ遣候処、喜六罷出、何れ唯今談事中ニ御座候間、梅太郎・重左衛門両家之内江返答可致旨、喜六申居候趣、喜兵衛・准兵衛両人罷帰り申聞候、

一、市中計り米之儀付、今日窺書差上候、左ニ、

覚

一、元高米弐百廿六石九斗八升　御用達・請負人ゟ合力米

内、升欠五分引、

正味弐百十五石六斗三升壱合、内、十六石九斗四升八合七勺

右者市中極難之者旧冬両度救相渡候分、

拾七石壱斗

右者市中極難之者江正月廿四日救相渡候分、

〆三拾三石九斗五升八合七勺

残米当時有高

百八十壱石六斗七升二合三勺

内

十七石壱升

右者市中極難之もの江此節一度救ニ相渡申度奉存候、

十七石壱升

右者市中極難之もの江三月上旬壱度救相渡申度奉存候、

十七石壱升

右者市中極難之もの江三月中旬一度救相渡申度奉存候、

〆三口　五十壱石三升

差引

全残米百三拾石六斗四升弐合三勺

此四斗入三百廿六俵ト弐斗四升弐合三勺

右者全残米之儀者、兼而藤野喜兵衛・西川准兵衛昨年手船ニ而積下ス米旧冬御窺之上安米ニ計り売仕居候処、此節払切相成、当時市中売米一切無御座候付、当惑仕候間、書面之残り米安米ニ計り売出候様仕度奉存候、依之此段奉窺候、以上、

酉ノ二月十一日　町年寄

右之通窺書御番新井田周治殿江差上ル、

二月十二日、上下ヨイチ御場所、明後亥年ゟ七ヶ年引続御請負被仰付候ニ付、竹屋彦左衛門ゟ献上、鰹節壱連、御鰹一足代金七両、御樽壱荷、

但、御熬斗御目録金包共右之外御冥加金五十両也、前同断、

右之通新井田周治殿御披露ニ而無滞相済申候、

一、昨日昼過、村山重左衛門宅江栖原屋店喜六相越申聞候ニ者、一昨十日、桜庭梅太郎宅ニ而被申聞候御利解之趣帰宅之上、徳兵衛・半蔵両人江申聞、一朝一夕之儀ニ者無之不容易事故既に三日之内厚く内談致候得共宜勘弁も無之処、猶又、今朝藤野喜兵衛・西川准兵衛御両人御出被下候間、其段茂徳兵衛江申聞、色々内談およひ候へとも決心相極り罷在、此上勘弁無之候付、宜御断申上候様徳兵衛ゟ申聞候段、喜六申述候故、猶又、重左衛門ゟ種々申入相諭候得共、迚も埒明不申候付、今朝同勤内談之上、外ニ致方無之候間、御奉行所御両人御揃之席江罷出、右始末御内々申上候、右事済ニ不相成候上者、先日残物之儀願書相下ケ候節、北蝦夷地残もの者右代金落着ニ相成候迄者何れ様ニ而も御手を入候儀相間敷、喜六挨拶も有之候得共、

段々談見候処、右残物之義者林右衛門其外北会所江栖原屋ゟ挨拶可致廉与存候段申上候処、至極尤ニ候間、左様相心得、今日ニ無之候とも栖原屋へ申聞可遣様被仰聞候、

二月十四日、北村徳兵衛代喜六呼出ス申聞候者、当月朔日差上候願書二日ニ相下ケ候節、北蝦夷地残物諸品五月頃之引渡相成候義ニ候半々右渡方相済不申内者何方ゟも手を入候義不相成義可有之候間、此段町年寄四人揃之処江届置候段、喜六申聞候、然処、右残物之義者下ケ遣候願面ニ有之候趣意候得者願書者下ケ趣意斗り聞届置候訳者無之旨其節申聞候へとも、追々伊達林右衛門并御用達藤野・西川・岡田三人数度中立熟談為致、残もの爰元ニ而致引渡、代金も早速可相渡与再応申談候へとも不承知之趣候へとも、此上者致方無之候、右残もの之義外ゟ手を入候義等之挨拶者当御役所ニ而者聞請無之候、其方之了簡次第取斗可申候、此段喜六江申聞遣候、

一、兼而御用達・請負人ゟ差出候合力米之内、今日於御役所庭端極難之者江救米拾七石壱升計立相渡候、

二月十六日、御用達・請負人ゟ差出ス合力米三百廿六俵余者救米差出ス残ニ而此分申合之上、阿部屋伝治郎方ニ而通帳ニ而安米計売昨十五日ゟ初メ候義申上候、

一、市中鯡取打寄、七社名主（マヽ）へ相願、鯡神楽当十九日小松前印下ゟ浜おゐて仮家をしつらい修行致度候、尤三半船壱艘ゟ弐百文、ほつち壱艘ゟ百五、七十文位、磯舟ゟ七、八十文位持寄、市中者志し次第たるへく、右ニ而御初穂雑用等致ス候趣、此段とも申上候、

一、阿吽寺并七社江鯡御祈祷之義者　御服中故、御初穂之義追而御下ケ被成候趣被仰出候、双方共へ相達、

一、鯡神楽七社神主へ相願、印下浜仮家取建度旨申上候処、御用之間御評儀、殿様御初参り者、弁天江御参詣茂有之事、此節弁天嶋雪有之候半々惣社堂浜へ仮家相掛ケ神楽可致旨被仰出候、右之趣、加藤専右衛門へ相達、

一、昨日被仰出候例之通鯡豊漁之神事、今十七日七社共修行相済候旨、七社神主届ニ罷出候、

二月十八日、竹屋彦左衛門、上下ヨイチ御場所跡年季明後亥年ゟ向巳年迄引続御請負被仰付候付、今日、彦左衛門并宿工藤庄兵衛、大津屋武左衛門呼出ス、蠣崎四郎左衛門殿ゟ請書被仰渡、印形相済候、

一、兼而被仰付候市中備米蔵二ヶ所其外ノ戸拵方大工彦之丞江申付置候分、一昨日出来相成候旨申出候、依而今日御奉行所へ申上候処、明日御目附衆并吟味役衆共御立会封印之積り、

一、阿吽寺看主覚定、此度高野山江自分物入ニ而時分柄罷登候付、銀五枚、蝦夷錦壱巻被下候、尤、蠣崎四郎左衛門殿ゟ被仰付候、

一、市中備米蔵外ト戸出来付、内之戸錠封印、御目附工藤小伝治、御吟味役出役大場伝左衛門、外ト戸封印、村山伝兵衛・桜庭梅太郎両人、名主専右衛門、丁代惣代生府町重兵衛、右一同罷越、米見分いたし候上ニ而二重ニ封印いたし候而罷帰り申候、尤、去十九日御座候、

二月廿二日、阿吽寺ゟ宝物入長持壱棹一昨日持参付、新井田周治殿江相伺候而同寺留主居篤成ニ而寺印ニ而封、其上者当番村山伝兵衛、締方奥平永次兵衛両人ニ而封印いたし候テ御土蔵江入置申候、尤、入日記左之通、

一、箱物　壱ツ、但、内ニ四箱入、　一、箱物取合ニテ　五ツ

一、掛もの取合　四箱　同取合ニテ八移　一、巻物　壱箱

右之通私共両人并篤成立会ニ而相改、封印いたし、御預り相成候、

一、北村徳兵衛煩付代喜六ゟ先達而中差出候願書五通難取上ケ相下ケ候一件、巨細相認メ、新井田周治殿江差上候、扣者綴込有之候、

一、岡田半兵衛江御預ケ相成居候御船叶丸、去冬越後新潟表囲有之候而、御船頭種市善太夫ゟ十二月廿二日右同所出し之書状相達致披見候処、此方ゟ十一月十七日差出候同役共ゟ之書状相達候趣、猶又、去年新潟へ立寄候儀者兼而申上有之、同所石崎弥右衛門江取替残金請取候而上納仕度心掛相越候処、彼是延日ニ相成候内、病気相煩、漸々快方ニ九月上旬出帆之支度致居候処江岡田半兵衛方ゟ米買とし而定吉・喜之丈両人新潟相越、廻米之手配出来候へ者為積入候間、出帆見合候様定吉申聞候而、十月迄相待候へとも津出ス之手配不相成候様子ニ而定吉・喜之丈者何れ江相越候哉、居所難相分り、段々時節後レ相成候而御船も空舟ニ而出帆難致、無余儀囲ニ仕候趣、善太夫ゟ申越候書状、為御含新井田周治殿へ入御覧候、

二月廿五日、昨夜四ツ時過、大松前ゟ出火有之、西風はけしく、同丁続浜町通不残、七軒町、中袋町、横町南手片側、枝ヶ崎町、泊川町大坂迄、馬形宮〈本社拝殿〉其外小宮共、東中町、後町者南片側、浜町、右不残類焼致候、火元者大松前町岩屋善左衛門ニ候趣、名主・町代取調申出候御届書左ニ、

乍恐以書附御訴奉申上候、

私居宅勝手之方へついニ而日々糧粥焚候付、昨日者暮方迄ニ火取仕舞仕、私義者用事付、中町清兵衛方へ罷越候而留主中母并妻両人差置候処、昨夜四半時頃勝手之方ニ火之影相見得鳴音仕候間、勝手口之戸明ケ候処、へちい大切ニ取仕舞仕候へとも、手アヤマチニ而もれ候与相見得、勝手シヤクミ板ゟ土蔵外囲迄燃上り、四、五ヶ所も屋根江焼抜候付、右両人之もの其侭立退申候、其所へ私義火事触承り駈付見候処、右同様ニ而追々居間之方へも火相廻り候付、無拠私義も同様着之侭ニ而立退申候、依之重々恐入奉存候付、入寺相慎罷在申候、乍恐此段以書付御訴奉申上候、何卒格別之以御憐愍御慈悲之御沙汰被仰付被下置度、宜敷奉願上候、以上、

酉ノ二月廿五日　　火元

大松前町善左衛門

店支配人

藤五郎〇

〇下札出火付、印形焼失仕候、

町代

嘉兵衛印

宮川半右衛門印

町御役所

一、去ル廿四日夜、出火いたし候大松前町岩屋善左衛門店支配人藤五郎義、家数多類焼仕、重々恐入、寿養寺へ入寺仕候付、同寺ゟ御慈悲之書面差出候間、蠣崎四郎左衛門殿差上ル、

一、佐々木大和書付を以、廿四日夜大松前町出火之節馬形明神〈本社并末社拝殿とも〉類焼仕、尤、御神躰棟札之儀者神明社安置仕候趣御届書差出、前同様差上候、

一、類焼之家数

惣〆棟数弐百九十三軒

内訳

家数弐百七十五軒　此鍵数三百七十五軒

土蔵五ヶ所　同外囲六ヶ所

板蔵七ヶ所　穴蔵三ヶ所

三月中極難之もの両度分、御用達・請負人ゟ差上候米之内預置残り之儀御返ニ相成候得共、右両度渡方分難渋極窮相込候間、此節一集ニ相渡、当十五日迄右高米ニ而取続、其外者不被下候様仕度、昨日御伺申上候処、伺之通被下置候旨、昨日蠣四郎左衛門殿ゟ被仰付候、尤、米高三十四石弐升有之候、

一、出火之節相働候人数百六十七人名前書上ケいたし候、

但、去申年七月十二日伝治沢町出火之節相働候もの九十六人江五貫文、類焼のもの一軒付米弐升ツヽ被下置候間、此旨下ケ札ニいたし差上申候、

一、来ル四日ニ惣社堂町浜ニ而鯡神楽修行仕候旨、八幡宮江申合候テ名主一同へ此段申聞置候、

一、家数弐百廿壱軒　極難もの

人数六百廿九人

一、家数廿四軒　極窮之もの

人数六十六人

合家数弐百廿六軒　人数六百九十五人

内訳

十五歳以上之もの四百八十八人　壱人付米五升ツヽ、此石廿四石四計

十四歳以下之もの弐百〇七人　壱人付米四升ツヽ、此石八石弐斗八升

米合三十弐石六斗八升

此処へ三十四石弐升有之、

差引テ

米壱石三斗四升過上、此分ハ御用達・請負人江預ケ置、追而難渋之もの有之、無余儀候節被下置候積り、御奉行所へ此旨申上置候、

右之通、此間御伺申上候処被仰付候間、一同江割渡遣候付申上候、然処、御吟味役衆ゟ御白洲ニ而被下置候段被仰渡候、尤、追々鯡漁事も可有之、雪も山に無之相成候間、山海ニ而喰用物取候様可致、尤、此米有之候内ニ夫々相働候而取置可申候、此後者御米不被下候間、相心得働候様被仰渡候、当名主・町代一同ゟも精々此段申付候、

一、長州米〈升四斗余〉四百俵口　〈宿近江屋〉忠右衛門

一、豊後米〈升四斗余〉百三十俵口　〈宿広嶋屋〉布右衛門

右者此間入米ニ而先番之節申上、御用達を以直段引合置候処、廿匁七分迄ニ相成候段、今朝御用達申出候間、新井田周治殿へ申上候処、右直段ニ而入米高之内三ノ壱御買上ケ被仰付候、残り三ノ弐者御用達買入、市中之者へ壱俵弐俵と相払遣候様被仰出候間、御用達・問屋へ申達候、尤、御上升之積り問屋へ申付置候、右御用達三ノ二買上ケ市中ニ而買調申度者名前俵数取調候様、番名主へ申付置候、

一、入米之儀、已来問屋ゟ書上ケ之節沖ノ口御改相済候上、双方俵数間違無之様為書上可申旨、昨日周治殿ゟ御達有之候間、問屋一同江申達候様、頭取工藤忠兵衛へ相達候、

三月五日、〈宿〉京屋平八、〈岩船〉専右衛門船、庄内米百俵〈升五斗入〉、外ニ積物共書上并付米共今朝差上ル、

一、北村徳兵衛一件書、先日蛸崎四郎左衛門殿ゟ御下ケ相成候処、同勤とも拝見相済致返上候、

一、惣社堂浜蔵おゐて鯡漁御神楽七社ノ神主相詰、昨日修行相済申候、

一、今般類焼之者地面片側三尺宛引込双方ニ而町幅壱間ツヽ広く相成候ハヽ、万一非常等之節防キ方宜敷相成可申旨、此間同勤とも談之上御奉行所へ申上候処、御披露之上、昨日御聞済之旨、新井田周治殿ゟ御座候間、今日類焼跡地主々江名主ゟ為相達候、追而御奉行所始御見廻之上、三尺ツヽ引込取極候積り、

一、昨五日夜、江戸御飛脚至来付、友姫様御儀、去冬御不例之処、当春ニ至り弥々御大病相成、御養生無御叶去二月十二日御逝去之趣御達ニ而、則昨五日ゟ七日迄三日之内鳴もの御停止普請無構旨、寺社其外定例の通昨夜之内触書差出候、友姫様御逝去付、殿様御忌服御窺被為遊候趣付、御家中一同継肩衣ニ而今日御機嫌伺ニ出候、

一、芝居もの十七人江合力米〈四斗入〉壱俵、岩田金蔵方江書付遣し為相渡候趣、田中九八申出候、

一、馬形明神御本殿類焼仕候付、御普請の義願上候も御時節柄恐入候間、追而御普請被下置候迄、下及部村天神宮社内ニ古キ明キ本社御座候ニ付、右本社当分之内仮殿ニ遷安鎮仕度願書、佐々木大和ゟ差出候間、蛸崎四郎左衛門殿上ル、

一、去月廿四日夜出火之節消防方格別ニ相働候者先番書上候人数百三人江為御褒美鳥目五貫文被下候、尤、吟味役衆御番蛸崎重郎左〔右〕衛門殿ゟ被仰渡候、

一、畑屋七左衛門書付を以、近年類焼仕候上、在々不漁付、鯡取江仕込金等も不勘定ニ而当春大漁も有之候半々半分通りハ入金も可有之哉ニ奉存居候処、此度不存寄大松前町出火ニ而居宅并袋町建置候質店其外貸家等迄も類焼仕、勿論市中も金談不融通ニ而旁々難渋仕候間、御金五百両拝借仕度、尤、来戌年六月中無相違御返金可仕、臨時御用之節者被仰付次第可奉上納候趣、証人藤野喜兵衛、名主中林九兵衛連印之願書差出奥印仕、新井田周治殿江上ル、右者地面六ヶ所拙者共迄古券差出置候趣価積りいたし候処、相応の儀ニ可有之候間、右願之義者被仰付候上者地面六ヶ所之古券証人之事故、藤野喜兵衛江預ケ置候積り、

三月十二日、類焼難渋之もの三十九軒へ一軒付御米弐斗ツヽ被下置候間、御白渕〔潟〕ニ而新井田嘉藤太殿被仰渡候、

但、右御米者昨日御城内御蔵ヨリ御渡有之候、

一、藤野・西川・岡田右三軒ゟ御金千両来七月迄拝借いたし度旨願書差上候、

三月十五日、今日御礼後、町年寄・名主於御台子之間昨年御収納出精相納候付御目録為御褒美被下置候趣、御用番蛸崎将監殿ゟ被仰渡候、左ニ、

金三百疋ツヽ、　村山伝兵衛、桜庭梅太郎、張江又八、村山重左衛門、

金弐百疋ツヽ、　加藤専右衛門、宮川半右衛門、田中九八、中林九兵衛、野坂吉六、

右町年寄・名主共継肩衣着用、町年寄ハ上御台子間御敷居内へ出候、名主者御敷居外迄罷出、尤、当番之町年寄壱人差添、

一、佐々木大和書付を以、馬形明神之仮御本殿之義者私方ニて手配仕、明十

五日社内へ相居、御祈祷修行之上、右御本殿江御遷安鎮仕度奉存候、追而御普請被下置候節、御見分御願申度奉存候、依之此段奉申上候、

一、畑屋七左衛門ゟ兼而拝借仕度願書差上置候処、願之趣無余儀訳から二相聞得候間可被仰付之処、当時御金御都合不宜候付難被仰付、願書御下ケ相成、其段七左衛門委細申達候、

三月十六日、藤野喜兵衛・西川准兵衛・岡田半兵衛、右三人ゟ御金千両拝借奉願上候処、願之通御聞済相成候段、新井田周治殿ゟ御達御座候、御益金相伺候処、金廿五両付金壱歩ツヽ被仰付、則達、

一、枝ヶ崎町北側壱番〈栖原屋〉庄兵衛持地、南側壱番宮川増蔵持地、右向合ニ為火除土蔵相建申度奉存候間、此度被仰出候類焼跡持地面之内三尺丈引籠候儀者多分穴蔵へ相掛り難渋仕候間、三尺引籠之儀御免被下置度趣、此間御奉行所へ申上置候処、伺之通土蔵相立候儀御聞済、猶又、三尺通り引込候儀も御免相成候間、名主宮川半右衛門江申達候、

三月十七日、今暁、根森村沖合相応の群来鯡の由訴出候、

三月十九日、〈宿〉工藤庄兵衛、〈泉州堺〉酢屋之手船宝翼丸忠蔵、去秋中秋田米千八百俵積下り、直段程能売上候付、御満足被思召為御褒美蝦夷錦壱巻被下置候、宿附添出ル、

一、市中橋詰広小路等ニ而餅菓子売候家台の義、近来甚敷相成、大振りニ而右家台其場所へ置付致候もの多分相成、怪敷事共有之、不取締ニ付、已来者前々之通家台小振り手軽いたし、夜分者四時限り引取、自分家の裏なとへ片寄候様ニ可致段、同勤一同名主共談の上其筋へ可申付積り、名主宮川半右衛門・中林九兵衛両人江達ス、

一、川原町薬湯風呂源六、兼而御聞済相成居候導明寺弐百俵出来仕候間相納度旨申出候間、近藤吉左衛門殿江申上候処、名主差添、内御役所へ相納可申、後刻相詰候上、御勘定方へ相達候趣共被仰聞候間、尤、当年者初発ニ候間、已来年々相納候事故、通相拵請取印内下代中ゟ年々相記もらい候様可致趣共申聞候、

一、西館町〈丁代〉清吉義、不行届之儀有之、過料銭弐貫文被仰付奉恐入候、依而已来者御用向入念為相勤可申奉存候間、何卒御慈悲之御沙汰被仰付度旨、町代一同連印之願書差出候間、奥印いたし、吟味役衆工藤茂五郎殿差上候処、預置候趣申聞候、

三月廿三日、旅人宿喜右衛門ゟ書付を以、是迄無判の旅人并渡海人風待中、私方へ御預ケ被仰付、去申八月中ゟ当三月迄凡百三十人程白米ニ而壱石弐斗程相賄罷在候得共、是迄者御冥加与奉存居、手限りニ而取拵候へとも、当春者雇主無之旅人も多人数罷越候趣承知仕候、左候へ者追々当所へも相廻り可申、尚又、先達而住宅類焼仕、此節旅人差置候様之手広ニ住居不申候へ者、追而小家掛ケ仕候而も差置候様可仕、依之已来者壱人付玄米三合ツヽも御救米風待中被下置候様仕度趣願書差出候間、奥印いたし、近藤吉左衛門殿へ差上置候、

一、市中備米御蔵御普請付掛り無之候而者御締も不宜候旨、近藤吉左衛門殿へ申立候処、御談之上、左之通被仰付候、

博知石町土蔵掛り加藤専右衛門、〈三番板蔵〉掛り宮川半右衛門、

右之通御直に被仰付候、追而手続申談候積り、

一、市中小前之もの共米払底付難渋仕罷在候処、以御憐愍御救米并直安之御払米等被仰付難有奉存候、依之此節追々入米も御座候得共高直ニ而小前之もの共壱升買仕候ニも難渋仕候間、市中備米之四百俵御蔵出ス被仰付度と

奉願上候、尤、直段之義茂凡十三匁二分六り仕上納仕候間、右ニ而夏分代り米御買上ケ被遊、御蔵入被成下置度趣、町代共一同ゟ度々願出候間、何卒以御憐愍右願之通り御蔵出ス被仰付候へ者三百俵小売米ニいたし、百俵者先達而廿匁七分ニ御買上ケ被成置候米之内百俵御用達預り置候分とたき合凡十七匁位ニ而中通之もの江俵売為致度趣、御用達・名主・請負人共ゟ連名ニ而書面差出候間、奥印いたし、差上、巨細之通り、

一、御備蔵出ス御米〈凡四斗入〉三百俵、此石百廿石

内、九石六斗〈斗り立〉減米八分引正味百拾石

直段十四匁四分積り、〈壱升付〉百八十文売、

代千九百八十七貫弐百文

一、俵売米〈凡四斗入〉　弐百俵

内訳　百俵　御蔵出ス

百俵　買上米

代千七百貫文

二口合三千六百八拾七貫弐百文　内、千三拾五貫文　買上米百俵代引

直段廿匁七分

残弐千六百五拾弐貫弐百文

右者御蔵出米高四百俵代如此平均直段十三匁二分六り

四斗入壱俵付代銭六貫六百三十文

右者市中小前の者江払方凡積り書面之通御座候、以上、

酉ノ三月　連名ニテ但略写、藤野喜兵衛、西川准兵衛、加藤専右衛門、宮川半右衛門、田中九八、中林九兵衛、野坂吉六、仙北屋仁左衛門、山田屋文右衛門代文治

一、旅人宿喜右衛門ゟ渡海人御預ケ相成候旅人追々多可相成哉付壱人付御米三合ツヽ被下置度願書差上候間、奥印いたし差出候処、新井田嘉藤太殿儀、昨日松前内蔵殿方へ罷上り候処、御内意御意も被為在候趣有之候間、近藤吉左衛門殿へ口上ニ而願下ケ之儀奉申上候処、御承知ニ而御用ノ間江被仰立候処、御下ケ相成候間、名主半右衛門江下ケ遣候、

一、鯡之儀、前浜于今一度も漁事無之候付、名主一同ゟ市中人気も有之候間、町年寄四人限りニ而今一応神事修行致呉候様申聞候間申合金弐両御初穂差上ケ、木村兵部方ニ而蛭子尊相祭、私共一同、名主一同、町代一同参詣いたし候、尤、御内々ニ而此旨新井田周治殿へ御噺申上候、

三月廿五日、市中御備米蔵ゟ四百俵蔵出ス小前之もの江俵并升売ニ仕度旨、尤、廿匁七分ニ買上ケ候分、御用達預ケ候分与割合いたし候而売払申度義、願之通被仰付候間、此旨名主半右衛門相達、内御役所へ申合候間、天気次第蔵出ス之積り、尤、立会并人足手配名主方ニいたし罷在候、〇此間願済相成候市中備米、生府町壱番蔵ゟ昨日御米差出候、

一、高九百九十九俵口　越後柏崎米三百俵　市中小売米ニ出払

元升四一壱五入

同断俵売出払

元升四二壱五入

一、高四百十六俵口　越後館林米百俵

都合四百俵出払

右者御目附谷梯九十九殿、内御吟味役大場伝左衛門殿、町年寄桜庭梅太郎・張江又八、其外名主、町代、猶又、御用達行司、請負人行司立会ニ罷出候、右四百俵伊達林右衛門・西川准兵衛・岩田金蔵三軒へ割合預ケ置候、右之趣御番蠣崎四郎左衛門殿へ申上候、

一、当御役所御囲内江植付候松之間遠キ処へ、猶亦松相違なく植付候様被仰付候間、名主九八江申達候、

三月廿九日、〈宿〉近江屋忠右衛門、〈秋田ノ〉清蔵舟、秋田米〈三斗入〉九十俵積入通り船の旨書上、

一、龍雲院東側の塀有来ゟ引籠相建候様被仰付候間、則同寺へ相達、

一、中川原町善七、同町又四郎両人書付を以、非常為用意火消人足六十人相備申度、右仕法別紙ニ相認メ、入用として月々市中壱軒ゟ銭弐百文ツヽ、御取建被下度趣付、名主之存念相尋候処、右願書御聞済相成候而も已ニ先年之日掛銭も寄不申、殊ニ壱軒ゟ弐百文ツヽ取立之儀者迚も行届不申候旨、名主一同申出候間、右願書仕法書共御奉行所へ入御覧ニ委細町年寄、名主存念申上候処、至極尤ニ候間、右願書相下ケ候様被仰付候間、名主九八江相下ケ候、

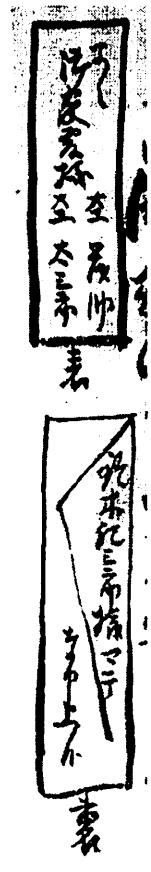
一、入米之儀付、御上様ニ而も御心配被思召候間、米下し方如何致候而可然哉、町年寄・御用達・請負人一同、町年寄宅江打寄相談之上存念申上候様被仰出候旨、蝋崎四郎左衛門殿ゟ御達、

一、山田屋文右衛門、サル・ユウフツ・アツケシ、右御場所、是迄栖原屋庄兵衛方ニ而証人仕候得共、此度米屋勝三郎、仙北屋仁左衛門、右両人ニ仕度願書差上候、内実者明後亥年ゟ御請負年季相改願書差上度ニ付、栖原屋庄兵衛義内通混雑有之候付証人相除可申趣候へとも、元証人ゟも熟談の上証人相除候書面差出不申候而者御沙汰不相成旨、蝋四郎左衛門殿ゟ御達候、依而夏中秋ニも相成候ハヽ夫迄ニ者栖原屋方も善悪相片付可申候、其節之事ニ可仕候、悪敷ハ御扱被成間敷趣共被仰付候、依之右願書文右衛門手代半平江下ケ遣候、

一、龍雲院東手之塀普請付、是迄ゟ成丈引込メ可申趣御沙汰付、御目付谷梯九十九殿、下代村山重左衛門、右両人三月廿七日見分相越、然処、法幢寺境大木之杉是迄石垣形も有之旁々十分ニ者引込かたく、依而六寸引込メ可申趣、麁絵図相添同寺ゟ差上ル、則御聞済相成、願書并絵図差上置候、

一、馬形はたて町瀬戸焼継屋之庭江落書之由、町代ゟ名主吉六へ差出候趣、

〔左図有〕



右之通之封書有之、未明役所差上候処、表書名当有之候間、下ケ可遣旨被仰聞候間、野坂吉六へ下ケ遣候、

但、中川原町茶屋大坂屋新左衛門抱子とみ、西館町之もの二而病死いたし候内実紛敷一件の由、

四月朔日、中川原町なつ、常盤屋久治郎後家ナリ、右者妙見宮東手江葭簾張茶店小家去申年迄三ヶ年御聞済之処、猶又当酉年ゟ丑年迄引続願書差上候、

一、芝居之もの拾七人江米壱俵、阿部屋伝次郎ゟ相渡ス、

四月三日、今八ツ時、唐津内潤初鯡群来、夫ゟ泊川潤、暮方ニ相成、大沢辺ゟ弁天迄一円群来、鯡取之者共取揚致候処、先相応之鯡ニ有之候、

一、茶屋常盤屋久治郎小家掛、願之通り被仰付候、

四月四日、小松前町六兵衛先番に書付を以、市中下肥貰請能州江為積登申度趣、能州百姓中ゟ六兵衛迄相願候付、右之趣六兵衛ゟ願書差出候、尤、御冥加として浜辺川筋肥塚等被仰付次第掃除仕度、追々作合宜敷相成候へ者

壱ヶ年米三十石ツヽ上納仕度趣、津出し等之義迄も願の通御聞済相成候旨、新井田周治殿ゟ御達有之候間、半右衛門願合付、田中九八江申聞置候、

一、昨日鯡群来候付、町御吟味役并拙者とも之内桜庭梅太郎罷出、浜辺御見廻り被成候、殊に今日鯡御見物として松前三郎兵衛様御越之旨、新井田周治殿ゟ御達付、為含之名主吉六江申聞候、

四月五日、今日生府澗内ニおゐて鯡群来、一昨日と者格別けらかゝり之よし、鯡取之もの一同相悦候旨、町代ゟ申立候、

四月七日、下ノ関辺、庄内辺之内ニ而米買下し方手配并出金方共被仰付候、尤、上ニ而も御手配被為在候間、何分一同申談、重達候御用達・請負人・問屋共之内罷登可申趣、蠣崎四郎左衛門殿被仰渡候、

一、金弐千両　御用達六人　一、金千両　請負人一同

一、金千五百両　市中重立候もの江　一、千五百両　御上ヨリ

都合金六千両

右之通候間、向ニ而割合之上出金可致旨申付遣候、

一、市中在々備米付、西在清部村八治郎ゟ壱ヶ年金弐両被仰付、昨年相納候へとも、当年之儀者殊之外難渋ニ相成候付出金御免被下度旨、当時在方掛り奥平永次兵衛・中村孫平、両人度々見廻り先ニ而見聞いたし、難渋無相違趣申出、同役相談の上、蠣崎四郎左衛門殿へ申上候処、御用之間江御窺の上、御免被仰付候、

一、市中在々備米付、吉岡村問屋船屋久右衛門、平沢屋治三郎、右両人壱ヶ年金壱両宛出金窺の通前同様被仰付候間、両人呼寄、於詰所ニ奥平永次兵衛立会の上申達候、

一、当年茂米価高直の上、下り不足付、蝦夷地勤番之士中始、支配人、番人、稼方ニ至り迄三度ツヽ粥を給、蝦夷介抱之儀者半分通り魚るいを以手宛いたし候様被仰出、勤番中江者御奉行衆ゟ御用状御差立ニ相成候間、御用達・請負人ゟ茂場所々申遣候様、蠣崎四郎左衛門殿御達付、御用達・請負人江申達候、

四月十日、此度入米之内、三ノ壱御買上ケ被仰出候趣、蠣崎四郎左衛門殿ゟ御達御座候、則左ニ、

一、青森ノ重兵衛舟　本庄米　升三斗八升入百廿八俵　宿工藤庄兵衛
直段廿匁

一、庄内米　五斗入百俵　岩舟ノ専右衛門舟　宿京屋平八
直段廿匁五分
百九十俵

一、高崎米　品川ノ才助船　宿大津屋武左衛門
直段廿壱匁五分
八十俵

一、三田米　脇川ノ幸次郎船　宿広嶋屋布右衛門
直段廿壱匁
五十俵

一、白米　同船　右同人
直段廿二匁五分
弐百四十九俵

一、越後蔵米　黒嶋ノ太助舟　宿広嶋屋布右衛門
直段廿壱匁五分
九十壱俵

一、三田米　同船　右同人
直段廿壱匁
弐百十俵

一、庄内蔵米　加州湊ノ孫左衛門舟　宿工藤庄兵衛
直段廿匁五分

〆千九十八俵

右高之内、三ノ壱御買上ケ相成候、尤、米高書付、昨日御下ケ直段書付申上候様被仰出候間、下ケ札を以今朝直段書上候処、御買上被仰出候、

一、本庄米三百八十俵、直段十九匁三分、宿工藤庄兵衛

右者江指約定米ニ而積下り、当所へ入津いたし、同所へ相廻り候ニ不及積り相成候間、不残御買上被成下度旨、庄兵衛ゟ申出候間、今朝申上候処、御聞済之上、前同様御買上ケ被仰出、則庄兵衛へ相達、

一、此間下し米手配之ため金弐千両御用達、金千両請負人出金方被仰付候処、御用達仲間出金之割合不取究候付、昨日如何可仕窺出候間、其段御奉行所へ申上候処、御沙汰之上、双方共金千五百両宛之出金ニ被仰付候、依之御用達・請負人一同呼出ス申達候、

一、東西村々草鞋御備被仰付候分、代銭〆高金七両二分書上候処、内御役所江御達相成候間、請取ニ罷出候様、蠣崎四郎左衛門殿ゟ御達候間、在方掛り奥平永次兵衛へ申達候、

一、工藤庄兵衛ゟ本庄之三ツ森米七百俵、直段廿匁五分ニ而御買上ケ被仰付候、

四月十三日、市中米不足付、已来米入込候様ニ工夫可致義者、先頃御奉行所ゟ［抹消有］御達有之候、右ニ付、

御上様ゟ金千五百両、御用達ゟ金千五百両、請負人ゟ金千五百両、市中重達もの共ゟ金千五百両、都合金六千両を以、下ノ関へも立船両艘も差遣し、爰元江も金三千両も差置、入米来り次第買取候半々、右商内はか取、金子等も早速相渡候儀迄も中国筋へ相響候ハヽ、此後入米も相応に入込可申之考付、御沙汰被仰付、依而右金子急キ相備可申候付、昨十二日、市中重達もの江金千五百両之出金申渡候、内訳別帳有之候、壱人者金高書御印紙相渡申候、追而米ニ而可相渡義も申付遣候、

一、芝居之もの江合力米、秋田米壱俵栖原屋庄兵衛方へ書付差出ス、田中九八江相渡ス、

一、御船叶丸下ノ関江米買入ニ金弐千両為持船頭へ相任せ可遣趣御聞済相成候、此段岡田半兵衛へ相達、

一、当所へ金子備置、米下り次第買入可申儀も、伺之通御聞済相成候、

一、西川准兵衛ゟ書付を以、羽州矢嶋表ニ而兼而買置候米弐百俵本庄へ川下ケ致ス、夫ゟ積下ス申度、態々手船住吉丸差向候得共、若亦此節から之事故、津留等有之候而も無滞積下し申度、猶又、尤、右弐百俵斗りニ而者船積都合も不宜候間、余者本庄表ニ而時相庭を以七百俵斗り買入致、罷下り申度奉存候間、右等之儀差支無之様御添状被下度旨願書、蠣崎四郎左衛門殿へ差上候処、上々御米ニも無之候間、各限り彼地町役人江書状遣候而相認メ、西川准兵衛手代呼出ス相渡候、

一、蔵町川内屋徳兵衛書付を以、是迄質座渡世仕候得共、近頃内通金操不宜、渡世向如何可仕哉ト細々取続罷在候処、当春出火之節、同職之もの類焼仕候方者質取断候趣ニ而、日々徳兵衛方へ難渋者質置罷越候由、然処、格別之持合金も無之、商売体難渋ニ御座候間、御時節柄奉恐入候得共、御金五百両来戌年七月迄拝借被仰付度旨、尤、何時ニ而も御用之節者可奉上納、万々一及遅日候義も有之候節者証人ゟ可奉上納候へとも、尚為御安堵抱地面古券五通拙者共迄差出置候趣、徳兵衛并証人河内屋増右衛門此節箱館行代喜兵衛、名主九八連印之書面江奥書の上、蠣崎四郎左衛門殿へ差上候、

一、伊達林右衛門・小川九兵衛両名ニ而此度北蝦夷地蝦夷介抱物積入、野辺

地ノ専右衛門船差下し候付、同所残物(シナ)并漁具其外共取調之ため、両人ゟ手代壱人ツヽ差遣申度、依之渡方栖原屋庄兵衛ゟも壱人差遣可申儀与存、及挨拶候処、差遣候ニ及間敷旨申候間、又々申遣候ニ者、先年之振合も有之候間、是悲差遣し被成方可有之趣申聞候へとも、同様手代差遣候儀ニ及不申趣返事付、庄兵衛ゟ手代差遣不申候而も私共ゟ取調ニ差遣候儀ニ可有之哉、如何仕候而宜敷候哉、此段御下知次第仕度趣伺書差出候間、昨日蝋崎四郎左衛門殿差上置候処、今日御下り之節、右之儀者御沙汰之上、庄兵衛ゟ差遣不申候とも為取調子手代共壱人ツヽ差遣候而不苦候、巨細相調書記候様可致御達付、小川九兵衛呼出ス申達、尚、林右衛門へ者其方ゟ通達可致様とも相達、

〔奥端書〕「天保八ノ十一」

〔端書〕「天保八ノ十二」

一、北蝦夷地之儀者於江戸表紀州様ヨリ御願入付、昨年迄之通り、伊達林右衛門・栖原屋庄兵衛両人江御預ケ被仰付候、尤、当年之儀者時節後レ候間、明年右様被仰付候共此節江戸表へ申遣、未タ返書も至来無之候間、返書至着次第表向可申渡候得共、内々拙者共宅江呼出ス為心得可相達置様、蝋崎四郎左衛門殿ゟ伝兵衛・梅太郎・又八三人江被仰聞候、庄兵衛義者御場所証人致候山田屋文右衛門江内々為心得、尚又、林右衛門・九兵衛両人江も可申聞候間、村山伝兵衛宅江呼出ス三人江申聞ル、

一、中ノ間御先手組ニ而積石いたし候内、此節難渋之方、別名前の通、〈壱人付〉壱俵半ツヽ御蔵出ス願の通被仰付候趣、蝋　四郎左衛門殿御達付、

一同心得居申候名前左之通、松崎太次右衛門、木村平太夫、尾山多左衛門、板垣新三郎、谷梯小左衛門、林八郎、天野喜右衛門、上原唯吉、畑久三郎、藤原定一郎、〆十人

四月十八日、宿工藤庄兵衛、加州ノ市三郎積下り候秋田米〈三斗入〉五百三拾俵御買上ケ被仰付候間相達、尚又、京屋平八、近江屋忠右衛門、大津屋武左衛門、阿部屋利兵衛、広嶋屋布右衛門、右宿船々八艘分積米之分勝手次第払ういたし候而宜旨相達、

一、川内屋徳兵衛拝借金願上候処、御金都合茂不宜、其上御米買入方等ニ付被仰付かたく趣を以、願書御下ケ相成候、

一、小川九兵衛罷出、昨日北蝦夷地之義者明年ゟ一昨年迄之通り栖原屋方へ御預ケ被仰付候旨御内々被仰聞候間、林右衛門共ニ同所へ手代壱人ツヽ差遣候義者見合候旨申聞候間、此趣申立候処、其儀者承り置候間、私共ゟ栖原屋へ亭主無之、御用弁差支候間、庄兵衛其侭亭主致候哉、又者同人徳兵衛方ニ而不相済儀有之候ハヽ店之内壱人見立候而此節可申立筋ニ候間、都合能キ時節故内談致見可申候、尤、右様心持も宜可有之候間、得与申聞、取極メ候方宜旨、御奉行所御揃ニ而御噺被成候故、同役共申合、工藤忠兵衛私共限りニ而呼寄、昨日之様子共相噺候上、栖原屋方へ罷越候間、前後共様子相含、宜取斗呉候様内談致遣候、

一、諸士積米之内、拾人江拾五俵、今日生府壱番蔵ゟ差出相渡候、桜庭梅太郎・張江又八、名主専右衛門罷越候、

一、法幢寺ゟ大本山永平寺江遣候金五両、願之通御寄附被遊候付、役僧相達、内御役所ゟ直々請取候様御達、則相達候、

一、長者丸昨春江戸下り之節鉄炮打候旨御調相成候処、内済相成候付、此間罷下り候而様子申上候処、右両人之水主者大坂ニテ暇差遣申候、百蔵儀者慎居候趣書面ニ而申立候得共、慎御免被仰出候、藤野喜兵衛へ此段相達候、

一、御船叶丸下ノ関差遣、米買入候而積下り候処、空船ニ而為登候ゟ夷地へ一ト上下遣登り候上、積入之侭同所へ遣、夫ゟ米買入候得者目立不申候間、宜可有之候、尤、御船登り方延引ニ候時者御用達中之内手船壱艘代りとして夷地ゟ登り候侭、同所へ為差登、米手配仕候趣、昨日御伺申上候処、御聞済相成候、尤、岡田半兵衛ゟ申立候間、同人江此旨相達置候、

一、北蝦夷地之儀、此間山田屋文右衛門ヲ以明年ゟ栖原屋方へ昨年之通り御預ケ被仰付候旨、御内御達付申遣候処、今日右之趣栖原屋へ申聞候処、難有奉存候間、宜申上呉候様申居候故、此段蠣　四郎左衛門殿へ申立置候、

一、御状壱封法幢寺渡分蠣崎重郎（右）左衛門殿ゟ請取候、

永平寺　　松前隆之助内
鑑院様　　新井田周治
　　蠣崎四郎左衛門

右同寺役僧呼出ス相渡候、

一、御用達手船之内壱艘夷地ゟ登り次第、下ノ関差立候儀相達候処、行司西川准兵衛・岡田半兵衛手代罷出、御請いたし候、尤、両人病身付、代もの罷出候、

一、阿部屋茂兵衛書上　秋田米九百俵、讃州粟嶋ノ善五郎船、

内、四百三十俵請負人江取組、百七十五俵船宿・小宿飯米、

差引残り

弐百九十五俵、直段廿二匁ニ御買上ケ、

一、越中水橋ノ権吉、宿京屋平八、越後米三百五十六俵書上之内、

内、百俵諸方飯米願合之分、残り弐百五十六俵、

右二口、今日御買上ケ願申上候処、願之通御聞済相成候間、両問屋へ相達、

一、工藤庄兵衛ゟ三ツ森ノ嘉兵衛船、秋田米五百三拾俵口、

内、三拾俵船中飯米、残五百俵、直段廿弐匁五分、

右者此度御買上ケ被仰付、直段之儀御尋御座候処、船頭へ精々掛合の上、今朝申出候間、其段申上候、

一、諸士積石之内、中ノ間廿四人、御先手席三十六人、都合六十人ゟ此度願書差上、御聞済相成、壱人江積米壱俵半宛相渡候様、周治殿ゟ御達付、御用達・名主・請負人江も申達候、

一、近江屋忠右衛門ゟ越中ノ伊三郎船、本庄米三百俵、直段廿三匁五分、

内、弐百俵御買上ケ願、百俵市中売仕候、

右之通御買上願出候間、申上置候、

一、京屋平八ゟ越後米弐百五十六俵、昨日御買上被仰付直段相尋候処、廿四匁ニ相成候由申出候、

一、長尾所左衛門昼八ツ過三厩ゟ至着、青網乗物ニ而浜ヨリ当御役所へ連参り、御吟味之筋有之、揚家入被仰聞候趣於御白洲（洲）被仰渡候、江戸表ゟ差添、御目付新井田貞治殿、御徒士太田九兵衛、其外御足軽罷下り候、一、所左衛門喰物、豆腐、生魚、醤油之るい、町方頭取ゟ申出候ハヽ相渡候様御吟味役ゟ御達、

一、所左衛門所持金四十両也、但、不残壱分判ニテ一封、紫縮緬帛紗壱、証文四通（内、弐通栖原角治、弐通林七郎兵衛）、右之品々御吟味役新井田嘉藤太殿御渡付、御預り戸棚江入置、尤、除金へ帳合いたし有之候、

一、近江屋忠右衛門ゟ昨日御買上相願米之儀、御用無之付、勝手に売捌候様

被仰出候間、同人江相達候、

四月廿七日、栖原屋庄兵衛ゟ江戸之仲蔵儀、去申年六月罷下り、身元引受工藤忠兵衛ニ而此度家内入仕度願書差出候間、奥印いたし、蝸崎四郎左衛門殿へ差上候、

五月朔日、栖原屋庄兵衛書付を以、去未年八月中、私壱人北村徳兵衛ヨリ私江支配為仕度段以書付奉願上候処、願之通被仰付難有仕合奉存候、然者其後病身ニ而御用等難相勤、甚難渋奉存候、依之恐多奉存候得共、家内ノ仲蔵ニ支配相続為仕度奉存候間、乍恐御慈悲を以願之通被仰付被下置度趣、庄兵衛并親類山田屋文右衛門、名主半右衛門加印之願書奥印いたし、新井田周治殿へ差上候、

一、前庄兵衛ゟ差出候処、仲蔵相続方願之通被仰付候、

五月三日、栖原屋仲蔵儀、節向も間近候間、御目得願可仕之処、当時病身ニ付追而御席之砌願書差上度旨申出候、

一、法源寺・龍雲院・寿養寺、此節売米払底之上寺納物無之、買入差支難渋仕候間、当年御寄附米之内前拝借被仰付度旨法幢寺奥印之願書、新井田周治殿へ差上候処、右様之願者御取用ニ不相成候間、下ケ遣候様被仰付、則役僧へ申達候、

一、昨日江戸表ゟ御便り有之、今日御渡相成候、法幢寺行、左之通、

奥州松前
法幢寺　大中寺
公用

中切紙江認メ、左ニ、

覚
一、金子入封印状　壱通
但、別封金百五両入添、
奥州松前　法幢寺
法源寺ゟ
高龍寺
右之通慥ニ受取申候、以上、
酉ノ三月廿九日
大中寺役僧
天郎大印
御名様
御留主居中様

覚
一、渋紙包　壱
右之通慥受取申候、
以上、
三月廿八日
金地院
取次方
御使中

右者法幢寺役僧呼出ス相渡、尤、大中寺ゟ書状之受取者早速差出候様申聞候、

覚
一、板挟封状　壱通
右者慥受取申候、以上、
酉三月廿九日
大中寺
役僧

覚
一、紙包　壱封
右者御国許法幢寺ゟ之壱封御届被下、慥落手仕候、為念之如此御座候、
以上、

法幢寺方丈

龍穂寺
役僧

御名様
御留主居中様

五月四日、藤野喜兵衛・西川准兵衛連名ニ而羽州本庄辺ニ而兼而約速（ママ）致置候米為積取、先達而准兵衛手船差向候処、于今下着も無之、尚又、此度喜兵衛手船栄昌丸差遣申度候付、兼而約定者致置候得共此節柄之事故万一違乱等有之、津出難相成候儀も出来候節者御廻米之積を以同所出帆仕度奉存候間、御印弐本拝借仕度趣書面今朝差上候処、御聞済相成候間、内御役所へ可遣旨御達有之、則両家分共藤野喜兵衛へ相達、

五月六日、京屋平八手代宇三郎義、昨年中御買上ケ米被仰付候節不調法の義有之、銘々限り呵申付候処、暇差遣し置候よし、然者此節平八留主之内、手代三人引籠罷在、勿論宇三郎義者暇相成、誠ニ凌方難渋仕候間、御憐愍之御沙汰被仰付度趣、問屋頭取ゟ願書差出置、度々相歎候付、同役談の上、巳来決して右様之義無之様可申付旨、頭取呼出し申付候上ニ而、今日宇三郎儀御免申渡候、

五月七日、明年御巡見御下り被成候付、御城下付東西村々道橋御普請有之候間、追而御見分として御越被成候方御座候故、場所々ゟ鯡取之もの帰着之頃御出被成候間、程能節可申立旨、蠣崎四郎左衛門殿御達有之候故、名主一同江此旨相嘶置候、

五月八日、広嶋屋布右衛門、宿船本庄米百七十俵廿四匁に御買上ケ被仰付候間、此旨可相達様御手紙を以御申越、則相達ス、

五月十三日、大津屋武左衛門ゟ御買上ケ願出候越後米弐百五十俵之内、百俵直段廿六匁ニ而御買上ケ被仰付度趣、先番ニ申上置候処、此分御用無之旨御達相成候、

五月十六日、先達而当所江入米沢山ニ相成候手配方有之哉、相談の上申上候様、町年寄・御用達・請負人江被仰付、相談いたし候頃、御用達・請負人限りニ而越中之孫四郎船江金千両為持、下ノ関江買入ニ遣候処、此度積下り候間、俵高之内、御入用丈ケ御買上ケ被仰付度旨、御用達・請負人ゟ申出候付、蠣崎四郎左衛門殿申上候俵数左ニ、

九州米　取合　九百三十三俵
麦　取合　三百六十三俵

但、右之内二分通り者御用達・請負人ゟ金子為登候分、三分一者船頭所持金ニテ買入候付時々相庭ヲ以買入、約定米者廿五匁弐、三分、麦者十弐、三匁ニも可相成哉之中考ニ申出候、

五月十七日、㊐船米直段廿五匁、麦直段拾四匁、右之通り宿近江屋忠右衛門書上候、

一、工藤庄兵衛ゟ秋田米六百俵之内、三百俵直段廿三匁いたし御買上ケ被下置度旨願書上ル、尚又、忠右衛門ゟ秋田米千弐百俵之内、六百俵直段廿三匁五分いたし御買上ケ被下置度段、前同断、

一、江指宿大西屋文右衛門相企候付、川原町住居三條屋三蔵相勤申度趣願出候段、宮川半右衛門ゟ申立、尤、先日同所町年寄斎藤佐八郎当地へ罷越候節、御役所近キ所之もの御身立被下度、可相成者横町・川原町・中町辺に仕度様相嘶候間、其節名主中申談置候処、右三蔵願出之趣申立候間、同勤相談、添状相渡候、

五月廿二日、去春芝居小家前通川原おゐて鈴木紀三郎殿雇家来江戸之勝五郎を打擲手疵ヲ為負候一件之もの、今日御仕置被仰渡候、左ニ、

西蝦夷地リイシリ江遠嶋〈元梁川当町、仙台之〉　善吉
ヲコシリ江遠島　箱館仲町百姓　林蔵
押込　蔵町旅人宿　甚太郎
押込　中川原町茶屋　徳蔵
当所構　横町百姓　定吉
渡海　南部盛岡出生　奥五郎
両人所払　川原町　甚三郎
当時蔵町住居　川原町　善三郎
急度叱　越後新潟役者　大吉
秋田久保田　蔵町甚太郎雇　鶴蔵

右之通被仰渡候、依之兼而芝居役者共男女十七人帰国御差留御座候得共、此所勝手次第帰国為致候様御吟味役工藤茂五郎殿御達付、名主九八江申達候、

五月廿四日、栖原屋仲蔵方ゟ同勤共江内願之趣北蝦夷地去年中之残荷物積取ニ伊達林右衛門方ゟ先日広嶋屋布右衛門宿船相下ケ候付、右船登り候半々是迄之通荷代両家ニ而半分ケ仕度、林右衛門方へ度々願合候へとも承知無之候間、内々林右衛門方へ御願被下度旨、仲蔵ゟ申出、同勤共内談之上、林右衛門江昨日内願いたし遣候処、右船之儀者先々ゟ栖原屋へ申談候へとも、其節者江戸表ゟ御下知無之而者取斗兼候旨申候ニ付、追々時節後レニも相成候間、栖原屋へ不抱後日如何様之儀出来候共覚悟の上船差下し候儀、殊ニ者唯今ニ而も栖原屋ニ而積取舟下し候義者少も彼是差支不申事候間、荷代相分ケ候義難出来段、昨日林右衛門申出候付、委細仲蔵代友三郎へ申聞候、

一、法幢寺書付を以、一昨年出火之砌、法器并諸道具共焼失仕候付、御普請被下置候間、右焼失の法器諸道具共相揃申度奉存候間、当所・江指・箱館、其外在々之配末一同へ御免勧化被仰付度奉願上候、尤、御聞済相成候へ者直々罷出相願申度趣書面蠟　重郎右衛門殿へ上ル、

一、昨日、江戸為替被仰付候金高改而左之通、

金九百両　藤野喜兵衛　金五百四十両　伊達林右衛門
金三百両　栖原仲蔵　金五百五十両　山田屋文右衛門
金弐百五十両　米屋勝三郎　〆金弐千五百四十両

一、ヲクシリ請負人荒屋新左衛門ゟ同所ニ而新鱈釣り、当冬中ゟ新鱈相仕立候間、立船いたし、同所ゟ江戸直艘被仰付候ハヽ別而都合能行届難有奉存候間、御免被下置候様願書差上候、

一、下ノ関辺江御用達手船の内罷登候節米買下し仕度付、市中ヨリ五百両之分者当所ニ而丸竹船積米之内買入致度付此分相除、其余御上様ニ而五百両、御用達・請負人一同ゟ千両都合ニテ遣申度、一同申談候間、伺書者私共ゟ連名ニ而書面上ル、

一、越中善右衛門舟積米秋田米弐百六十五俵、直段廿一匁五分、同国八郎右衛門船同弐百俵、直段同断、宿近江屋忠右衛門、

一、荘内米四百五十俵升五斗二升入、直段廿二匁、内百廿俵入船、
但馬ノ五三治舟積来之内、三百三拾俵通船同所ノ五兵衛積来、

右者大津屋武左衛門ゟ御買上ケ願出、

一、工藤庄兵衛ゟ願上候庄内蔵米五百俵、直段廿二匁三分ニ而御買上ケ被仰付候趣御達、

一、近江屋忠右衛門ゟ願上候秋田米弐百俵、直段廿壱匁三分ニ而御買上ケ、

尚又、大津屋武左衛門ゟ庄内米四百五拾俵、直段廿二匁ニテ同断、

六月四日、江戸表ゟ御触面大坂一件、大塩平八郎并忰格之助、瀬田済之助、渡辺良左衛門、近藤梶五郎、庄司儀右衛門、大井正一郎、右之者共御召捕、又者自滅等いたし候間、已来尋ニ不及、河合郷左衛門儀者弥無油断僉儀可致御触并時疫ニ相用へ御救薬法之御触共、寺社・町在・蝦夷地・上ノ国とも差出候、左ニ、

触書

当二月十九日不容易企ニおよひ大坂市中所々放火いたし及乱妨候大塩平八郎、大塩格之助并右荷胆いたし候もの共行衛不相知候付、其次第人相書を以追々触渡置候処、平八郎父子、且、瀬田済之助、渡辺良左衛門召捕、又者自滅等いたし候間、右之もの共最早相尋候ニ不及候、尤、大井正一郎、河合郷左衛門儀者弥無油断相尋、都而最前相触候通可被心得候、

酉四月

右之通可被相触候、

当二月十九日不容易企ニおよひ大坂市中所々放火いたし及乱妨候大塩平八郎、大塩格之助并右荷胆致候もの共行衛不相知候付、其次第人相書を以追々触渡置候処、平八郎父子、且、瀬田済之助、渡辺良左衛門、近藤梶五郎、庄司儀右衛門者自滅等いたし候間、右之もの共者相尋不及、大井正一郎、河合郷左衛門者無油断相尋候様尚又触渡置候処、正一郎儀も召捕候間、最早相尋不及候、郷左衛門者弥無油断相尋、都而最前相触候通可被心得候、

酉ノ四月

右之通可被相触候、

右之趣、今般従江戸表申来候間、向々不洩様可被相触候、

○時疫流行候節、此薬を用て其煩をのかるへし、

一、時疫に者、大ち[2]ふなる黒大豆をよくいりて壱合、かんそう壱匁、水ニてせんじ出ス、時々飲てよし、

右医涯ニ出る、

一、時疫にハ、茗荷の根と葉をつきくたき、汁をとり、多く飲てよし、

右時[ヰ]後備急方ニ出ル、

一、時疫にハ、牛房をつきくたき、汁ヲしぼり、茶碗に半分ツヽ二度飲て、其上桑の葉を一握程火ニて能あぶり、黄色ニなりたる時、茶碗に水四盃入、弐盃ニせんじて一度飲て、汁[ヱ]をかきてよし、若桑の葉なくハ枝ニ而もよし、右孫真人食忌ニ出ル、

一、時疫にてねち[2]殊の外つよく、きつ[2]かいのことくさわきてくるしむニ者、芭蕉の根をつきくたき、汁をしぼりて飲てよし、

右時[ヰ]後備急方ニ出ル、

○一切の食物毒ニあたり、又、いろ〳〵の草木、きのこ、魚、鳥獣など喰煩に用て其死ヲのかるへし、

一、一切の食物の毒ニあたりくるすむるに者、いつたる塩をなめ、又者ぬるき湯にかきたて飲てよし、

但、草木の葉を喰て毒ニあたりたるにハいよ〳〵よし、

右農政全書に出ル、

一、一切の食物の毒ニあたりて、むねくるしく腹張痛にハ、苦参を水ニて能せんじ飲、食を吐出してよし、

右同断、

一、一切の食物あたりくるしむに、大麦の粉をこふばしくいりて、さゆにて度々飲てよし、

右本草綱目ニ出ル、

一、一切の食物にあてられて、口鼻より血出てもたへくるしむニハ、ねきをきさみて、壱合水ニてせんじ、ひやして幾度も飲て、血出やむまて用てよし、

右衛生易簡ニ出ル、

一、一切の食物にあたり煩に、大ち(ち)ふなる黒大豆を水にてせんじ、幾度も用てよし、魚にあたりたるにハいよ〳〵よし、

一、一切の食物毒にあたり煩に、赤小豆の黒焼を粉にして、はまくりかいに一ツほとツゝ水ニて用へし、獣の毒にあたりたるにハいよ〳〵よし、

右千金方ニ出ル、

一、菌を喰あてられたるにハ、忍冬の茎葉とも生ニてかみ、汁をのミてよし、夷堅志ニ出ル、

右之薬方、凶年之節辺土之もの雑食の毒にあたり、又、凶年の後必疫病流行事あり、其為に簡便方を撰むへきむね依被仰付、書之内より致吟味出也、

享保十八辛丑年十二月

望月三英
丹羽正伯

右者享保十八辛丑年飢饉の後、時疫流行致候処、町奉行所へ板行被仰付、御料所村々江被下候写、

右者当時諸国村々疫病流行いたし、又者軽きもの共雑食の毒ニ当り相煩致難儀候趣相聞候、天明四辰年御薬法為御救相触候処、年久敷事故、村々にて致遺失候儀をも可有之候付、此度為御救右之写猶又村々江地頭ゟ可被相触候、

右之趣、今般従江戸表申来候間、此段不洩様可触知もの也、

酉六月三日

町御役所㊞

一、御巡見付御入用品々御注文被仰付候間、当御役所ニ而御入用之品々取調申上候様、蝸崎重郎右衛門殿御達付、同役并名主一同へ申聞候、

六月七日、川原町源右衛門ゟ芝居役者とも拾七人此度勝手次第渡海可致旨被仰付難有奉存候得共、去年中ゟ長々之難渋以御蔭相凌一同難有仕合奉存候、随而此度早速渡海可仕之処、難渋の上一重而已ニ而路用之手段も無之、迚も向地罷越義難相成仕合候間、此節柄江指表中渡之頃ニテ賑々敷趣承知仕候間、同所ニおゐて日数廿日此上ノ御慈悲芝居興行仕度、何卒格別之御憐愍を以御免許被仰付被下置度奉願上候、尤、甚太郎へ相談仕候へとも此節改而重相慎被(慎)有候付私ゟ願呉候様願合之由ニ而書面差出候間、内々御奉行所へ伺上候処、蝸崎四郎左衛門殿差出候而不苦候趣御噺有之候間、今朝同勤一同相揃候而右書面差上候、

五月廿九日、下ノ関辺ニ而買米御用達船の内、為登積下ス之儀金子遣し候趣
并市中ノ分金五百両者此方ニ而買米いたし度旨共、伺之通り御達有之、尤、
為登船の儀此節有之候哉可承旨被仰聞候間、藤野喜兵衛へ相達遣し候、
一、市中備米買入代金取立高金取調可書上旨被仰聞候間、名主へも此段申達
置候、
一、市中ニ而金五百両分此節買米致遣し可申旨被仰聞候間、町代并一同へ申
談取斗方可申立趣、名主半右衛門江相達、
一、下ノ関辺江御用達手船の内罷登候節米買下し方手配付金子為持遣候趣、
昨日申談遣し候処、藤野・宮川両人惣代として罷出、同所辺も追々下落ニ
相成、又、買積舟向へ候砌者格別高直に引上ケ候由承り候間、入津米余程
有之事故、当節見金ニ而買入候方可然様ニ委細申聞候間、明日私共一同ゟ
此旨申上候積り談罷在候、一、御用達行司藤野喜兵衛・宮川増蔵両人罷出
申立候ニ者、兼而被仰付候下ノ国江為登合の義、此節下ノ関追々米引上ケ
候趣相聞候、然処、此節御当所江入米有之、直段等買安き方ニ有之候間、
爰元ニ而御用達・請負人ニ而金千両分米買置仕度趣、下ノ関為登金之儀者
御見合被遊候様仕候而者如何御座候者哉与相伺候処、伺之通り被仰付候、
蠣崎重郎右衛門殿御達、
一、御用達ゟ伺之儀、米当所ニ而買入可仕旨付、則請負人も同様申談、爰元
ニ而買入米仕候半々、右銘々買入米高相届可申段申付候、
六月十四日、栖原屋仲蔵、五月廿六日願書差上候北蝦夷地囲荷物積取一件、
此節伊達林右衛門与熟談相成候付、願下ケ書面差出、則下ケ遣し、
一、御積米付当時取立高并九月中取立之分共調書上仕候処、右金高ニ而者備
米凡何程買上ケ可申哉之御尋ニ付書付差上候、左ニ、

金千七百三十弐両余、当時取立ニ可相成分、
金弐百拾三両、九月取立相成候分、〆金千九百四十五両
内、金百四十五両、御用達ゟ借上ケ金返済并三番板蔵代金残、土蔵普請
入用、板蔵建上ケ入用共見込ニ而相除、
引残金千八百両、此処へ備米四斗入付凡千弐百俵程買上ケ仕度心組御座候、
尤、直段廿匁位之積り見込如此御座候、
六月十五日　　町年寄
右之通半紙江相認メ、蠣崎重郎右衛門殿江差上候、
一、工藤庄兵衛方ゟ庄内米三百俵余直段廿二匁、京屋平八ゟ上方米同断、庄
内米直段廿壱匁与相認メ差上候、其砌沖ノ口ゟも米買上ケ書付可差上被仰
付、則両人方ゟ書上候処、工藤庄兵衛ゟ者庄内米廿壱匁与書上候、当御役
所へ書上候直段ゟ壱匁引方書上候由、京屋ゟ者上方米廿壱匁、庄内米廿匁
五分何れも引ケ方仕書上仕差上候由、然者当御役所へ書上仕候直段ゟ者引
違候義ならハ一応之届も可致処不埒候間、右両人ゟ書面為差上可申段蠣崎
重郎右衛門殿ゟ申ニ付、工藤庄兵衛・京屋平八呼上ケ書面可差上旨申付候、
一、去年中ヱトロフ嶋漂流之もの、越後船水主伝吉、戸三郎、久太郎右三人、
此度ヱトロフ勤番松井茂兵衛殿帰登ニ召連、今日至着、宿唐津内町旅籠屋
与兵衛江御預ケ、宅番ニ者江戸御足軽石川喜兵衛・越川与一郎両人昼夜共
付居候積り、依之漂流のもの三人、御足軽両人、都合五人与兵衛方ニ而賄
為致候積り、右与兵衛ニ而急キ之事故賄差支付、奥平勝馬殿ヨリ御談有之、
白米弐斗御用達行司藤野喜兵衛ゟ催遣し、追而与兵衛江賄米御下ケ次第返
脚（ママ）之積り、
一、シヤマニ等澍院修覆普請、昨年同所勤番藤田金四郎再見分之上惣積り書

差上候付、右積り方を以万屋専左衛門江請負普請被仰付、去十五日先番ゟ同人江申達置候処、右入料積書一冊蝋崎重郎右衛門殿御渡付、専左衛門へ相渡候、

惣〻高

一、銭四百壱貫七百八十九文

此金六十両壱分二朱ト弐百三十四文

諸大工・木挽・張替・畳差、諸材木代・賃銭之儀相知候、其外場所ニ有合無之品ニ御座候間、先子年積り方之直段ニ而当時之相場ニ者無之凡積ニ御座候、

外ニ

護摩堂　棟間五間　厚葺坪数九十二坪

行間六間　御拝口屋根共

右葺方不相知、茅屋根葺方具師心得之もの無之付、凡之程モ不仕候、

右積書帳書面之通御座候、以上、

酉五月　藤田金四郎

右之帳面壱冊万屋専左衛門江相渡、同人熟談の上、万事相伺候積り、

六月十八日、漂流人三人之荷物、今日ゟ詰替相成候、

一、唐津内町旅宿屋与兵衛江漂流人相預ケ被仰付、此節柄賄米差支ニ付玄米壱俵御渡方願出、蝋崎重郎右衛門殿申上候処、内御役所へ御達済候間、請取ニ差出候様御達有之、名主野坂吉六江申達候、尤、追而差引勘定いたし積り、

六月十九日、京屋平八・工藤庄兵衛ゟ先日御買上ケ米願上候分、沖ノ口ゟ被仰付候由ニテ沖ノ口御役所へも書上仕候節、当御役所へ申上候直段ゟ壱匁も引方仕申上候由、当御役所へ日後ニ申出、依之右之始末書為差出、今朝御用番へ差上置候、尤、奥印不仕候、

一、阿部屋利兵衛ゟ庄内米弐千弐百拾三俵御買上願上置候内、金千八百両丈ケ市中御備米之廉へ御買上ケ相成候旨被仰出、利兵衛へ相達置候処、右ニ而者半分通も相残り難渋仕候間、御用達・請負人江相願候へとも相談出来不申候間、其侭積戻り申度奉存候間、右御買上ケの分御免被下度趣願ニ付、今朝申上置候処、右米御用無之候間勝手ニ可致旨被仰出、其段阿部や利兵衛へ相達、

六月廿日、此節市中喰物もらひ日々大勢ニ相成候趣風聞有之候間、此間中名主へ申談取調為致、御百性丈ケ之分名主・同勤相揃、蝋崎四郎左衛門殿へ差上置候、則人数左之通り、

家数六十二軒　人数百四十九人

右之通書上之惣高ニ有之候、

六月廿三日、江差江役者共廿九人罷越候付、源右衛門・才助両人附添、明日出立付、同所町年寄へ私共一同ゟ書状相渡遣候間、申上置候、

一、北蝦夷地の儀、去夏中年季中ニ有之候へとも栖原屋庄兵衛半方御預ケ之処、御引上ケ相成候付、

紀州様御城付ゟ厚御願合有之候付、右場所の義明戌年ゟ栖原屋仲蔵江御預ケ被仰付候、尤、伊達林右衛門同道罷出候、尚又、仲蔵儀者当節ゟ御用達被仰付候間、苗字帯刀御免之旨とも、蝋崎重郎右衛門殿ゟ御口上ニテ被仰渡候、

一、明年御巡見御下郷付、市在共道橋普請等者唯今ゟ心かけ盆過ゟ取懸り、当年一偏手入致置可申候、御宿等之儀も御休泊之場所共心懸ケ手入可致候、

且又、町御役所ゟ注文品、或者名主赤看板、又者消防道具其外共心付候品者取調書上可申越被仰聞候、則町年寄・名主・在方懸り共一同へ御達、

一、兼而申談候下ノ関行之為登金相止メ候而爰元ニテ米買入の積り、御用達組ゟ買入之書付左ニ、

一、肥前米八十俵　三斗三升入
　　此石廿六石四斗
一、同弐百九十七俵　四斗入
　　此石百十八石八斗
合石百四十五石弐斗　直段十九匁かい
代三千四百四十八貫五百文
　　此金五百〇七両ト九百文
　　内訳
四十石三斗五升（此四斗入ニ直ス　百俵ト三斗五升）　伊達林右衛門買入
二十二石　此四斗入直ス　五十五俵　同　西川准兵衛
十九石弐斗　四十八俵　同　岡田半兵衛
八石　廿俵　同　宮川増蔵
五石二斗　拾三俵　同　岩田金蔵
五十石四斗五升　百廿六俵ト壱斗弐升五合　同　藤野喜兵衛
四斗入
合三百六十三俵ト升七升五合

右者御用達六軒ニ而銘々買入、別段ニ積置候分、届書差出候付扣置、

一、市中備米、上方米・越後米ニて直段平均十八匁五分ニて金千八百両代凡千三百俵程伺の上被仰付候趣、蠣崎四郎左衛門殿御達、

一、市中在々備米買入之儀者昨日窺済被仰付候分左ニ、

一、長門米　弐百拾二俵　直段十八匁五分　工藤庄兵衛
一、上方米　三百三俵　直段同断　阿部屋利兵衛
一、同　百俵　直段前同断　広嶋屋布右衛門
一、高崎米　三百五十俵　直段十九匁二分　近江屋忠右衛門
一、越後米　三百三俵　直段十八匁　大津屋武左衛門

右五口ニ候内、〆印、㊤印、ホ印、三軒之分、生府弐番蔵今日相詰候積り、張江又八・村山重左衛門、名主九八、則相越候、

一、御用達ゟ金五百両、請負人ゟ金五百両、下ノ関江為差登下ス米手配可致処、当所入米沢山有之候間、当所ニ而買入候積御聞済相成、依之此度双方とも五百両向ツヽ買入、銘々蔵入いたし置候段、書上二冊蠣崎四郎左衛門殿へ入御覧候、左ニ、

一、米　三百六十二俵
　　内訳
一、肥前米　九十俵　升三斗一升一合入
一、庄内米　五十俵　升四斗七升四合入

一、備前米　四十八俵　升四斗五升入
一、庄内米　四十俵　升四斗四升八合入
一、肥前米　三十五俵　升三斗三升壱合入
一、平沢米　三十三俵　升三斗五升入
一、肥前米　三十三俵　升三斗三升一合入
一、庄内米　八俵　升四九五五入
一、肥前米　十三俵　升三三壱入
一、庄内米　八俵　升四九七五入
一、肥前米　四俵　升三三壱入

右之通書上候、御用達之分、先番村山重左衛門筆記有之候、

一、栖原仲蔵御用達被仰付候付而者、献上物并北蝦夷地明年ゟ半方元成御預ケ被仰付候献上もの共、来月六日差上候様被仰出、同家江達ス、

一、市中在々備米　印ゟ買上米惣社堂二番蔵入候付、今日出役者村山伝兵衛・張江又八相越候、名主九八同断、

七月六日、京屋平八ゟ同人当春上方筋へ登りの節秋田・庄内・越後辺江諸侯様方ゟ買入米之御手配有之候付、御当国江も入米不足ニ有之と相心得、中国筋ニテ米買入相下り候処、追々下落仕、過分之損分ニも相成候付、甚難渋仕候趣ニ而元仕上ケ直段凡廿壱匁三分位御買上ケ被下置度趣願書差上候付、定例奥書印形差上候、尤、別紙米買入仕上ケ帳一冊相添候、

七月九日、当年者米直段も格外高直に御座候間、十三日寺院江罷越、印塔江ほらかい致候義如何仕候哉、私共名主共色々噺合の上、御内々御番蠣崎四郎左衛門殿江御噺申上候処、御老弁之上咄合致見可申様被仰聞候、夫ゟ御城江御上り被成候後、御下り有之、ほらかい之義者銘々内江ほらかい斗りいたし、印塔江者一統当年者相止メ候様被仰出候、尤、名主五人より持々町代を以市中不洩様名主一同ゟ申談事へく様被仰聞候間、十三日ニ者寺参り斗り而宜候趣一同へ可申聞段、名主一同へ申聞遣候、

一、北蝦夷地之儀者明戌年ゟ六ヶ年栖原仲蔵御預ケ被仰付候間、右之心得ニ而其後引続御預ケ被成候節者七ヶ年ニ而林右衛門・仲蔵両人連印ニ而請証文差上候様被仰出候間其積ニ而仲蔵ゟ請書差上可申旨被仰付候間、則相達、

七月十二日、名主共病気見合引籠出勤共已来者其時々御届ケ申上候様、蠣崎重郎右衛門殿ゟ被仰渡候間、名主九八・九兵衛・吉六へ申達、尤、専右衛門・半右衛門江者同人共ゟ申遣候筈、

一、昨日当番名主田中九八ゟ例年之通り町端おゐて為躍申度趣御聞済相成候旨御達有之、尤、是迄者名主ゟ相触候得共、今年被仰聞ニ者、相触候而者上ゟ躍を申付候様ニ相聞得候間触候義者相止メ可申、差支出来踊不相成節者触候方可然旨御咄合有之候間触不申候、御聞済相成候義者名主其外町方頭取中へも通達致候、

七月十五日、此度東西蝦夷地勤番之内心得違致候ものも有之趣付、勤番中へ御触面を以被仰出候趣相写御奉行所ゟ御渡相成、請負人共へも為心得為相写、蝦夷地々江相廻置候様可申付旨、蠣崎重郎右衛門殿ゟ御達有之候間、御用達行司岩田金蔵呼出ス相渡候、尤、早々順達、留ゟ相返ス候様申付候、

七月十七日、沖ノ口御役所ゟ工藤庄兵衛義、船手取扱方不行届付、同人壱人限り沖ノ口御役所ニおゐて遠慮申付候趣達書、沖ノ口下代ゟ相達候付、御用番へ入御覧候、泊川町甚太郎家内之喜兵衛一件、

一、木村山城方ゟ熊野宮拝殿江捨子有之候、山城手限養育致兼候趣、白鳥形

部申出候、

一、泊川町甚太郎家内ノ喜兵衛不行届之義有之、過料銭五貫文之外積入候鰊るい、能代ノ福治郎船御口銭三倍増被仰付候趣、沖ノロニテ被仰渡有之候、御申渡書名主中林九兵衛ゟ相見せ候間、為心得之一見いたし置候、

一、当年者弁天祭礼順年付祭礼可相勤哉、定例の通重達候もの相寄せ相談可致付、御用達西川准兵衛宅おゐて寄合致、同役一同、御用達、名主、町代、問屋、請負人、重立候町家之もの等相集相談及候処、当番ゟ米諸色高直、前浜・近在共鯡漁も無之、一同難渋之時節、尤、当時者諸国共宜敷、米直段も少し者引下ケ人気相弛ニ候へとも、於当方難渋之もの、物貰多く日々相増候様ニ相見得候得者、又候秋過ニ相成御救等願候様の義も有之候而者恐入候間、先当年者御申訳之御神楽ニ而茂相勤候而祭礼者明年に可仕積り、一同相談相決候、一、当年者弁天祭礼順年ニ候得共、当年柄之事故明年江相廻ス申度奉存候、尤、御申訳之ため阿吽寺并八幡宮社於両所ニ来八月十五日神事修行仕度熟談仕候趣、伺書差上候、

七月廿日、阿吽寺看主帰寺いたし候付、

御上様へ献上　文陳一ツ入壱箱　凍とうふ壱箱

右同寺直持参いたし蠣崎四郎左衛門殿江差出、尤、名主九兵衛持参、御用部家江差上候、

一、明年御巡見使御下向ニ付、在々道橋御普請御見分被仰付候、町御吟味役工藤茂五郎殿、御作事水牧喜左衛門殿〈茂五郎殿差添、今日被仰付候〉、桜庭梅太郎〈喜左衛門殿、前同断〉、御作事梅沢定右衛門殿、

右之通被仰付候、

一、工藤庄兵衛儀、沖ノロゟ遠慮被仰付候処、今日御免之旨、同所下代ゟ手紙ニ而申参り候間、蠣崎四郎左衛門殿へ申上置候、

七月廿三日、栖原仲蔵ゟ北蝦夷地江北会所ゟ仕込品之注文通り差下し、明年漁業差支ニ不相成様仕度色々談合仕候得共折合無之候付、願書差出候ニ付、蠣崎重郎右衛門殿江御覧入候処、何れ内熟相成候様仕度被仰聞候、

一、当御役所前通明年石垣積立普請被仰付候趣、石工甚吉申出候、

一、北蝦夷地下しもの之義付、過日廿二日御奉行所ゟ御内意有之、相成丈ケ内熟為致可然旨被仰候付、伊達林右衛門双方へ和談為申入候得共、迚も熟和相成兼候趣申出候間、昨日又々御奉行所へ申上候上ニテ、此上御用達之内、藤野喜兵衛・西川准兵衛・岡田半兵衛右三人中釈扱方申聞候処、奉畏候得共、伊達・栖原、或者外請負人之一件候半々早速立入可申奉存候得共、北会所者則御直差支之義ニ而御不益ニ相成候様之義銘々中釈致候義者恐入候間、此義者御断申上度旨申聞候間、今朝御奉行所へ申上置候、尚今一応、右三人江扱方申聞候積り、

一、前国泰寺今日御城内罷出候、昨日之口上ニ而者御霊家江罷出御回向申上候趣御座候間、宿山田屋文右衛門を以焼失後未タ出来不申段申述候処、然者御菩提寺朝夕御回向申上序ニ而不苦候間、宗円寺へ罷出候様被申候得共、尚又申向候ニ者、菩提寺朝夕内仏おゐて回向いたし候間、是ニ而御回向被成候様致度旨申聞候処、昨日承知之趣申参り、今日、

御城内御仏殿ニおゐて御回向相済候由、駕籠者　赤御門乗込、大手御門前迄乗参り候由、尤、今朝右之義者御奉行所へ申上候処、宜敷旨被仰聞候、名主九八先立いたし、着服者羽織袴ニ而相勤候、しかし本供之節者麻上下着用ニ可有之趣御咄合有之候間、已来之心得ニ申聞置候、上下九人、前国泰寺役僧壱人、伴僧壱人、俗役人壱人、若堂・箱持・草り取、

八月六日、阿吽寺ゟ十六善神并弘法大師之尊像、清浄心院ゟ阿吽寺へ寄附致呉候付、右両尊為法楽大般若転読八月十六日ゟ廿二日迄修行仕度願書上ル、右書面差上候処、両用共願無之候而、大般若転読不相成旨ニテ、御下ケ相成候、

一、前国泰寺采道多宝塔建立仕候付、法花経一ノ十部誦経の札五百枚、名主五人江相願、市中施行仕度候間、町々小前之もの江相廻呉候様願ニ付、御用番へ伺候処、不苦旨被仰聞候付、名主加藤専右衛門江相達候、

一、弁天祭礼明年江差廻候付、御申訳のため阿吽寺・八幡宮両所へ御祈祷御神楽可差上儀付、御用達・問屋・請負人江金拾両割為差出候、右割合、

御用達
一、金七両　請負人　一、金弐両　問屋一同　一、金壱両　小宿一同

則、八月七日割合申渡候、去巳ノ年之振合ニ御座候、

八月九日、阿吽寺ゟ十六善神掛もの壱幅、弘法大師木像一体、先日看主帰国之節持参仕候旨、御届書差上候、

一、昨夜、文庫蔵内たんすニ而金五百三十両紛失仕候趣、宮川増蔵届出候得共、何日頃ニも可有之哉、当二日見当り候上ニ而家内限り色々吟味致見候得共相分兼、無余義御届の由、

一、前国泰寺多宝塔御寄附被成候付、金千疋〈御家老中五人ヨリ〉、銀二枚〈御用人中〉、金二分〈町吟味役四人ヨリ〉、金廿両同寺へ相返候分、金拾五両分共、拝借手形弐通松堂へ相返し、右張江又八持参いたし相渡申候、殊ニ金壱両〈町年寄四人〉、金弐百疋〈名主五人〉、則名主専右衛門持参いたし候、

八月十一日、川原町佐蔵ゟ書付を以、当年弁天祭礼順年之処、明年へ相廻差延候付、来ル十三日ゟ十五日迄御神事修行御座候趣承知仕候付、十五歳以下之子供法楽の相撲晴天三日御免被仰付度旨願書、尤、奥印いたし差上候、

一、旅人宿甚太郎ゟ此度願書を以、来ル九月ゟ来戌年九月迄芝居興行仕度、尤、御冥加金弐百拾両上納仕度趣書面差上候処、願之通興行御免御聞済の旨御達有之候、尤、九月ゟ九月迄与有之候へとも、含違候哉、一ヶ所金七拾両宛、三ヶ所ニ而金弐百拾両之御冥加金ニ候間、当所ニて興行いたし候半々、譬五十日なり三十日成、日数者勝手次第候得共、御冥加金七十両相納候様被仰付候間、其旨一通甚太郎呼出申付候、右ニ而者難渋之筋も有之候間、明日書面を以申上候積り、

一、西地フトロ請負人浜屋勘兵衛、当春願書を以、フトロ御場所之儀、是迄鯡取役九一之積り御座候得共、外憐場所セタナイゟして二八役取立候間、当フトロも外蝦夷地同様二八役ニ被仰付度、尚又、太田領ト申フトロ続之場所凡弐里斗り之処、諸人勝手次第入込漁業仕困入候間、右弐里斗り之場所フトロ支配所ニ被仰付度趣共、両用御聞済相成候旨御達有之候間、勘兵衛呼出申付候、尤、太田江鮑突罷越候節者役何程取立候もの歟相尋候様被仰出相尋候処、壱艘ニ付鮑場所ニ寄宜敷所者金弐分、外者金壱歩ツヽ取立候様勘兵衛申立候、明朝申上候積り、

江差奉行
一、国泰寺多宝塔寄附、銀壱枚　御勘定奉行　七人　金百疋　御側頭三人
金弐百疋　御御目付所十二人　金百疋　内御吟味役五人
金百疋　中書院詰

右金包拙者共迄相届候間、席（作カ）とて張江又八持参いたし、

一、阿吽寺ゟ書付を以、弁天祭礼明年江差延候付、来十三日ゟ十五日迄二夜

三日御祈祷修行仕候届書、今朝蠣崎重郎右衛門殿差上候処、御聞届之旨、御引取之節御達有之候、

一、白鳥形部ゟ右同様付、来十四日舎殿ニ而御神楽修行仕候届書差上候処、前同断御聞届相成候、

一、阿吽寺書付を以、弘法大師尊像并盤若（般若）十六善神開眼、来ル十六日ゟ廿二日迄七日大盤若（般若）転読修行仕度趣願書上ル、

一、京屋平八書付を以、去冬上方へ罷登候節道中筋聞見仕候処、米払底付殊の外高直御座候間、下り之節越後国寺泊桑名様御米五千俵取組仕候付、此度積取為手配金子差支難渋仕候間、来十月迄御金千五百両拝借被仰付度趣願書差出候間、蠣崎重郎右衛門殿へ差上候、

八月十二日、川原町佐蔵ゟ八幡宮江為奉納社内おゐて子供角力法楽晴天三日願之通被仰付候旨、蠣崎重郎右衛門殿御達有之候間、其段相達、

八月十三日、フトロ請負人浜屋勘兵衛昨日申立候ニ者、御場所おゐて御製札（別札）無之候間、此段申立被下候様申出候、外場所者皆御下ケ有之候、尤、異国船の御製札（別札）有之由、今朝蠣崎重郎右衛門殿へ申上候、

一、白鳥形部ゟ当社へ為奉納法楽子供角力晴天三日仕度趣申出候ニ付、届書差出候間、前同断、

一、弁財天祭礼明年江差延候付、今十三日ゟ十五日迄御申訳御祈祷御神楽御聞済相成、今日差上候、御初穂左ニ、

御初穂金三両　阿吽寺　金壱両　八幡宮

別段金五両　八幡宮　但、入用ニ相成候分、

出席当主壱人前　白鳥興美　出席　新家住

金百五十疋ツヽ　藤枝清太夫　金壱分　白鳥采女

此金壱両二分也　木村兵部

佐々木権太夫

出席新家住

南一ツヽ　木村左近

金壱分　佐々木内膳

右割合、御用達・請負人金七両、問屋金弐両、小宿壱両、都合拾両取集、不足之分者一昨年祭礼勘定後あたま銭取立候内ゟ差出ス、

一、ヲコシリ嶋勤番渡辺正太郎ゟ書状を以、同所仕込米手薄之趣申来候間、請負人荒屋新左衛門儀留主中候半々右場所証人宿之者江申聞、仕送り米手配いたし、早々差下し候様、蠣　重郎右衛門殿ゟ被仰付候間、証人福嶋屋新右衛門、宿中嶋屋勘右衛門両人呼寄申付候、

一、東西蝦夷地御運上金之内、千三百八十五両、村山重左衛門持参、内御役所へ上納、

八月十四日、青山九八郎様御代官所越後国三嶋郡尼瀬町百姓佐平治ゟ願書差出候当所相手方之もの金談滞候一件、願書弐通、先番張江又八ゟ御奉行所江入御覧候処、済方申付候様被仰付候趣申送り候間、同勤談事之上、今日相手之もの一統親るい差添呼出ス候上、済方申聞候、

一、御巡見様為御用意道橋普請之儀、郷村村（々カ）ニ被仰付候間、市中者町内持、在方者村持の旨、蠣　重郎右衛門殿御達付、名主一同へ申達、尤、村々江者触書差出候積り、

一、京屋平八ゟ書付を以、御金千五百両来十月迄拝借被仰付度旨兼而願書差上置候処、証人の義ハ御用達之内ニて致候半々御沙汰可被成趣被仰出候間、其段平八へ申聞候処、相談の上申上候積り、

八月十五日、殿様　御服明付、今日八幡宮へ御代参有之候間、白鳥形部へ申聞候様被仰出候間、町方を以申遣候、

一、川原町西側四番之内、

表口　南北弐間四尺五寸　三浦藤三郎
裏行　東西十三間　家内ノ藤吉

表口　南北弐間四尺五寸　八木屋
裏行　東西十三間　浅治

右者天保七申年桶屋七兵衛ゟ浅治江譲受候、其節之代金七十五両也、

右西地面当御役所火除地ニ被遊候付差上候様被仰付候、尤、藤吉方者藤三郎御扶持家之儀候間、地代として金五十両被下、八木屋浅治者昨年相求メ候通之代金御下ケ可被下旨被仰付候付而者火除地の事故双方共建家取ほごし被仰付候、

八月十八日、惣持寺役局ゟ之書状四通紙包、右者御用之間御鑑済ニ而相下ケ、法幢寺役僧寰中江相渡、右書付ニ付挨拶者蠣崎民部殿御帰府之上其筋へ可被成御申聞、則、寰中僧へ申達、

一、ヲクシリ嶋新鱈直艙之儀、願之通御聞済被仰付候付、去ル十八日村山重左衛門当番之節、荒屋新左衛門代宿中嶋屋勘右衛門、証人福嶋屋新右衛門代浜屋勘兵衛呼上ケ申付候、尤、御用之間ゟ御奉行所へ御書付ニ而被仰付候、右書付御下ケ被成候付、新左衛門并証人見候而相心得させ候、尤、御書取之内、口塩鱈三十本献上之分并御用鱈七十本、何れも箱詰ニ可致候、右箱詰并直艙積石数共温腑取獲方役人江申立候よふ、御書取有之候、猶、御場所請負人一同江も為心得申聞置候、

八月廿一日、北蝦夷地去申年残物栖原仲蔵持之分、当酉ノ正月全残之分相調子代付いたし可差上様、先頃蠣崎四郎左衛門殿ゟ被仰聞候、依而栖原仲蔵・伊達林右衛門江茂申聞候処、此節同所支配人并帳付之もの共罷登り合候間相尋候処、北蝦夷地東ノ方斗り相分り、西ノ方者近々番船相登候間、其節取調、東西之分共残物代付帳可差上旨、伊達林右衛門、栖原仲蔵代喜六罷出申立候付、蠣崎重郎右衛門殿へ此段村山重左衛門申上置候、

一、ヲクシリ請負人荒屋新左衛門儀、同所仕込米下し方手配之儀彼是延行相成不行届之儀付御書取を以急度叱置候旨、蠣崎重郎右衛門殿ゟ昨日被仰渡候、尤、立会工藤茂五郎殿、村山伝兵衛、

但、新左衛門義ハ江差表へ罷越居合不申、名代福嶋屋新右衛門呼出ス所、病身付浜屋勘兵衛罷出候、

九月朔日、明年御巡見使御下向可有之候間、市中道筋并小橋共見分いたし候而一統普請手入可致旨、三崎八之丞殿御達、

一、明年御巡見様御下向可有之候付、市中道橋為見分、明日朝ゟ御奉行所始一同市中御見廻り之積り向々江相達置候、

一、秡主太作予兵衛ゟ此節御秡不残相納候付、当六月半金御下ケ被下置候、残半金之分、此度御下ケ金被仰付度趣書面差上代金左ニ、

金五拾両弐分三朱ト　御秡拾五万抱、壱包ニ付
三百廿五文　弐文三分ツヽ

内

金廿五両壱分一朱ト　当六月奉請取候、
三百七五文

残金廿五両壱歩一朱ト
三百七十五文　此度御下ケ金奉願上候、

九月六日、吉田屋清六忰熊吉儀、幼少付、伯父申松義清六与改名仕相続仕度願書、親るい川原町長左衛門加印、

一、旅人百姓入相成候儀者名主相願、夫ゟ町年寄願書差出候手続之処、今般旅人掛り町方頭取惣持被仰付候付、右百姓入之節旅人掛りへ願出、名主江も加印、旅人宿も加印いたし可差出哉、又、是迄之通名主加印之願書町年寄ゟ旅人掛り其もの差支之有無問合候上ニ而進達可致哉之趣、両用吟味役所ゟ御沙汰付、名主一同へ相談候処、是迄之通名主ゟ町年寄江願書差出、其上旅人掛江問合候様ニ致度趣之義ニ相聞得、其旨御吟味役衆へ相伺候処、伺之通りニ而宜敷可有之候、尤、百姓入に可相成旅人者願書差上候ハヽ其最寄旅人掛り茂右願書差出候ニ付、宜敷と申て願合ニ可遣儀者名主一同ゟ申聞候間、其段も吟味役衆江申上候処、其段も可然趣、奥平勝馬殿・工藤茂五郎殿御両人ニて被仰聞候、依而旅人掛り江も名主一同へも其段申達置候、旅人宿加印の義者百姓入之もの名主へ願出候書付加印致候事、尤、是迄之振合候、

九月十二日、旅人百姓入願の義、国元ゟ成(ニ)慥書付持参無之而者難被仰付御達候得共、当年之儀者唯今人別改ニ差掛り当惑仕候間、当年丈者是迄の通り被仰付度、以後百姓入之節者国元之書付相添可願上旨、名主一同ゟ申出候間、則御奉行所へ申上候、当年百姓入之願名前逸々半切相認メ入御覧候処、御評儀之上、先当年之儀者願書為差上候様昨日被仰付、名主へ申聞候処、則願書名主五手ゟ百性入三十五通、親類・身元引受・名主加印ニ而差出候間、旅人掛町方頭取ニ而身元相調候様申談願書相廻置候、

一、町年寄之内、張江又八・村山重左衛門、当月節句御城内江御礼相詰候処、両人之義者御徒士身分候へ者供召連候儀以来共(ネカ)決し而不相成候趣、御目附所御番今井善兵衛殿ゟ被申聞候由、依之村山伝兵衛・桜庭梅太郎江右之趣両人ゟ申聞候間、一同談事之上、右供之儀御本国已来町年寄勤斗りニ而も供召連来、殊ニ先前相勤候者之内御徒士席被仰付候節迚も同様連来候間、又八・重左衛門両人迚も此度節句始而召連候訳ニも無之、猶又、町年寄勤の廉ニ而供召連候儀御座候、五節句御礼之節御用達始、御目見町人、小宿壱人ツヽ召連御玄関江相詰候砌、途中共差添町人を同道いたし候、町年寄供無之候而者如何敷奉存候間、町年寄勤の廉ニ而是迄之通供召連候(ママ)仕度趣御奉行所へ申上候処、御用之間御窺の上、尤之儀ニ相聞得候間、町年寄勤中者供召連候而も不苦候趣、御番三輪八之丞殿御達御座候、御目附所へも御奉行所ゟ御達相成候、此旨又八・重左衛門へ致通達候、

一、市中備米、此節買入不申候而者買入之時節茂有之間敷候間、此度之入米買入候而可然之旨御沙汰の由、三輪八之丞殿御達御座候、

九月十八日ゟ道橋普請ニ取掛り候分、生府町ゟ枝ヶ崎町迄、川原町ゟ神明町迄一同罷出相掛り申候、尤、名主・町代罷出候、右ニ付為見廻御足軽拾人掛として被仰付、御奉行所ゟ御達有之候内、三人西在江被遣候、尤、残七人町割いたし相廻居候、且、町年寄・名主・町代申合普請方早速出来候様、吟味役衆ゟ工藤茂五郎殿ゟ御達、万事町年寄方ニ而差配いたし相廻候様御噺御座候、

一、町並ニ諸士・御扶持人住居之分、前通り道普請の義者如何可仕哉、工藤茂五郎殿江申立相伺候処、御奉行所御沙汰之上、町々持ニ而出来いたし候様可致旨被仰聞候趣ニ而茂五郎殿ゟ御達有之候間、当番名主半右衛門江申聞置候、

一、山々炭竈役銭上納之儀者竈改之もの上納致来候得共、当年ゟ銘々上納

敷、又者其上持之在方名主ゟ上納いたし候半々請取書押切印いたし候趣、
御番蝋崎四郎左衛門殿御達有之候、
一、蝋崎四郎左衛門殿ゟ西館稲荷宮之義者いつの頃ゟ七社ニ相成候哉、社頭江相尋可申趣御達有之候間、其旨申聞候処、佐々木権太夫ゟ右之書面社頭奥印いたし差出候間、御急ニテ其侭御用部家へ為持差上候、
一、市中道普請之儀者十八日ゟ取掛り罷在候へとも、漁師の分者浮合鋪節者折々男之分沖へ罷出申度旨、名主専右衛門ゟ申立候間、蝋崎重郎右衛門殿江申上候処、御聞済相成候、
一、御巡見様明年御下向ニ付、入用分品々員数認メ無之候間、如ヶ様ニ而も凡積りいたし一同申談、品数書入候而早速書上候様被仰付候、
一十三之長七ゟ津軽米三千五百俵十一月迄相廻ス、当所相庭ニ不抱直段四斗八升入ニ付残金拾三匁相定、船毎に升立蔵入致候所ニ而其時々代金請取定、勿論海上諸掛り等者長七持ニ而御用達・請負人一同相談之上取組申度趣、今朝伺書差上候、
九月廿三日、昨日長七ゟ前書米三千五百俵十月ゟ十一月迄ニ追々積廻ス売上ケ申度段伺書差上候処、右願の通被仰付候、尤、三分一者御上ニテ御買上ケ、弐分者御用達・請負人一同ニ而買入候積り御聞済相成候間、其向々江此旨相達置候、
一、御巡見掛り　　蝋崎将監殿
九月廿五日御巡見左之通、
一、御使番　　黒田五左衛門様
大納言様御小姓組
一、　　中根伝七郎様
酒井隠岐守様御組
一、　同小書院番
浅野壱岐守様御組　　岡田右近様
奥州・出羽・松前江来二月頃御暇乞之趣ニ而四月御下向ニ可有之哉、御嘶有之候付印置候、
一、市中道普請之儀、小前のもの日々取掛り居候而者日用暮方ニ困候間、大家之分重に為差出、差急キ候儀ニも有之間敷候間、明春迄ニ出来致候様、重郎左衛門殿ゟ被仰聞候間、名主一同へ此段申聞置候、
一、御巡見様御下向付、御勘定方掛り是迄岡本時蔵、三浦周太、桜庭左右吉被仰付罷在候処、御勘定方惣掛り被仰付候旨、尚又、今日三輪八之丞殿、村山重左衛門へ御達、
一、吟味役奥平・工藤御両人ゟ御相談の義者、火消之義能登屋甚八ト申もの願出有之候へとも、市中小前ゟ月々銭取立等の義差支可有之、於江差火消組申合、羽被・灯（ヤマ）・消防道具初壱度者御上ヨリ御下ケ被成、追而修覆者市中持ニいたし、人数も組々申合候様致度候、右之趣同役中相談致呉候様御嘶御座候、
〔奥端書〕「天保八ノ十三」
〔端書〕「天保八ノ十四」
一、伊達林右衛門・栖原仲蔵ゟ北蝦夷地去申年中残りもの諸品代壱冊、此代〆高四万五千弐百八十九貫弐百四十弐文、外ニ番家蔵々代〆高壱万四千五百三貫五百五十文壱冊別ニ有、
合五万九千七百九拾弐貫七百九十弐文
十月朔日、村山重左衛門東西村々道橋普請出役付、於御用之間御月番鈴木記（起）三郎殿被仰渡、為支度料金弐百疋被下置候、

一、御巡見様御旅館、御家老衆御始、御役人中今日御見分被遊候而馬形松前万三郎殿、新井田右膳殿、太田豊治殿、右三軒ニ相成候ニ付、御通筋二平坂其外共早速道普請出来候様可致旨、蠣崎四郎左衛門殿ゟ御達御座候間、同勤并名主一同江申達候、

一、北蝦夷地残もの代付帳弐冊御下ケ、右品之内ニ蔵々之分、明年者其侭伊達・栖原両家江相返り候事故、代付ニ者及ひ間敷哉相尋候様被仰付、則両家江相尋候処、蔵々不仕心得ニ候得共、先頃御役所ゟ御沙汰付、代積仕候儀ニ御座候間、相除候而も不苦趣、伊達林右衛門代元兵衛、栖原仲蔵代喜六両人申出候間、御番蠣崎四郎左衛門殿申上候処、左候半々惣〆高之内、蔵々代者引去候而残金北会所小川九兵衛ゟ伊達・栖原両家江為相渡候様被仰付候間、右代付帳〆高之内蔵々代引去残金何程と顕し差出候様、両家江申達候、出来次第小川九兵衛江申達候積り、

一、仁平坂普請御見分、御奉行蠣崎四郎左衛門殿、町年寄張江又八、名主中林九兵衛、石工甚吉、右相越候、明日ゟ取掛り候積り、

十月五日、北蝦夷地残もの代積り調書上壱冊〆高左に、

〆四万五千弐百八拾九貫弐百四十弐文

　　此金六千六百六拾両ト永百八十二文六分五厘

外ニ東西番家蔵々調子書壱冊添、右弐冊、伊達林右衛門・栖原仲蔵連印ニ而今朝差出候間、昨日蠣崎四郎左衛門殿ゟ被仰付候通、右〆高之金子両家江相渡候様、小川九兵衛江申達候、調書二冊同人江相渡候、

一、弁天江先年伊達林右衛門ゟ奉納有之候石夜灯壱艘、生府町ニ有之候分、早速同所ゟ引取候而嶋の内相建候様被仰付候間、此旨手代貞吉へ達遣候、

一、昨日、生府町御米蔵続東ノ方町地面五ヶ所分、御家老衆御一同并一役壱人ツヽ、町年寄両人、名主両人、町代罷越見分仕候ニ付、右地所譲請之書面銘々ゟ為被上ケ候様被仰付候間、相達置候、

一、御巡見様御用ニ付、東在知り内村迄桜庭梅太郎、西在小砂子迄村山重左衛門、今日出立いたし候、

十月十三日、市中道橋普請付、材木道具類代、日用賃、大工作料、木挽同断、釘代共凡見込ニ而金弐百両、東西在々之分道橋普請諸道具代凡見ニ而金五拾両、私共四人名前ニ而願書三輪八之丞殿江差上候、

一、北蝦夷地去申年分残もの諸品代金惣調子書小川九兵衛江相渡ス取調子候様申聞遣し候所、右〆高ニ而宜御座候間、当節金子半方分相渡申度旨申立候付、書面差上、此段三輪八之丞殿江申上置候、

一、小川九兵衛以書付、北蝦夷地残物代金半方分栖原仲蔵江相渡候付、当節から操合不宜候間、御金弐千両拝借被仰付度、尤、来戌年至り酉年分残物代金請取候得者六月中元利とも上納仕候趣願書差出候間、奥印いたし、前同断差上候、

一、市中在々道橋普請入用付、金子弐百五拾両拝借願一昨日差上候処、御聞済相成候趣、今日御達有之候、

十月十五日、小川九兵衛昨日願書差出候処、拝借金弐千両願之通被仰付候趣、御用番三輪八之丞殿ゟ御達有之候間、小川九兵衛へ申達、御証文明日差上候積り、

一、箱館ニ而請負人林七郎兵衛近年不如意ニ付、尚、米穀高直ニ而損毛不少、ホロイツミ・エトモ・ホロヘツ右三ヶ所返上仕候趣御聞済相成候旨、三輪八之丞殿御達、

一、箱館福嶋屋嘉七内願も有之候付、右之ホロイツミ運上金弐百両引方被仰

付、是迄金八百八両之処、金六百八両ニ而請負被仰付候、尚又、和賀屋孫治郎同様ホロヘツ・ヱトモ両所運上金是迄之通金百三拾五両ニテ同請負被仰付候趣共、三輪八之丞殿ゟ御達有之候間、同役中江通達いたし候、

一、生府御蔵東側百姓地五ヶ所之分御用地ニ御引上ケ被遊候、尤、沽券通御代金被下置へく趣共被仰出候、

壱番　表口六間　生府町長兵衛
一、代金弐拾両　裏行二十間　自分家作

弐番・三番　表口七間二尺　福嶋屋治郎七
一、代金弐拾両　裏行四十七間　家作　新右衛門　唐津内町万二郎

但、二ヶ所之沽券壱枚之分ニ而書上ル、

四番　表口四間壱尺五寸　江良町村
一、代金三拾両　裏行二十七間　喜右衛門

五番　表口四間壱尺五寸　生府町
一、代金弐拾弐両二分　裏行二十七間　三治郎　空地

右五ヶ所之地面者御米蔵東ノ方続地ニ而此度御用被仰付御引上ケ被仰出、尤、御代金者可被下置趣共被仰付候付、家作致居候もの者家作取解料無之候而者難儀之趣付、村山伝兵衛取調方被仰付書上仕候、いまた御沙汰無之候、

一、ホロイツミ請負人福嶋屋嘉七ゟ献上差上候、

御障泥壱間料金千疋

一、ホロヘツ請負人和賀屋孫治郎ゟ献上差上候、

御押掛壱掛料金五百疋

右両用共田中九八差添差上候、

一、小川九兵衛ゟ願上候金弐千両拝借被仰付、則栖原仲蔵江北蝦夷地残もの代半高当詰所ニ而双方罷出請取渡致候、高金六千六百六拾両ト永百八十弐文六分、此二ツ割、

一、金三千三百三拾両、永九十壱文三分、栖原仲蔵持分

右小川九兵衛ゟ栖原仲蔵江相渡

右高之内金弐千両者小川拝借金、千三百三十両ト永九十壱文三分者小川九兵衛持出ス、

十月十八日、小川九兵衛ゟ栖原仲蔵江相渡候北蝦夷地去申年残荷漁具代金半方分三千三百三十両ト永九十壱文三分双方引渡相済、書面等差出ス候後、栖原仲蔵ゟ喜六を以願出候ニ者、小川九兵衛ゟ請取候金高之内千五百両与弐千両者御役所へ願上置度趣之内願、徳兵衛并喜六共追々罷登候付、明年又々小川九兵衛方へ当酉年残もの代半方分相渡候節、若不繰合之義も有之、仲蔵心配之義とも可相成哉、徳兵衛も同様心配の義候間、当時千五百両と弐千両者其節の用意別ニ仕置度候心持ニ而乍恐御役所へ願出候趣申出候、依而此段蠣崎四郎左衛門殿江申上候処、御内々御用之間江御伺相成候処、大金之義市中融通為致候ハヽ一方之義可有之候、其上ニ而明年小川九兵衛江渡方之節仲蔵手切ニ而都合兼候儀も有之候半々其節者当御役所ゟ声かけいたし候而も都合可為致、夫共押而願上度義ニ候半々右願上度程之金高惣封印いたし差上可申候、尤、封印之節者町年寄なと立会可申候、其上ニ而内々御金蔵入置可申候、明年入用之節者其侭御渡可被成趣被仰候、此段栖原仲蔵代喜六江申談遣候、右一件村山重左衛門日記相認候、

一、北蝦夷地残物代、此間小川九兵衛ゟ仲蔵江相渡候分、双方ゟ御届書差上候様、蠣崎重郎左衛門殿ゟ御達御座候間、両家へ申達候、

一、同去申年諸品残もの代金六千六百六十両ト永百八十二文六分之半方金三千三百三十両ト永九十壱文三分、去ル十八日小川九兵衛ゟ栖原仲蔵請取候趣、双方ゟ御届書壱通ツヽ、今蠣　重郎右衛門殿江差上候、

一、栖原仲蔵ゟ此度北蝦夷地残もの代之内御役所江御詫申上度相願候処、此節融通いたし方可然、乍去推テ御詫申上度候半々立会封印之上御預り可被成之御沙汰ニ候得共、左候而者恐入候間、常封の侭ニ而御詫申度旨、猶亦昨日申出、今日重郎右衛門殿申上候処、推而相願候半々立会封の上御預り可被成被仰付候処、又候常封の侭御詫申度趣相願候而者最前之御沙汰ニ振候而不宜儀可有之旨被仰聞候間、其段喜六江申聞候、

一、小川九兵衛儀、北蝦夷地差配方并御抱入之義者無滞御免御免(ママ)の趣、蠣崎重郎右衛門殿ゟ被仰渡候、

一、伊達林右衛門儀者当十二月中迄壱人候得共御用向万端無滞前同所之儀取扱候様前同断、尤、書面差上候様被仰付候、

一、栖原仲蔵ゟ北村徳兵衛外五人、江戸表江差遣候間通状御印鑑願出候間、奥印不致差上候、

十月廿五日、北蝦夷地半方請証文、仲蔵、宿茂兵衛、名主半右衛門被仰渡、御請印相済候、

十月廿六日、小川九兵衛儀、今般北蝦夷地下差配方并御抱入御免被仰付候付、御用達格之儀於御別席伺上候処、御用達格之儀も同様御免之趣被仰出候趣、蠣崎重郎右衛門殿ゟ今朝御達有之候間、月行司岡田半兵衛呼出ス為心得申聞候、九兵衛江者別段不申聞候へとも、談事之上追而伺出候節者右之趣申聞候積り、

一、蘭来(雨来)屋喜四郎・中林(ムラ)屋三郎右衛門・市屋定右衛門請負所ヱトロフ并ヤムクシナイ御収納相滞候付、右様手薄之もの共江御太切之場所請負難被仰付候間、此度御引上ケ被仰付候趣、三輪八之丞殿御達有之候間、同役中へ通達致置候、

十一月十一日、江戸本庄立石徳右衛門与申もの江戸表御屋敷御出入致候もの二而、此度罷下り、津軽米弐、三千俵茂御買上取組内願之趣候、右徳右衛門者津軽屋鋪江用達金等有之、右代り米請取候事と相聞得候、依而徳右衛門江面談いたし、津軽ゟ米請取方并積廻代料懸引共可有之候間、其趣意面談可致候段、蠣　四郎左衛門殿ゟ御内意被仰聞候、

十一月十四日、藤野喜兵衛・西川准兵衛・岡田半兵衛右三人御用有之御呼出ス之処、准兵衛儀者用事有之、在所へ罷登り、留主中者御用向岡田半兵衛承り居候ニ付、喜兵衛・半兵衛両人罷出候処、東蝦夷地ヱトロフ御場所之義、是迄関東屋喜四郎・中村屋三右衛門・市屋定右衛門江御請負被仰付罷在候得共、同人共不行届候付、今般御引上ケ被仰付候間、右御場所之儀、喜兵衛・准兵衛・半兵衛右三人江御請負被仰付候、尤、是迄喜四郎・三右衛門江御金七千両余拝借被仰付候分被成下候、昨今両年御運上金未納之分并先々請負人高田金兵衛場所請負中之漁業代年済金者公辺江懸り居候金子之事故、此分とも此度被仰付候三人ゟ上納仕候様被仰付、尤、金高等追而御書付を以御渡可被成候、時節柄迷惑ニも可存候得共御請申上候様、御番三輪八之丞殿ヨリ於御詰所被仰渡候処、喜兵衛・半兵衛即答難申上候付、一先引取相談の上御答申上度旨申上候而引取候、

【天保九年】

天保九戊戌年

日記抜書

正月四日、白鳥興美書付を以、神明・八幡両社頭之儀、御礼年番順ニ御座候得共、形部義者実父ニ御座候間、私一代御礼順之義者形部次席ニ被仰付度趣願書差上候、

一、福嶋村名主・年寄、吉岡村名主・年寄、右者村方難渋之もの江村内ゟ合力米差出候而御救米等不願上候付、御賞詞御書取ニ而被仰付、左ニ、

福嶋村名主　同年寄
達右衛門　清左衛門
同　同
孫六　助四郎

近年打続米価高直ニ而村方小前之内難渋之ものも有之候得共、其方共厚く世話いたし御救米等不願上為相凌候様仕度旨、其筋迄申出候段、畢竟心掛一段之儀ニ被思召、依之御賞詞被成下候様ニとの御沙汰候、

戌正月

右御文言之通り吉岡村江壱通、

吉岡村名主　年寄　同
八兵衛　喜六　平兵衛

正月五日、昨夜松前内蔵殿ゟ村山重左衛門御呼上ニテ御内談被仰聞候ニ者、近年打続火災有之、往々衰微可致候間、市中ニ而火消五組ヶ六組も組立度思召、尤、壱組五十人宛ニも被成度候、纏其外消防道具等取揃可申儀共相談可致趣、猶又、土蔵家根瓦ニ可致義者表向可被仰付候、尚又、小路等是迄ゟ広く被成度思召被仰聞候、此段名主一同へ申談候、熟談の上御返答可申上積り、

一、白鳥興美ゟ先番之節願書差出候両社頭御礼之儀者是迄年番之者先ニ罷出候得共、形部儀者実父之事故、興美一代者形部之次席江罷出御礼申上度趣之願至極神妙之事ニ候得共、養家先格式之儀候間、是迄之通相心得可申被仰出、願書御下ケ相成候旨、三輪八之丞殿御達ニ付、右之趣興美江申達願書相下ケ候、

一、御年始罷出候寺社名前略不参之寺社者代を以献上之扇子箱御年長家迄為差上候様被仰付、則相達候、

一、箱館町年寄西村治兵衛、旧冬当所へ罷出候節差出候書面ヱトロフ御場所先請負人ゟ私共是迄被相願無余儀致役印金子借受け候分此度改而被仰付候、跡請負人藤野喜兵衛・西川准兵衛・岡田半兵衛三人之ものゟ懸念申出候ニ者、後日金主共ゟ故障筋出来候節右三人江金子調達等之致願合候存念ニも有之哉之旨御尋ニ御座候得共、役印ニ付自他如何之取引故障筋申出候而も私共限り引受、聊三人之もの江迷惑相掛申間敷候、依之御尋ニ付此段奉申上候趣、白鳥新十郎・西村治兵衛・白鳥五三郎・蛯子七左衛門・西村三五郎連名之書付、旧冬治兵衛帰郷之節持参、同勤調印之上、市屋定右衛門ゟ役印付借財調子之書面とも両通、今般治兵衛ゟ送来候間、御奉行所へ差上候、

一、ヱトロフ前請負人関東屋喜四郎外両人請負中地[6]他借財有之分箱館町年寄引受役印等いたし候分若跡請負人藤野喜兵衛外両人之もの江出金方申談ニも可有之哉与跡請負人懸念申出候付、箱館町年寄一同連印ニ而右様之義者不申出候趣之書面箱館ゟ相廻り、猶、市屋定右衛門外両人ゟも役印相願置候廉書壱通差出候、右三輪八之丞殿江差上置候、

正月十二日、極難之者六百五拾人、外ニ六十人者此度新規願上、都合ニ而十六石三升之積ニ而書面相済、来十七日御役所ニ而右一同江割渡遣申度趣申上置候、尤、御用達ゟ米七拾俵之内四拾俵ト三升此度差遣候、残り三十俵并請負人一同ゟ五拾俵、都合八拾俵之儀者二月上旬、其後者同月中旬頃ニ而も此度の分も都合三度ニ遣し申度旨、蠣崎四郎左衛門殿江委細申上置候、

一、御用達ゟ旧臘願済之救米来十七日極難之もの江遣候様為致度今朝申上候処、御聞届相済候御達有之、其段名（名主）中林九兵衛へ申達候、

一、ヱトロフ御場所藤野喜兵衛・岡田半兵衛・西川准兵衛三人江御請負被仰付候付、献上之儀外振合候得者金拾五両可差出廉ニ有之候得共、先請負之もの共未納金此度之請負人より納方被仰付候儀も有之候間、献上者三人ゟ為御馬具料金五両為差上候様被仰付候旨、蠣崎四郎左衛門殿御達付、岡田半兵衛申達候、

一、御用達・請負人ゟ市中難渋之もの江救之品差出度旨旧冬願済相成候ニ付、御賞詞御書取左ニ、

御用達藤野喜兵衛・伊達林右衛門・西川准兵衛・岩田金蔵・
岡田半兵衛・宮川増蔵・栖原仲蔵

近年打続米価高直之処、今以同様ニ付、市中小前之内難渋之もの茂可有之哉ニ存、今般其方共所持之米七拾俵合力致度願出候段奇特之儀ニ被思召候、依之御賞詞被成下候様ニとの御沙汰ニ候、

戌正月

請負人山田屋文右衛門・竹屋彦左衛門・万屋専左衛門・米屋勝三郎・
福嶋屋新右衛門・山崎屋新兵衛・仙北屋仁左衛門・和田屋茂兵衛・
野口屋又兵衛

前同文ニ而米五拾俵、

一、阿部屋伝治郎前同文ニ而壱人ニ付塩引壱本ツヽ、

右之通於御座敷蠣崎四郎左衛門殿ゟ被仰渡候、

正月十六日、今朝ゟ雪大吹獅子神事市中修行見合、諸人往来止ル、町々家々の屋根雪山の如し、去冬已来ヶ様なる大雪是なし、

一、非常消防方ニ付、法被色訳ケ纏雛形等并壱組五十人ツヽ（ホト宛）相立候組江頭取之もの両人も相立不申哉之旨其外とも消防方付手続可申上候、先消防方人数組立并道具類手配向可致儀者相見得可申趣被仰付候、小林三左衛門殿ゟ御達之旨、蠣崎重郎右衛門殿被仰聞候、

正月廿日、去暮備米蔵出ス御払可被成之分、俵物三百俵当節払切候間、今度三百九十俵蔵出ス仕度趣申上候、

一、山田屋勘兵衛方ニ而近年京都山崎屋伊三郎と申もの ゟ店売物注文いたし候付、家壱軒、土蔵弐ヶ所、穴蔵壱ヶ所書入之上世話預り居候得共、不行届ニ而右品々伊三郎へ引渡ニ相成候付、名主半右衛門ゟ申出候間、御吟味役御番奥平勝馬殿江此旨申上置候、尤、旅人故追テ当所之もの江売渡の趣ニ承知仕候、

一、備米三百九十九俵蔵出ス払之儀御聞済相成候間、明日西川・栖原両人江預ケ俵売之積り、蔵出ス付、人足手配等之義者名主九八江申聞置候、

一、市中在々備米之内、旧冬小売俵売御払ニ御用達江預ケ置候分、俵売之方払切ニ相成、猶又、此度伺済ニ相成越後柏崎米之内、弐百俵西川准兵衛、弐百俵栖原仲蔵、両家へ都合四百俵壱番蔵ゟ今日相渡、残米九十九俵有之候、御立会御目附今井善兵衛殿、御吟味役鹿能善蔵殿・西川定右衛門殿御越、町年寄桜庭梅太郎、名主新井田庄右衛門、町代宗兵衛・孫兵衛、御用

達西川准兵衛・栖原仲蔵両家、請負人行司阿部屋伝治郎・和田屋茂兵衛右手代罷出候、右米元買入之節改升四斗壱升壱合五勺入ニ候、

正月廿四日、御巡見様御入用品之内、茅簾四千七百枚程御用達ゟ旧冬酒田江注文申遣候処、茅斗りニ而者迚も員数取揃不申候間、茅簾取交候而も宜候半々ヶ成取揃可申哉之趣申来候、猶又、船積軽足の品故、一時ニ下し方相成不申船数ニ可相成、左候而者三月一はいも掛り可申旨申来候間、如何可仕哉之旨、藤野喜兵衛・岡田半兵衛両人伺出候間、三輪八之丞殿相伺候処、茅芳取交候而も員数取揃可申、尚又、下し方も三月中ニ而も宜趣被仰聞候間、其段両家へ申達候、

一、御巡見様御宿向東西在々江相運候切組材木運送ニ付、船手配心得書三輪八之丞殿ゟ御渡被成候、左ニ、

四百石　知り内村行　　弐百石　福嶋村行　　弐百石　吉岡村行
弐百石　茂草村行　　四百石　江良町村行　　弐百石　小砂子村行

右者凡積り二而二月上旬ゟ差廻度趣御作事方ゟ達有之候由、依船手配可致旨三輪八之丞殿被仰聞候、

一、坪田佐平治ゟ河内屋増右衛門江相懸り候金談出入内熟相成候得共、小松前町文吉江相懸り網苧代金之義付、右増右衛門ゟ内済証文差上兼候間文吉へ利解被仰付度趣、河内屋増右衛門ゟ願書差上候付相伺候処、文吉呼出ス利解可申聞、其上相用不申候ハヽ表向御吟味被仰付候積り被仰聞候、

一、市中土蔵是迄柾家根ニ候得共、右柾置家根ゟ隣家江相伝類焼も有之候由付、已来普請之土蔵瓦屋根可致候、是迄柾家根之分も追々瓦家根可致候、

一、已来普請之家蔵取建候節、町通小路裏通りとも成丈道幅広くいたし度候、右ニ付、其最寄地夫ゟ持出地面幅式者三尺又者壱間ニ而も続地面何ヶ所成とも割合可致候、家作之義者持地面ゟ雨落相除候迄之立前ニ候半々桁者壱尺ニ可限、若表裏横共三、四尺宛も引込元建候普請者桁相当ニ而不苦候、

一、家作庇無之候普請者不相成候間、已来普請之節其段相心得可申候、尤、三、四尺宛も引込候而家作致候半々立揚ケ造候而も不苦候、

一、家作之節町役江相届見分を請可申儀、去年中も触置候へとも兎角等閑ニ相成候、已来縄張之節急度相届立会可請事、

一、市中地面譲渡之節買方之もの ゟ五分方出金可致候、尤、金百両ニ五両御座候、是者万々一此已後出火等有之、類焼極難之もの江御救米等被下候へとも、其余も可被下置候

思召被為在候儀御内慮相伺候間、其節之御用意可被遊候趣、此段も伺上候、右五ヶ條半切江認メ蠣崎四郎左衛門殿江差上置候、御聞済之上者御触出ス被仰付度、此段申上置候、

正月廿七日、市中ニ而地面譲渡候節譲請候もの ゟ地面代金之外五分方町御役所江相納可申候、尤、非常消防等其外之用意ニ御備被成候趣之触書出ス、

一、市中家作の節地面縄張之節町役江相届立会を請可申候、土蔵屋根以来普請の節者瓦屋根ニ可致候、其外町小路幅等成丈ケ広く可致候趣触書差出候、

二月朔日、御巡見様御下向ニ付、御本陣松前修理殿・新井田右膳殿・太田豊治殿三軒被仰付候間、修理殿者目谷観平殿宅江引移、右膳殿者山下へ引移、豊治殿者藤野喜兵衛畑ケ引移候間、観平・山下両人引移候家弐軒早々取極メ明日申上候様、蠣崎重郎右衛門殿ゟ御達有之候間、田中九八殿江申聞置候、

御巡見様ニ而在々御普請被成候付、材木板るい柾等御用達・請負人一同相尋候而其もの ニ而御借上ケ被成候間御用達候様被仰付候得共、右一同持合

無之旨、蠣崎重郎右衛門殿へ申上置候、

一、西在札前村達右衛門、茂草村松兵衛、江良町村伝治郎・喜右衛門右四人ゟ難渋之もの江施米願の書面壱通差上候、

一、長崎俵物一昨年出方相増候得共、昨年者出劣候付畢竟米諸色高直故之儀と存候、右出劣相成候始末、町年寄連名之御答書差上候様被仰付候、

一、馬形ニテ御巡見様御宿ニ付諸士方引移之町家借上ケ候様先番之節被仰付、端立町伊兵衛・久三郎・清治右三軒申付候趣名主九八申立候間、蠣崎重郎右衛門殿へ申上候、

一、旅人宿甚太郎ゟ芝居興行之儀近頃者見物之出も遅く、夫故夜四ツ時頃相支舞候儀も有之恐入候間、已来者町方へ案内之前ニ一ト幕ツヽ相支舞候様ニ仕度願出候段、名主九八申出候間、御奉行所へ相窺候処、立会町方之不参前ニ始候儀者決して不相成候、見物之もの五人なり十人なり参り候半々直様町方へ案内次第、町方壱人も先江相越初幕為始、其内入無之候付札ニ相成候とか、引続見物もの入込興行いたしとか、何れニも町方相越候上、時宜寄取斗候半々仕舞も早く相成可申候間、左様相心得候様可申付旨被仰付候間、名主九八を以甚太郎へ申達ス、尚又、町方頭取中島幸吉へも申談事置候、

一、西在札前村達右衛門、茂草村松兵衛、江良町村伝治郎・喜右衛門ゟ難渋之もの江施米の願御聞済之旨蠣崎重郎右衛門殿御達ニ付、此節田中半右衛門西在出役中故右施米直様難渋之もの割渡候様申遣し候、尚又、右施米願のもの四人御用有之候間呼出ス候様被仰付候間、来五日罷出候様呼出ス申遣し候、

一、市中難渋之もの江御救米来十日遣度段伺書差上候様、尚又、西在前同断、

一、太田豊治下宿代り　　端立町伊兵衛

一、新井田右膳殿下宿代り　　山下幸治引移候分

端立町久兵衛

一、松前修理殿下宿代り　　目谷観平引移候分

同町　清治

右者御巡見様御本陣[秘]三軒被仰付候間、代りとして御借上ケ、三輪八之丞殿より被仰渡御請相済候、尤、私共ゟ申付候様被仰聞候間其積仕候、且又、右三人外方へ引移候半々其家賃者上ゟ被下置候旨申付遣候、

一、御巡見様御下向ニ相成候へ者津軽家役方付添罷越候間、右宿手配いたし候様、蠣崎四郎左衛門殿ゟ被仰付候間、同役談の上工藤忠兵衛申付候、尤、人数ニ寄外ニ壱、弐軒も宿申付候事、

一、松前修理殿御引移家目谷観平宅之趣兼而御達御座候処、手狭ニ付御免之上、代り北見伝治宅御借之旨御達有之候、

一、吉岡廻り御巡見御普請木品御雇船運賃金壱両、泊川町嘉作、宿種倉屋七右衛門ゟ書上、右者内御役所ゟ御渡可相成哉、追々雇船も有之付相伺置候、

二月十五日、東西蝦夷地江御固之御足軽勤番中白渕[洲]於御座敷御奉行并御吟味役方御例[列]座被仰渡候、差添頭取、

一、町在備米之内、御用達江是迄預置俵売小売致候分払切ニ相成候間、猶又、跡出ス申度趣伺済ニ相成候米高左ニ、米四百七十六俵、

内訳

柏崎米九十九俵　　同米　百七十俵

村上米百九十壱俵　　館村米十六俵

右明日御用達相渡候得者壱番蔵出払ニ相成、全く残り者諸士積米百五十俵

ニ御座候、

一、江戸為御替金七千両証文六通、書状六封添、三輪八之丞殿差上候、左ニ、

為御替金一札之事

一、御金千五百両也　但、通用金

右者去酉年九月中被仰付候為御替金当戌二月三日御下ケ金ニ而慥奉請取候、依之右代金来三月中於其御地下谷御屋敷江無相違上納可被成候、為念御替金一札如斯、

天保九戌年二月廿日

松前

藤野喜兵衛印

江戸四日市

明石屋治右衛門殿

同所小船町

伊勢屋長兵衛殿

書状添

為御替金一札之事

一、御金千五百両也

文言同断

年号月日

伊達屋

元兵衛印

江戸本両替町

村井新七殿

半田久蔵殿

鈴木源兵衛殿

書状添

為御替金一札之事

一、御金千五百両也

江戸鉄炮洲本漆町

栖原元兵衛殿

一、御金五百両ツヽ

栖原元兵衛殿

前同断

一、御金千五百両也

江戸日本橋万町

近江屋吉兵衛殿

書状添

栖原仲蔵

万屋専左衛門

米屋勝三郎

山田屋

文右衛門印

〆

一、生府町壱番蔵ゟ備米四百七拾六俵今日差出ス候付、御目附谷梯九十九殿、内御吟味役鈴木重太郎殿、町年寄村山重左衛門、名主専右衛門、同半右衛門、其外町代、御用達行司、請負人行司罷出候、

一、藤野喜兵衛・岡田半兵衛・西川准兵衛右三人ゟヱトロフ去酉年運上金并二分金、沖ノ口御口銭共、都合千二百六十六両二分、当四月中上納可仕候書付差上ル、尤、運上金千両、二分積金廿両、御口銭者弐百四十六両二分、

右書付工藤茂五郎殿江差上ル、

一、御巡見御入用木品吉岡村廻ス百廿石積ニ而金壱両二分ニ申立候、

一、同素間尺九拾七石七斗八升、金三両ニ相定前同断廻度趣願出候、

一、市中極難もの江御救米差出申度義、名主ゟ申出、尤、此度限りニ候間、此末草の根取候とも又在々江指辺なとに鯡取手間ニ相越なり何れとも取続方心懸ケ可申段とも、名主ゟ銘々支配之もの江可申聞積り申付置候、

一、御巡見様御入用すたれ旧冬中御用達ゟ庄内酒田表注文申遣候処、右代金之内此度金百両為替阿部屋伝治郎方へ渡り金相成候間御下ケ被下度趣兼而御用達ゟ申立ニ付、三輪八之丞殿へ相伺候処、未タ品もの不下内ニ御下ケ金願候も如何ニ可有之候間、御用達ゟ立かい伝治郎へ渡金いたし、追而品もの着の上ニ而御下ケ金申立可然被仰聞候間、御用達行司へ申立置候、

一、大工木挽ニ而三百人余有之候内、百三十人丈ケ人物相撰、消防方被仰付候付而者、此内三拾人長崎役場へ駈付被仰付候間、右三十人江付添遣し候もの壱、両人、名主とか又者町方詰所之内とかより見立申上候様被仰付候、大工・木挽之内御作事ニ而相調、人数百三十人書付出来付、右世話方之もの并大工頭・木挽頭御呼出ス之上、明日当御役所ニ而消防方被仰渡之積り、依之呼出ス之儀中村孫平江致通達候、

一、大工頭并世話方、木挽頭并世話方御呼出ス、此度御作事ニ而相調書上候人数百三十人消防方被仰付候間、万一出火之節ハ御作事江駈付御下知を請、精々相働可申、尤、右之内、三十人者長崎役場江駈付、猶又、俵物蔵江も手訳ケいたし罷越消防可致旨、三輪八之丞殿被仰渡候、追而世話方持壱組ツヽ壱人別呼出ス、町方頭取中村孫平より申渡候積り、

三月八日、鯡豊漁円満之御祈祷阿吽寺并七社江被仰付候ニ付、双方へ相達ス、

一、消防道具之内、団扇・水籠拵方中山久吉江願の通被仰付候、団扇壱本代六百文、水籠壱ツ代三百文、猶又、同人町方付、右拵方四、五十日之内十日程ニ一度ツヽ勤番可致義共御用之間江伺之上ニ而御聞済被仰付候、委細者町方頭取之内中嶋幸吉へ申談置候、

一、市中江払米直段の義是迄拾弐匁売出候、然処、追々入米茂有之候付直段壱匁五分引下ケ方いたし、拾匁五分ニ今日ゟ売出可申旨、名主并売出候伊達・西川・岡田・栖原江申付遣し候、尤、今日迄之残米書上取之候、左ニ、

米四十七俵ト端米壱俵　伊達林右衛門
同四十八俵　西川准兵衛
同七十五俵　栖原仲蔵
米百七十六俵一口
同五十壱俵一口　岡田半兵衛
同四十四俵乱俵共一口

〆

三月九日、昼八ツ時、根木[ママ]村辺ゟ初鯡群来双方へ群集渡候、寅向町鯨岩ゟ群来初、泊川大澗迄相応の鯡御座候、此段奉申上候、

戌三月九日　　鯡見掛り

一、去ル八日、江州之吉右衛門・平吉右両人者壱人者松屋四郎兵衛、壱人者嶋屋藤吉与相名乗、下在泉沢村へ去ル九月下旬ニ相渡り候、実者江州の吉右衛門と申候者元御料中相下り候当時御勘定松田伝十郎と申仁なり、江州之平吉ハ大嶋東作と申仁なり、松屋四郎兵衛・嶋屋藤吉此両人色々之改名ニ而穏蜜[ママ]与相聞得候、先達而当方へ相廻り、山田福松方旅宿、去ル八日爰元出帆之趣、福松ゟ名主加藤専右衛門江相届、夫ゟ当方へ申出候付、三輪

八之丞殿申上置候、
一、昨九日昼八半時、下在大沢村・根森村・下及部村迄群来鯡、
一、昨夜五ツ時、宮ノ歌むら海馬岩ゟ群来、白府村ゟ礼髭迄一円群来候、別而礼髭厚群来之注進、
三月十一日、昨夜四ツ時頃、万太郎澗沖、生府澗ゟ惣社堂弁天迄群来鯡有之候、
一、消防道具之儀者名主五人江組々之分不残御預ケ被仰付候旨、御用ノ間ゟ御達ニ付、蠣崎重郎右衛門殿ゟ被仰聞候付、名主加藤専右衛門申聞、一同江も為知置候様申談遣し候、
一、十三日暁六ツ時過に原口村持字堂之下群来鯡之趣、村役ゟ注進有之、
一、松前修理殿宅・新井田右膳殿宅両家共引移相済、当御役所ヨリ同役之内村山重左衛門、名主新井田庄右衛門罷越立会、御作事方へ引渡申候、依之蠣崎重郎右衛門殿へ申上置候、
三月十五日、御巡見様市中御通筋建家等破損いたし見苦敷ヶ所も可有之哉、猶又、町普請不宜候ヶ所可有之哉、御見廻りとして御奉行三輪八之丞殿御出役、蠣崎重郎右衛門殿、町御吟味役氏家六郎左衛門殿、町年寄、名主、書役、町方町代共御召連、御廻之上、不宜ヶ所手入之儀夫々御差図有之、名主・町代承之候、尤、今日御見廻り当御役所前ヨリ馬坂通り、八幡社、川原町ゟ神明社、蔵町、中袋町、枝ヶ崎町、泊川、寅向町迄、夫ゟ馬形、端立町ニ而御旅館前通り、両町二平坂迄東向之分御見廻相済候、
一、藤野喜兵衛ゟヱトロフ御場所御引渡之儀者御出役ニ而も被遣候哉、御勤番之方ニ而御取斗へ御引渡ニ可相成哉之旨窺出候間、三輪八之丞殿へ申上候処、御用之間江御窺之上被仰聞候筈、
一、市中非常消防方、一番ゟ六番迄六組、壱組人数五十人ツヽ、内、世話方両人、纏持壱人、都合壱組ゟ三人ツヽ相除、其余者拾人ニ壱人ツヽ小頭相立可申候、其外仕方立之義共一同江申渡候、中白渕御座敷江集、表向御奉行ヨリ御申渡、其余者町年寄ゟ巨細別帳之通り申渡候、
一、ヱトロフ御場所旧冬藤野・岡田・西川三軒へ御請負被仰付候付、当春場所請取渡之儀別段御立会ニ而も被仰付へく哉之旨伺上候処、去年中北蝦夷地御引渡、栖原仲蔵ゟ半方御引上ケ小川屋九兵衛へ御渡相成候節も別段上ゟ不被遣候間、右之振合ニ而取斗へ可申之旨、三輪八之丞殿御達ニ付、則其段藤野手代幸右衛門相達、
一、消防方法被三百枚、帽子三百枚、右者庄内酒田表ニ而出来方御用達行司三人藤野・岡田・宮川江申付候、委細者名主中ニ而取調、注文書可相渡事、
一、消防方四番組ゟ六番組迄三組之もの、昨日之通り被仰渡候、
一、消防道具之内、頭巾・看板注文の義者庄内江可被申遣候之処、御用達相談ニ寄新潟可申遣積り、尤、御用達組江書附相渡任せ候、
三月廿二日、茶屋一同江抱子并芸者、召使、小女ニ而も家中何れゟ申参り候而も又者市中ニ而出入之もの心易ミものゟ願ニ参り候共家中ニ候半々一切相断可申候、万々一心得違ニ而かし遣候茶屋之女子者両在江送り遣可申候、其上別而不狩之茶屋者株式御取上ケ被成候間、是迄度々厳敷申付置候へとも此度者格別厳重ニ取極、一同之もの不心得無之様相揃候上申付候、尤、世話方宗太郎・平左衛門、名主九八江者訳テ委細申付置候、
三月廿四日、赤御門両脇土手御手入付、人足六百四十五人積の由、内、半分三百廿人余者町人足為差出候様被仰出候段、御作事方ゟ申来候間、名主中林九兵衛へ申達候、

一、ヱトロフ御場所関東屋喜四郎外両人とも不行届付御引上ケ相成、跡請負人藤野・西川・岡田右三軒江当戌年ヨリ被仰付候、依之場所残品并囲荷物等者請取渡方伺出候付、御下知書双方へ被仰付候、左ニ、

ヱトロフ御場所、藤野喜兵衛始外両人江御請負被仰付候、尤、御場所在来品者不残当人共へ被下、残品ハ不残先請負人関東屋喜四郎始外両人江被下相成候付、右品廉訳定、左之通、

在来品

一、勤番所并漁会所、番家、蔵々、建増之分共不残在来品可為事、

一、勤番所并会所其外番家付諸道具之義者不残在来品可為事、

但、当戌年正月元日ゟ巳来入足候新規諸品者不残酉年残品可為事、

一、会所元始外漁場産物囲荷物之義者去酉年御運上金并御口銭共跡請負人江上納被仰付候付、右廉江被下ニ相成候、

残もの

一、当戌年正月元日ゟ御場所勤番之族賄向始通辞、番人、夷人介抱米、酒、醤油、塩噌、都而日用品共遣払者勿論、御場所有合之分不残去酉年残品可為事、

一、仕入ニ有之候糸物・網類・塗物・木綿るい・烟草・縄筵、其外荒物・小間もの等迄、都而昨酉年中不相用仕入下シ之侭差置候分者不残酉年残もの可為事、

右之通可相心得もの也、

戌三月

町御役所㊞

右之書付、壱通者藤野喜兵衛・西川准兵衛・岡田半兵衛江相渡、壱通者関東屋喜四郎へ相渡、

一、生府町・唐津内町鯡厚群来、荒谷村同断、宮ノ歌村群来候趣住進、

一、公儀江御献上煎海鼠惣目形四拾六貫三百匁、内、廿五貫百匁是迄請負人ゟ相納候分差引、廿壱貫弐百匁、此斤百三十二斤半全不足、

一、白干鮑前同様御献上之分惣目形八拾四貫五百匁、内、六拾七貫匁請負人是迄相納候分差引、拾七貫五百匁、此斤百九斤三分七五全不足、

右煎海鼠・鮑不足之分、長崎俵物方役人江河内屋増右衛門を以其品借願入候処聞入相成、則増右衛門ヨリ内御役所江可相納積り、尤、右代り品御用達・請負人江割合、夏中可相納候事、

四月六日、今朝六半時、光善寺自火ニ而焼失いたし、右御届書同寺代欣求院ゟ差上候、光善寺住持順超儀、此節病気引籠罷在候付、今朝随身之僧不残本堂江勤行ニ罷出候跡ニ而所化部家ゟ出火いたし、住持始随身共走集消防致候得共、火勢強く難消奉存候間、本堂駈付本尊并御尊牌者取出候得共、諸堂不残焼失いたし誠以奉恐入候、依之順超儀者末寺欣求院ニ相慎罷在候間、此段奉申上候趣之書面、三輪八之丞殿差上候、

一、近江屋忠右衛門書付を以、

松平加賀守様

御家中

田村前名　上下三人

同五十風小文治内　月安平助　上下弐人

右者当所岩田金蔵、江差岸田三右衛門方江用事有之、宿工藤忠兵衛、津軽藤嶋之石蔵船ニ而昨日至着仕候趣御届書差上候、江差廻り御判願出候処、則御聞届相成候、

一、梁川中木儀左衛門ゟ箱館茅部六ヶ場所利安之仕込いたし、出産物者大坂表江　御名目之御蔵屋敷相建取捌、右潤者関東屋喜四郎、中村屋新左衛門等之拝借金追々儀左衛門ゟ返納いたし、莫太之御厚恩を奉報度趣之願書御奉行所へ入御覧置候、御内評被下候積り、

四月十二日、光善寺宝物之類之内今度出火付焼失之品有之哉、猶又　勅額之儀も如何致候哉之旨相尋候様被仰出候間、同寺代欣求院江申達候、

一、惣社堂弐番蔵ニ市中在々備米去酉年買入候分相詰有之候、右蔵縁下ニ米少し宛所々ニこぼれ相見得候へとも全人の手を入候様ニも無之趣、生府町仮町代重兵衛申立候間、則御奉行所へ申上、御目附中・御吟味役中御出役、町年寄村山重左衛門、名主、町代同道ニ而相越、弐番蔵之内相改候処、別条無之、全く鼡沢山ニ而敷板のすきゟ米落こぼれ候趣付、右敷板之すき間大工取掛り目ふせ板為打候積り申談候、

一、馬形御旅館三軒江日々人足廿人ツヽ差出居候へとも、兎角人足の事故働方早我取不申、依之一日壱人江弐百文ツヽ、七時過ゟ居残り働候へ者五拾文増ニいたし、雇人廿人ツヽ差出候様、御作事方ゟ申来、名主新井田庄右衛門江申達候、

一、御巡見様御旅館向亭主役、同手代り、料理人等人物見立書上ケ可申被仰付候間、同役并名主一同江も申達置候、

四月十四日、光善寺住持順超儀、去四日朝同寺出火付奉恐入、是迄欣求院ニ相慎罷在候処、此度慎御免被仰出、今日欣求院御呼出スの上、蠣崎重郎右衛門殿ゟ被仰渡候、

四月十五日、昨夜八ツ時頃、札前村字二ツ石与申処ニ而鯡薄群来之趣住進、今十五日献上五十疋持参、則相納候、

一、宿阿部屋太治兵衛ゟ津軽十三ノ兼治郎百弐、三十石積、知り内村江切組材木積入雇船運賃金七両被下度願書上ル、

一、同宿ゟ青森之助右衛門船百七十三石積、茂草村・江良町村両所へ切組木品雇船ニ付運賃金拾両ニ申立候、

一、宿工藤忠兵衛、南部大畑ノ幸吉八十石積、小砂子村へ切組積入運賃金六両ニ相定、

一、宿種倉屋七右衛門、八十石積大松前町要右衛門、小砂子村行運賃金六両之申立候、

一、関東屋儀右衛門ゟ箱館在カヤヘ辺鯡漁方之もの江仕込いたし候願書、宿関東屋清治兵衛加印一通ならび込入候願書なり、

一、坪田佐平治ゟ兼而願上候市中在々共ニ貸方之もの内熟整兼候、右付姓名書名主ゟ差出呉候様申出候趣、宮川半右衛門ゟ申出候付、御奉行所へ相伺候処、元取引之儀者相対ニ而身元心得居候テ貸方致候筈、勿論証文等も所持之筈候間、別段当方ゟ姓名書差出候ニ不及趣被仰聞候間、其段半右衛門相達候、

御巡見様御下向ニ付、市中在々諸入用品々代之内金弐百五十両拝借之上御下ケ金書面を以御願申上候、

四月廿日、法幢寺江永平寺ゟ役僧上下四人ニ而昨夕着ニ付、同寺之義者普請中故法源寺差置候様被仰出候間、法幢寺并法源寺江此旨相達候、

一、法幢寺以書付越州大本山永平寺出役

照明寺梵克、副役洞雲寺益聳、家来戸村文之助・伊三郎、都合上下四人、今般宗用ニ付宿中島屋勘右衛門、三厩之常吉船乗参り、拙寺へ罷越候間、此段御届書差上候、

一、加州様御下し米五斗三合入九百俵、右御買上ケ被下度趣、宿近江屋忠右衛門ゟ書上、直段認メ無之ニ付相尋候処、此節加州御家中逼留中ニ而被申候者御買上相成候半々直段者思召次第ニ而不苦趣申居候由、乍去直段付無之候而者如何之旨忠右衛門江申聞候処、同人限り当時相庭九匁六分与書入、右書面蠣崎四郎左衛門殿差上候処、御披露之上、御不用之趣被仰出候間、則近江屋忠右衛門江相達、

一、御巡見様ニ付、当所并両在亭主役於御座鋪ニ蠣崎四郎左衛門殿ゟ被仰渡候、

当所

黒田様　御宿亭主役　伊達林右衛門
中根様　御宿亭主役　西川准兵衛
岡田様　御宿亭主役　栖原仲蔵

茂草村御昼

黒田様　御宿亭主役　大津屋武左衛門
中根様　御宿亭主役　和田屋茂兵衛
岡田様　同　浜田屋政右衛門

江良町村御泊

黒田様　御宿亭主役　阿部屋伝治郎
中根様　同　竹屋彦左衛門
岡田様　同　近江屋忠右衛門

小砂子村御昼

黒田様　御宿亭主役　中嶋屋勘右衛門
中根様　同　種倉屋七右衛門
岡田様　同　仙北屋仁左衛門

吉岡村御昼

黒田様　御宿亭主役　福嶋屋新右衛門
中根様　同　沢田屋久兵衛
岡田様　同　川内屋徳兵衛

福嶋村御泊

黒田様　御宿亭主　広嶋屋布右衛門
中根様　同　万屋専左衛門
岡田様　同　柏屋庄兵衛

一ノ渡御昼

黒田様　御宿亭主　京屋平八
中根様　御仮家亭主　阿部屋太次兵衛
岡田様　同　川内屋武兵衛

知り内村御泊

黒田様　御宿亭主　工藤庄兵衛
中根様　同　山崎屋新八
岡田様　同　八木屋浅治

右之通亭主役被仰付候、尤、手代り并東西江御案内者・料理人等者取調、

一、御巡見様御通筋、明日蠣崎将監殿御始御役人衆御見分御座候様被仰出候間、向々江申達候、

一、御巡見様東西在々御巡行之砌御案内、村山重左衛門於御用之間御掛り蠣崎将監殿ゟ被仰渡候、

一、同御至着之節御引船乗組之仮足軽問屋手代様之もの心組可申趣被仰聞候付、田中九八江申談、名主一同へ申含置候、

一、同御下向ニ付人足差配御荷物共掛り、名主三人、馬指弐人、同小頭弐人名前可申上趣被仰付候付、名主へ相達ス候処、馬指宗治郎、仮馬指〈札前村〉達右衛門、小頭〈赤神村〉市兵衛、同〈清部村〉松右衛門、右申立候、

一、栖原仲蔵所持之西館町元和田屋敷之内、表口拾六間四尺、裏行凡拾七間程御用ニ付代金可書上様被仰付候処、左ニ、

西館町地面壱ヶ所、此代金弐百五拾両、内、金八拾両者土蔵并建家代之見込ニ而、引残金百七拾両也、但、表口十六間四尺、裏行三拾弐間、此坪数五百三十三坪割、壱坪付金壱分ト永六十八文九分、此度御入用地凡表口拾六間四尺、裏行拾七間、此坪数弐百八十三坪三分、壱坪付金壱分ト永六十八文九分、代金九十両壱歩ト永九十四文三分、

右栖原仲蔵ゟ書付差出候付、御奉行所へ差上候、

一、江良町村旅館黒田様分亭主役　元竹屋彦左衛門
　　改阿部屋伝治郎
　　元亭主役阿部屋伝治郎

一、同中根様分　改竹屋彦左衛門

右者中根伝七郎様御宿亭主伝治郎名前差支之様ニ相唱聞候間、同人黒田五左衛門様江相廻ス、中根様へ竹屋彦左衛門入替ニ致候、右之趣者御奉行所ゟ被仰付候付、亭主役入替仕候、

一、三輪八之丞殿東西在々道橋普請見分被仰付候、一両日出立之積り、

一、栖原仲蔵持地西館町元和田屋敷、代金者金九十両壱分ト永九十四文三分ニ御買上ケ被仰付候、

一、御巡見様御至着之砌沖ノ口御役所おゐて御小休相成候間、御供方御腰かけ処岩田金蔵・近江屋忠右衛門・大津屋武左衛門等江可申付事、

一、馬指宗治郎、同仮〈札前村〉達右衛門、小頭〈赤神村〉市兵衛、同〈清部村〉松右衛門四人御巡見様御下向付、東西在々浜表共ニ掛り被仰付候旨、蠣崎重郎右衛門殿ゟ被仰渡候、尤、伝兵衛、名主専右衛門罷出候、

一、加賀米九百俵八匁五分ニ而御買上ケ被仰付度段、近江屋忠右衛門ゟ書面を以願出候、

四月廿八日、御巡見様御下向付津軽様ゟ御上乗船三艘当入津之上為登并下ケ方掛り工藤忠兵衛被仰付候、

一、沖ノ口下タ御上り場普請付、日々人足十五人ツヽ差出候様御達、尤、御作事ゟ頭立候もの差出候旨被仰聞候、

一、御巡見様御巡行之節、西在乙部村并東西〔在〕黒岩村ニテ蝦夷鹿の舞・槌打・弓射等御覧被遊候付、黒岩之分者東蝦夷地之内ゟ蝦夷御取寄被成候ニ付、此度三輪八之丞殿所々御見分として箱館江御出被成候得者同所御奉行牧田七郎右衛門殿江御談之積りニ御座候由、乙部村之義江指に請負人無之候間、西地之内蝦夷差出候様之場所々申上候様、蠣崎重郎右衛門殿ゟ御達、

一、法幢寺書付を以、永平寺化僧照明寺梵亮長老罷下り候ニ付、登　城仕、御目見相済候後、御役方江茂廻勤仕度、尤、先例御座候間、御差支之儀無御座候半々被仰付被下置度趣願書、蠣崎重郎右衛門殿へ差上候、

一、白御紋付御幕　壱張

右者永平寺化僧宿江相用へ候間拝借被仰付度旨、法幢寺ゟ願書差上、御聞

済付、役僧江申達、尤、御武器方ヨリ御幕持参ニ付、役僧へ相渡候、

一、箱入書状　壱封

新井田周治様　　永平寺
蠣崎四郎左衛門様　　鑑院

右壱封蠣崎重郎右衛門殿江差上候、

一、西在御巡見様下宿等茅屋根手入として、御足軽二ノ袋徳蔵、明日江良町村迄出立ニ付、御印鑑相渡、

一、種倉屋七右衛門ゟ秋田七処米九百俵、直段八匁五分ニテ御買上ケ願有之候処、御不用之趣被仰出、七右衛門へ申達候、

一、御巡見様御乗船三艘揚場小松前・大松前辺浜手御見分として御奉行出役蠣崎重郎右衛門殿并掛り御目付新井田百右衛門殿、掛り問屋工藤忠兵衛、町年寄村山重左衛門、名主、書役、町方等浜辺江罷出候、

閏四月朔日、御製札掛場之石垣損候付、此度新規積直ス、壱坪付中ノ直段金壱両壱分ニ而細工念入為拵候様

蠣崎四郎左衛門殿ゟ被仰付候間、名主江達、是迄石垣通なれハ惣坪数壱坪七分三厘有之由、此度新規出来之上坪数相究候積り、

一、一ノ渡御昼所亭主役阿部屋太次兵衛・京屋平八・川内屋武兵衛三人罷出、御作事ニ而一ノ渡御仮家図書拝見仕候処、余り手狭之御間取ニ而惣棟六間ニ十間之間（クチニ）台所廻り共有之、外御昼所同様二ノ膳付之御取扱候得者道具置処ニも困入奉存候間、今少々手広ニ被（マヽ）被仰付被成下度、乍去御取扱之模様ニ寄、赤飯ニ煎染とか亦者御本膳御飯ニ御皿・御平斗りいたし、手軽の御取扱ニ相済候半々手狭ニ而も随分手配出来可申、此段御伺被下度趣申出候間、蠣崎四郎左衛門殿江申上置候、猶亦、外御昼所同様之御取扱御座候半々私共限りヶ様之御間取仕度、麁絵図相認候旨申聞差出候間、懸御目置候、

閏四月二日、白鳥形部代忰采女書付を以、諏訪大明神之下遷宮供料先年宝暦度之振（フリ）合ゟ格別減少いたし書上候処、右御宮御見分相済候得共未タ御作事ゟ書上茂無之候間、書面預置候様被仰付候、

一、浜表掃除方高木半太夫・桜庭金平兼而被仰付有之候処、昨日御徒士ゟ斎藤政吉・工藤百太郎両人被仰付、今日ゟ人足四、五人ツヽ差出、掃除ニ取掛り候積、猶又、是迄相積候浜辺之ちりあくた運方も無之候付、三半船江積入沖合江捨候様被仰付、名主へも申達置候、

一、福嶋村御旅館亭主役　　広嶋屋布右衛門
　　万屋専左衛門
　　柏屋庄兵衛

右者福嶋村おゐて借上道具取調方ニ相越候趣付、馬壱疋ツヽ賄共、御下鑑壱枚ツヽ相渡、

一、三半船壱艘御巡見様御召船為登方其外共筒船壱艘浜掃除塵芥沖ノ手江捨候人足廿人入用、

右掃除方掛り桜庭金平申出、名主へ相達候、

一、御巡見様御下向付浜表掃除方士中被仰付候手配有之候付、已来市中もの心得違ニ而夜分塵芥捨候もの於有之者厳敷御咎可被仰付旨御触書差出候并名主一同江右ちりあくた猥りニ捨候もの有之候而者過料等被仰付難義いたし候而者不宜候間、銘々支配之町内之もの自分宅江呼集、已来心得違無之

様きひしく可申聞、尚又、塵芥捨場等町内之小路等見立、わくニ而も相拵
候而追々沖合江船ニ而捨候か山手江捨候か致方可有之候、
右厳敷申談候、宮川半右衛門・田中九八・新井田庄右衛門、
但、中林九兵衛・加藤専右衛門者此時出席無之候、三人ゟ可申聞事、
一、庄内蔵米千三百俵、直段七匁六分ニ而売上度段、工藤庄兵衛ゟ附米上ル、
閏四月五日、御巡見御用江良町村御旅館亭主役三人之者同所江道具調相越候
付、御印鑑願出、左ニ壱枚ツヽ相渡、賄馬壱疋ツヽ、阿部屋伝治郎、竹屋
彦左衛門、近江屋忠右衛門、
一、越後三嶋郡尼瀬町百姓坪田屋佐平治ゟ当市中之もの三十人余江相懸り金
銀出入訴書両度願書差上候分、五、六人者熟談内済相整候得共、廿五、六
人者行届不申候ニ付、是迄差上候願書者御下ケ被下度旨願下ケ願書差上候
付、蠣崎四郎左衛門殿相伺候処、此上者無拠候間下ケ遣候方可有之候、猶、
右行届き兼候付願書相下ケ候上者江戸表御奉行所へ訴出候間、定之通相手
方性名書差出呉候様と之願書ニ候得共、右性名書之義者差出候事不相成
候、訳者佐平治ゟ金銀取替候節者其者共ヨリ証札委く取置候筈、元ゟ不存
もの江取替候筈無之候、左候節者別段性名書無之候共不苦事不相成旨被仰
候、依之佐平治ゟ差上置候願書二通并性名書差出呉候様之願書共都合三通
名主一同江相下ケ遣し候、但、佐平治ゟ差出候願書二通之写、其外内済之
願書等写物等委く右一件袋に有之候、
閏四月六日、立石野ゟヲリト坂迄之道橋坂ともに普請積書与市ゟ此間中差出
置候分材木共惣〆高金拾七両余書面差上候、
一、越前之永平寺化僧代役僧壱人罷越候処、洞雲寺与号ス、供方者僧弐人、
若党そり取ニ而
表御門ヨリ通罷越候、
殿様江献上品
絵奉書五状　〈壱台〉白木ニテ
扇子〈三本入〉壱箱〈壱台〉同断
立目録江昆布添
右者蠣崎重郎右衛門殿御座鋪ニ而御逢有之、御請取、御挨拶之上、役僧中
者罷帰り候節、重郎右衛門殿者玄関迄見送り、尤、継上下ニ有之候、但、
玄関ニ而取次方者書役之内壱人帯刀ニ而罷出候、茶たは粉盆者子供役之内
ゟ壱人出テ候、
一、御巡見様付、道中御案内拾二人、当所并東西村々下宿亭主役之もの一同、
手代り之もの一同、蠣崎重郎右衛門殿ゟ被仰付候、名前者別紙之通認メ有
之候、
一、先年御巡見様御下向之節正行寺ゟ差出御覧入候宝物、不残文政十年亥十
二月二日自火ニ而寺焼失之砌同様ニ而此節無之旨書面差出候間、前同断、
一、茂草村御昼御本陣亭主之もの大津屋武左衛門・浜田屋政右衛門・和田屋
茂兵衛、諸道具等取調として罷越候付、馬壱疋御印鑑相渡、尚、小砂子村
御昼御本陣亭主之もの種倉屋七右衛門・中嶋屋勘右衛門・仙北屋仁左衛門
前同断、
一、御巡見様御下向ニ付津軽様ゟ役人中差添、立船ニ而罷越候間、御帰り迄
一同逗留被致候付、宿拾壱軒村山重左衛門ゟ申渡候、工藤忠兵衛義者先ニ
立、右宿々手配共可致旨申渡候、名前者別紙ニ認メ無之事、但、岡田半兵
衛、宮川増蔵、工藤忠兵衛、上野屋又三郎、工藤忠兵衛、能登屋八九郎、
小川屋重兵衛、古畑屋伝十郎、天屋善兵衛、庄内屋宇左衛門、近江屋清吉、

長崎屋宇吉、拾壱軒、名主九兵衛差添ニ而申渡候、
一、御巡見様吉岡村御昼宿亭主役川内屋徳兵衛・沢田屋久兵衛・福嶋屋新右衛門〈代参〉久兵衛参り候間、馬弐疋賄御印鑑二枚相渡候、
閏四月八日、熊野宮一ノ鳥居根ちき昨日迄出来いたし候間、此度限り社人方ニ而清メ之祈祷仕候間、両御役所へ御神酒差上申度候得共、已来之例に不相成仕来之通御　上ニ而出来仕候様蠣崎重郎右衛門殿江申上候処、御承知有之、此旨御用之間被仰立候積り、社人木村山城申立候、
一、箱館ゟ蛭子半五郎昨夕至着致候、御巡見様并御普請役衆御道中御用兼参り候旨相嘶居申候、
閏四月十日、永平寺化僧江昨日御馳走御料理被下置難有奉存候趣、猶又、法源寺義相伴被仰付是亦難有奉存候旨、法幢寺役僧罷出御礼申上候間、蠣崎重郎右衛門殿江申上候、
一、御巡見様江付添参り候津軽家旅宿、先規之通り九軒、外ニ用意弐軒、都合拾壱軒名前書上候、尤、当月七日筆記有之候、庄内屋宇左衛門・近江屋清吉両家者用意宿ニ候、
一、法幢寺・法源寺・龍雲院・寿養寺連印を以、永平寺江金五拾両之御寄附被仰付難有奉存候得共、昨年ゟ両度役僧相下り、右入用等有之当惑仕候間、明年・明後年弐ヶ年ニ金五十両御寄附御増被下度願書差上候得共此節種々御物入多く御時節付難被仰付願書御下ケニ相成候間、法幢寺役僧江申達候、
一、御普請役田村五郎四郎様東蝦夷地子モロ場所江煎海鼠・干鮑御用之儀ニ付廻浦相越候趣、右人足差配御足軽田中正平被仰付候、
一、東西村々道橋普請人足扶持米弐百三十俵願之通御聞済被仰付候、尤、巨細者御巡見御用書物ニ有之候、
一、市中町代共不残御呼出ス之上、常々町義心懸候ニ付格別之以御沙汰壱ヶ年金弐両ツヽ被下置候、尤、日夜番廻り等之もの江入念申付候事、猶、風烈之節五人組等召連夜廻り可致旨共被仰渡候、
一、御普請役子モロ御廻嶋付、村山伝兵衛差添、別段佐藤豊七殿御目附へ出役ニ而則差添被仰付候、
一、越前永平寺化僧相越候付、　御上ゟ金弐十両御寄附并市中之儀者当年御巡見付割合も有之候間、此度者
御上ゟ金三拾両市中之分被下候、江差・箱館之分共、
一、庄内米三百俵、直段七匁六分ニ而阿部屋利兵衛ゟ御買上ケ願出候、
一、壱朱銀市中不通用相成、一同難渋仕候付御引替之義願上度趣書面差上候、尤、已来他国ゟ入込之分者一金ニ而も請取不申候、猶、当廿日限り引かい被仰付度奉願上候段、請負人惣代・問屋頭取両人、御用達行司連印ニ而差上候、
一、坪田屋佐平治ゟ市中并在々之もの抔懸候金談筋内済熟談行届兼候付差上置候願書願下ケいたし候ニ付、性〔姓〕名書差出呉候様、書面を以願上候得共、右性〔姓〕名書可差出筋無之候間下ケ遣候処、押而願出候付、三輪八之丞殿差上、御沙汰願上候、
一、永平寺化僧梵亮罷下り、当市中・江差・箱館とも寄附願出候得共、時節柄故当市中在々共別段寄附無之候而御上ゟ金三十両被下候、則桜庭梅太郎持参、外ニ御家老衆ゟ被進物、
　一、蝦夷錦　壱巻　但、杉ノ平箱入、
　一、昆布　二抱
　一、青玉　拾連　但、箱入、

化僧梵亮江桜庭梅太郎持参、

一、津軽町御奉行江当方町奉行所ゟ御巡見ニ付而之御用向之由ニ而御用状壱封御渡付、此度津軽行御飛脚須川賢次郎・中村嘉吉江相渡、

一、壱朱金之儀、来十月迄ニ引替候様、兼而江戸表ゟ御触有之処、此節何となく市中おゐて不通用ニ相成甚差支候間、何れとも差支ニ不相成様御下知被下度町代ゟ申出候付、御用達・名主・問屋・請負人等へも相尋候処、町代申立之通不通用ニ相成居候間、有合壱朱金者御引替被成下、以後船手等ゟ壱朱金請取不申様仕度申上候処、来十月迄者是迄之通通用可致、尤、小前ニ所持有之分ハ御取替被下、中通以上之分ハ金子為差登、代金下り之上御渡可被成、猶又、江戸ニ而はね金有之節者其分如何致候哉、引替之手続等も談之上申上候様昨日被仰付候而、御用達・名主・問屋・小宿・請負人申談置候、

一、シツナイ・ウラカワ・シヤマニ右三場所ゟ昆布千石目長崎ニ而臨時御用御買上ケ被仰出、御奉行所ゟ御達有之、則請負人万屋専左衛門江申渡候、尤、仕立等者俵物問屋へ聞合可申、猶又、請負人方ニ而箱館積取於同所売上候儀とも専左衛門江申達候、

一、長崎出役西郷文之進、此度東蝦夷地相越候付為御挨拶と御目録金弐百疋被進候付、梅太郎持参之積り、

閏四月十八日、礼髭峠新道切開普請方、申立之通り、掛り池浦治左衛門江被仰付候、尤、人足凡四百廿三人之見積り、山ノ上ヨリ新道通、礼髭村入口迄凡八百間余、人足壱人付割普請巾二間・長二間ツヽ割渡可申趣、扶持米之義者吉岡村ゟ白府・宮ノ歌村ゟ之助人足泊居候もの江者壱升五合、日帰り者居村之もの共壱升ツヽ、女者半扶持之積申談候、

一、昨十七日夜、江戸御飛脚広瀬岩五郎、外仮御足軽壱人罷下り候、右御便り二、

殿様御不例之趣申来候由承知仕候、

一、法幢寺玄暁和尚罷出、永平寺江御寄附金并品々被下もの等有之難有奉存候、右御礼申上候趣申聞候間、御用番へ申上候、

一、永平寺化僧照明寺梵亮、洞雲寺益聳、今日ゟ風待之届書面ニ而申出候、

閏四月十九日、永平寺江御奉行所ヨリ御返翰相渡候、則受取書取之、油紙包、

永平寺　　蝋崎四郎左衛門
鑑院様　　三輪八之丞
　　蝋崎重郎右衛門

一、殿様御不例付、今井五郎五郎為御伺当廿三日ゟ風待、江戸登被仰付候、

一、御巡見黒田五左衛門様御旅館亭主役伊達林右衛門江被仰付有之処、同人義此節江戸表罷在下着延引可致趣ニ付、岩田金蔵江被仰替候、伊達林右衛門義者御免相成候、

一、市中備米之義、阿部屋利兵衛ゟ庄内柏蔵米千弐百俵売上度旨願出候付、御用達・請負人相談いたし候処、庄内辺ノ米者米症よわく可有之候間、右米者見合候、依而已来者越後米蔵もの二可仕積取揃候、此時行司御用達藤野喜兵衛・岡田半兵衛、請負人行司竹屋彦左衛門・万屋専左衛門代時四郎、右四人罷出候、

同廿二日、前米市中升直段七匁壱分御買上ケ被下度旨願出候、

一、永平寺化僧出帆致候趣届出候、

閏四月廿三日、白鳥形部ゟ一昨日書面を以、諏訪明神合殿御普請出来付、元社之通り箱棟江御紋被居置候様仕度願尤ニ者候得共、新羅明神合殿共信心之ものゟ社地江相移、其後新羅明神之神体斗り元方へ為引移候付、右空殿江諏訪大明神安置仕、此度繕普請致候事故難相成、重而新規普請願候節御紋相願候様可致旨、三輪八之丞殿御達付、白鳥采女江申達候、

一、万屋専左衛門ゟ書付を以、今般シヤマニ・シツナイ・ウラカワ出之昆布千石目長崎俵物方へ売上候様被仰付奉畏候、依之同所之昆布河内屋増右衛門方ニ而先年買入売上ケ候節、右ニ付赤葉等之分者不残御用ニ不相立見合ニ相成候由、左候へ者此度売上ケ之分製方并箱館江積取之時節ニも被仰付度趣伺書ニ而差出候間、今朝三輪八之丞殿差上候処、俵物掛り桜庭梅太郎江御咄有之由、

一、御巡見様之節乙部村江差出候蝦夷、フトロゟ五人、セタナイゟ拾人為差出候様先日被仰付、請負人申達置候得共、此度改而被仰替相成、左ニ、

クトウ蝦夷人別高廿七人之内、　男蝦夷弐人差出候事、
フトロ同　人別高五拾四人之内、男三人、女弐人、〆五人差出可申事、
セタナイ同人別高八十九人之内、男五人、女三人、〆八人差出候事、

右之通クトウ請負人石橋屋松兵衛代中嶋屋勘右衛門、フトロ請負人浜屋勘兵衛代福嶋屋新右衛門、セタナイ請負人山崎屋新兵衛江申達置候、来五月十日頃乙部村江差出候様申達候、

一、ヱトロフ請負人藤野喜兵衛・西川准兵衛・岡田半兵衛ゟ

金千弐百六十六両弐分壱朱ト残百八十壱文

内訳

金千両　　酉年ヱトロフ御運上金

金弐拾両　　同弐分積金

金弐百四拾六両弐歩一朱ト　　同沖ノ口御収納出産物御口銭とも

銭百八十壱文

右金子今日内御役所江相納、兼而差上置候証文御下ケ相成候、

一、御巡見様之節両在江付添之方并人足・馬士共扶持米之儀、市中茂日々之人足ニ而困り居候間、御用達・

〔奥端書〕「天保九ノ十五」

〔端書〕「天保九ノ十六」

請負人ニ而為撝不苦候半々同人共之分者兼而申聞承知有之候旨、蠣崎四郎左衛門殿江申上候処、内御役所江御談之上右之取斗へニ被仰付候間、御用達・請負人行司江申達候、

一、山崎屋新兵衛手代栄作儀、セタナイ蝦夷乙部村出候為手配差遣候間、道中并掻送り等無差支様御添触被下置度趣願出相渡、尤、賃銭自分払、

一、御巡見様御下向之節差出候陸尺三拾人、天神坂御屋敷ニ丹蔵と申駕籠案内之もの有之候間、同人ゟ稽古為致候様被仰付、名主一同江申達候、

一、津軽家中着之節者旅宿々亭主、船宿等送迎いたし候様被仰付候、

一、専念寺江津軽家ゟ人数相越候節、若非常も有之候半々西厳寺・浄応寺江引移り可申候、寺者明渡積り、

一、長崎俵物拾弐万斤余者去酉年ゟ来亥年迄三ヶ年塩貝他売不苦旨、公儀ゟ御触ニ付、市中へ触出候、

一、御巡見様御下向ニ付御宿亭主役并手代り給士之もの其外一切人足扶持米共御城下并西在小砂子村、東在知り内村迄之見込、凡玄米六百俵撝立方申立候処、御下ケ米御聞済被仰付候、

一、御巡見様御渡之節津軽家ゟ御見送り人数物頭役海老名彦蔵・桜庭清八・間宮求馬、右三人之宿者麻上下ニ而送迎、其外医師三人、侍分之下々迄宿之義者羽織袴ニ而不苦旨申付候事、但、人数名面・宿名前書等御巡見様一式綴込有之候、

一、壱朱金之義、調子書市中在々寺社ニ而三千七百両余有之、尤、御役所向キ御扶持家相除、右之高ニ相成候、依而五両以上者弐千七百両程、五両以下者九百八十両余相成候、五両以上者預り書相渡置、五両以下者正金ニ而取替遣候様仕度趣、三輪八之丞殿申上置候、

一、枝ヶ崎町庄内屋宇左衛門江申付津軽家之内栗原慶助上下弐人之宿手狭ニ付不宜趣、工藤忠兵衛ゟ申立候ニ付、宇左衛門相免し、近江屋清吉へ申付御聞済、

五月六日、御用達惣代藤野喜兵衛、請負人惣代竹屋彦左衛門両人罷越、越後黒川米五百俵口此度買入、先達而弐番蔵ゟ詰替ニ差出候代り米に相詰申度旨申出ニ付米持参差出候間、則申上候処、御聞済相成候、明日蔵入ノ積り、

五月六日、御巡見様御下向付御逼留中、工藤八郎右衛門殿寺社町奉行出役被仰付、蠣崎重郎右衛門殿江指奉行出役、寺社奉行之義者無滞御免之趣御達候、尤、江指表江来十日御出立之由、

五月七日、工藤八郎右衛門殿町奉行江出役之処、御人揃ニ付無滞御免被仰出候、

一、御巡見様御逼中　　遠藤又左衛門
　町奉行江出役

右被仰付候趣御達有之候、

一、御巡見様東西在々御巡行之節人馬差配之ため名主三人出役被仰付候付、右手付之もの六人兼而申立伺済有之候、左ニ申付候、旅人宿喜右衛門家内ノ伝右衛門、蔵町才吉同三保八、唐津内町与兵衛、東町清次郎、川原町勝蔵、

一、同東西在々御巡行之節御先蠣崎四郎左衛門殿・遠藤又左衛門殿被仰付候、

一、氏家六郎左衛門殿御巡見御用ニ付津軽三厩迄御使者被仰付候趣、御同人御申立有之候、尤、当十五日ゟ風待の趣候、

五月八日、御巡見様津軽碇ヶ関御着之日限相分り候半々早速御申越可被下候、兼而弘前表へ当方町奉行中ゟ御掛合相済、尤、右弘前ゟ之御状三馬屋迄当方ゟ飛脚差立置可申候、右之もの江御渡之義とも申越候付、此度飛脚岡口嘉七・武藤孝太郎押切舟ニテ来十一日差出候積り、依之町下代ゟ右之趣三馬屋役人江書状可差出旨御達ニ付、別紙書状差出、下書綴込有之候、

一、浜小家不残取解可申趣被仰付候付、名主へ申談取解候、

五月九日、御巡見様御旅館御三ヶ所非常御立退場、左ニ、

黒田五左衛門様　　法源寺
中根伝七郎様　　寿養寺
岡田右近様　　龍雲院

右三ヶ寺被仰付候、

一、入米并場所産物高沖ノ口問合、左ニ、

一、入米酒高　　一、旅人年中入出并越年
一、地他船々年中出入　　一、秋味壱ヶ年出高
一、蝦夷地ゟ積取産物

右五ヶ条聞合候事、尤、去酉年分ニ而不苦候、

一、黒田五左衛門様御宿松前修理殿屋敷御普請向々荒々出来付、亭主岩田金

蔵江引渡可申旨御達付、名主中林九兵衛を以渡方差出候、
一、岡田右近様御宿太田孝治屋敷前同断、亭主栖原仲蔵江引渡方前同断、
一、中根伝七郎様御旅館掛り高橋浅右衛門殿病気付御免被仰付候、右為代と工藤織右衛門殿被仰付候趣御達有之候、
一、阿部屋孫次郎・大黒屋勘右衛門、右者御巡見様東西江御巡行之節御夜具宰料之仮御足軽被仰付候、金子屋彦蔵、右同断帷帳宰料被仰付候、
五月十三日、御巡見様御着岸之節引橋舟六十艘御差出被成候趣、兼而沖ノ口御役所ニ而御手配有之候得共、其節ニ至り船々数艘居合不申節者御差支に相成候間、東在根森村・大沢村・荒谷村・炭焼沢村ニ而三半船四十四、五艘差出候様、右村方江申付候様被仰付候間、明日在方掛り田中半右衛門右村々江罷越候趣申付候積り、
五月十五日、箱館大町五人組嘉兵衛、
関東屋喜四郎
中村屋新二郎　両人煩付、山ノ上町幸右衛門、右両人今般江戸表ゟ御呼出ス付、御当所迄罷出候処、右差添細田長治郎被仰付候、明日ゟ風待ニ而出帆申度候様蠣崎四郎左衛門殿御達付、嘉兵衛呼出ス申達候処、承知仕候得共、幸右衛門儀、去十日箱館出立之節風邪に相成、追々不宜、此節薬用仕候得共、五七日之内ニ者全快も無覚束奉存候間御猶予被仰付度旨、幸右衛門・嘉兵衛共連印之願書蠣崎四郎左衛門殿江差上候処、御披露之上、病身者無拠候へとも全快も治定何日頃迄と申儀も有之間敷候間、箱館江申遣、代之もの呼寄候様可致旨被仰付候間、嘉兵衛江申達候、
五月十六日、御巡見様御至着之節御召橋舟三艘、御船頭三人、内壱人者松本金蔵江被仰付候、外両人者小宿亭主分之者江可申付旨被仰付候間、人物見立申上候積り、
一、茶屋共一同江被仰付候儀者、今般御巡見様御下向ニ付御至着日、江差・箱館ゟ御帰之節、猶御逼留中者茶屋家業御差留被仰付候、且又、抱子之儀者壱人たりとも昼夜外江出間敷段厳敷申付候、世話方両人之儀別而仲間取締可申様、此段共田中九八立会之上申達候、
一、東西在々之内、江良町村焚出ス并小砂子村人足扶持原口村ニテ焚出ス、右掛り大橋小三郎相越候へとも万端手配向有之ニ付、田中半右衛門出役申談候、福嶋村ゟ一ノ渡迄之分者小松茂八郎相越候得共、万端手配向として清水重蔵出役之積申談候、
一、御召橋舟三艘之御船頭并問屋手代共ゟ引橋舟乗組仮足軽等被仰付候半々沖ノ口御役所へ御差廻被下度旨、藤田陸郎殿ゟ鎌田武右衛門殿を以御申越被成候、
知り内村
一、中根様御旅館亭主役　山崎屋新兵衛
一、右同断手代り　上総屋文吉
一、御案内　棒田屋儀八　戸沢屋利左衛門
茂草村　大津屋武左衛門
一、黒田様御旅館亭主役　手代り宮川屋荷兵衛
同村
一、中根様下宿亭主役　戸沢屋利兵衛
一、東西人足焚出ス掛り　仮足軽大津屋辰蔵
一、前同断　仮足軽荒木屋半七
右之通被仰付候趣申渡候、尤、山崎屋新兵衛儀、未夕江州ゟ下り不申候間、

万一着遅成候節者手代り上総屋文吉儀亭主役相勤候様申渡候、尤、梅太郎ヨリ昨日申渡候、

一、両在人足焚出ス掛り、泊川町源右衛門・同町万蔵・唐津内町第吉・馬形町源蔵、右四人之もの手付ニ昨日申渡候、

一、焚出ス掛大橋小三郎・小松茂八郎、右両人之手付八人被仰付候名面左ニ、

秋田屋専太郎、小塩屋平四郎、豊嶋屋栄吉、庄内屋宇左衛門、依田屋孫八、東上町久蔵、伝治沢町辰五郎、上野町銅屋吉五郎、〆八人、

右福嶋村・知り内村両村焚出ス手附被仰渡候、

一、去酉年引請無之候旅人沖ノ口ゟ書付相廻候、左ニ、

差戻旅人惣人数百四十五人、此御救米壱石三斗弐升・銭廿六貫五百文、内訳大人百拾九人、但、壱人ニ付米壱升・銭弐百文ツヽ、子供廿六人、但、壱人ニ付米五合・銭百文ツヽ、

五月十八日、御巡見様御召橋船之船頭役上野屋又三郎・能登屋八九郎、外ニ松本金蔵者一昨十六日被仰付候、附服之義者小紋絹羽織、又者麻ニ而も小倉嶋野袴ニテよし、帯刀被仰付候、

一、東西詰人足江差凡三百人、箱館四百人、都合七百人之居所芝居小家相伺候処、蠣崎四郎左衛門殿ゟ御聞済之趣御達ス、

当所御本陣　岡田右近様

一、亭主役栖原仲蔵手代り　河内屋伝四郎

吉岡村　中根様

一、亭主役沢田屋久兵衛手代り　田中屋佐平治

吉岡村　岡田右近様附

一、下宿亭主役被仰付候、　畑屋嘉兵衛

右三人之もの呼出申渡候、

一、問屋共江被仰付候仮足軽支配之もの、河内屋増右衛門・阿部屋利兵衛・阿部屋茂兵衛、右三人着服之義伺上候処、為差勤方も無之候間、羽織袴ニ而宜敷与御番蠣　四郎左衛門殿ヨリ被仰付候間、其旨増右衛門江申達候、

一、御召橋舟之御船頭伺出候ニ者、御上陸被遊御旅館江被為入候節御供仕候歟、又者御機嫌窺等ニ罷出候義ニ可有之哉、此間前同断伺候処、不及其儀浜表限ニ而宜敷旨被仰出候、依而三人江申聞候、

一、根森村并立石野番所平日御足軽壱人ツヽ御番相勤居候へとも、御巡行之節仮足軽壱人ツヽ差加へ候様被仰付候間、名主半右衛門へ相達ス、

一、非常番組江拾人ツヽ、鳶之もの差出ス外弐人ツヽ御貸人願出候間、聞届候、外ニ非常之節御道具持八人ツヽ申付置候様、蠣崎四郎左衛門殿ゟ御達有之候間、宮川半右衛門江相達ス、

一、沖ノ口掃除人足明日ゟ五人ツヽ被遣度趣、豊田亀治郎申出候間、名主へ申付候、

一、御巡見様御通之節町々江壱ヶ所ツヽ水桶差出置可申候、茶碗者弐ツ位ニ而宜敷候趣、蠣崎四郎左衛門殿ゟ御達有之候間、宮川半右衛門江申談候、先町代宅ニテ差置候積り談置候、

一、東西ヨリ詰人馬之儀者来ル廿三日迄当所着相成候様両所へ申遣候趣御達有之候、此旨名主達置候、

一、在々御旅館ニ而御菓子差出候廉者如何可有之哉、昨日桜庭梅太郎ゟ伺上候由、御差図有之候様、四郎左衛門殿江申上候処、中小姓迄ニ而宜敷趣被仰聞候間、右都合ニ而制方いせや佐次郎へ申談遣候、

一、御巡見様者一汁五菜

其外者一同一汁三菜

右之通被仰出候旨、蠣崎四郎左衛門殿ゟ御達有之候間、為心得名主九八江相達候、

一、津軽三厩迄兼而被差遣置候御飛脚岡口嘉七・武藤小太郎両人、今日同所おゐて弘前ゟ之御用状九ツ時御渡被成候間、直様出帆致候趣ニ而六半時押切船ニ而至着、右御用状并拙者共へ三厩役人中ゟ之返書持参いたし候間、御用状之義者直様田中九八を以蠣崎四郎左衛門殿江為持差上候、

一、御巡見様東西御巡行ニ付、馬指宗治郎手付小頭根部田村藤右衛門江可申付候、

一、壱朱金之儀、御用達・請負人ゟ差出候両法之内札なしニテ凡金高八百両位三両以下之処取替候様委細村山重左衛門江御達有之候ニ付、同人ゟ藤野喜兵衛江申談候、

一、今般江戸表おゐて御入用金五千両御手当有之候得共、金子之儀故万々一差支之儀出来候節者江戸表おゐて聊も間違無之、御金五千両御屋敷ゟ御下知次第相納可申旨藤野喜兵衛江可申達候趣、三輪八之丞殿ゟ御達有之候間、喜兵衛呼出、昨日申聞候処、御請申上候、依而四日市明石屋長兵衛両人ゟ相納可申、尤、大金之儀故、若又御上納ニ付不都合之儀も候半々両人ゟ大坂表江申遣、聊無相違上納可致旨申遣候趣、其段共昨日申上置候処、今日御沙汰之上、右之通被仰付候、尤、治定致候儀も無之候間、口上書ニ相認メ書付差出可申旨、三輪八之丞殿御達被成候間、喜兵衛へ申聞候、

一、東西御巡行ニ付、用意金として金百両御渡に相成候趣、村山重左衛門ゟ通有之候、

五月廿一日、白鳥形部ゟ社地之内不浄なるもの持運いたし、畑ケ通抜候もの日々多く有之、厳敷相咎候得共中々制方不行届候間、自分もの入ニテ慈眼寺へ通抜候処戸ひら締相付都而往来不致様仕度趣口上ニ而伺出候間、三輪八之丞殿江申上候処、不苦儀候、社地往来為致候儀者不宜候間、早速申聞候様被仰聞候、

五月廿二日、白鳥形部儀、　御巡見様御参詣之節先例者二ノ鳥居迄罷出候間、御奉行所へ申上候処、其通被仰付候、尤、八幡社也、右同人ヨリ御参詣之節入用白木之三方壱ツ、盃壱、鈴の尾白木綿壱丈、薄縁壱束先例之通相願候処、三方・薄縁者御渡不相成候、盃・鈴の尾買調相渡候様被仰付候、

一、去十七、八日之雨天ニ付小砂子村・原口村山道殊の外道損候ニ付、村限り二者出来不申趣、掛り士中ゟ御奉行所へ申上、御差図ニ付旅籠屋ゟ雇人廿六人江町方頭取中村孫平、町方壱人添、今朝原口村へ差出申候、小砂子者跡ゟ遣候積りニ御座候、

一、今日請負人米屋勝三郎宅ニ而金壱朱三両以下者不残代金相渡引替、三両以上者端金者取替、余者江戸ゟ代り金着の上相渡候積り、尤、夫迄為念預り之書付遣し置候積り、此節御用込ニ付、右引替所江者御用達斗り罷出、町代立会引替之積り、寺社・諸士も引替之事候、

五月廿三日夜、小砂子村道普請見分ニ付、則早刻立被仰付候、

一、御巡見様御巡行之節御案内拾二人之内、米屋勝三郎病身ニ付御免願之通被仰付、代として米屋寅吉被仰付候、

一、関東屋喜四郎・中村屋三右衛門両人代り幸右衛門病身ニ付、代として市松と申者為差登申度趣、願之通被仰付候間、三輪八之丞殿ゟ御達有之候、

一、三村周太殿御人揃付、町奉行出役無滞御免被仰出候趣、三輪八之丞殿御達有之候間、先例之通相触候、

五月廿七日、今日三厩ゟ御渡り、御風順ニ相見得、浜辺市中御通筋掃除、小路々江幕張或者簾等ニ囲支度為致、盛砂置候処、昼八ツ時頃御巡見様御召船三艘、其外御供船等数艘白神崎江相見得、同所立火掛りより注進有之、無程御乗船始不残大松前潤江入船、御召橋舟汐通しゟ小松前相廻り、　御三所様共沖ノ口御役所ニ而御休、御用人以下者其近辺大津屋武左衛門宅・岩田金蔵宅・近江屋忠右衛門宅等ニ而御休、夫ゟ御供揃ニテ小松前町ゟ大松前町、袋町、仁兵衛坂御上り、御旅館江被為入候、御一方様江町御奉行所御壱人ツヽ御宿亭主御先ニ相立御案内申上候、町年寄麻上下ニ而桜庭梅太郎・張江又八・村山重左衛門浜表江御出迎、手札者町下代何の誰と認差出候、御着後御旅館江者罷出不申候、名主之儀者御荷物上ケニ付人馬差配いたし、宮川半右衛門・田中九八・中林九兵衛三人立付野羽織ニテ罷出、手配いたし候、

一、御船上り之節者御給人方之内御先番之方御壱人ツヽ御旅館江為入候付、亭主手代り之もの麻上下ニ而差出、壱人ツヽ御案内為致候、右御先番之方御旅館江着之上間割御差図有之候而相極り、其外行烈[列]ゟ後れ、士中・御徒士・手廻・陸尺等追々船上り致候付、羽織袴之もの差出置、御旅館江御案内為致候、

一、御安着之上、家数并東西里数、村名主、寺院社家、名産物其外種々御尋有之、御奉行所ニ而御調之上御書上被成候、

一、木賃米代・人足賃銭其外請取等之帳、御一方ニ而五冊程ツヽ亭主江御下ケ御旅館ゟ持参ニ付、夫々書上いたし、木賃米代御上下共御壱人分廿七文書上候、

一、御膳部一汁一菜の外決而御請無之、御菓子等も御下ケ相成候、尚又、座鋪掛物其外飾り付之品々不残御先番着之上御下ケ相成候由、

一、御條目板兼而用意致置候得共、先番ニ而板江御條目御認メ御持参、亭主へ御渡有之、御旅館内江見斗掛置候事、

五月廿八日、御巡見様今朝五ツ時西在江御発駕、町御奉行三輪八之丞殿、両若党鎗挟箱草履取ニ而化粧川橋手前北手方ニ御詰被成候、町下代桜庭梅太郎・張江又八、右橋向北手ニ相詰居、　御三所様御通り之節御取次之方江手札差上、下座いたし候、御旅館亭主役三人者博知石町中屋藤七下タ広小路迄罷出、下座いたし候、

一、火の番廻り、今日ゟ昼夜とも当御役所ヨリ差出候付、士中辻壮右衛門・明石功吉、御徒士秋山唯一郎・明石伝太郎被仰付、町代壱人、爲ノもの五人相添、市中相廻り候、尤、壱人ニ叶法波[婆]を着、爲口壱本ツヽ為持、夜分者町高張ニ張ツヽ、先江相建候、

五月廿九日、昨日ゟ西タハ風強く、江良町村向ニタ越川之橋波ニテ相損、直様拵直候得共、小砂子村持之内ばゝわしり・もつたて石之辺波打上、迚も今日江良町村御発駕難相成御滞留之趣申来候、

一、荒谷村沢中并峠江熊折々相見得、此節夜中継立之御用状も有之候而も人足通行難儀之趣、依之熊打御下ケ被成下度旨村役願出申上候処、白鳥清吉・石道松二郎両人被仰付候、

六月朔日、関東屋喜四郎・中村屋三右衛門代市松、町役嘉兵衛出府ニ付差添御足軽毛利彦六被仰付候、御用状壱封御渡相成候、

箱入

蠣崎四郎左衛門
三輪八之丞

藤　宮吾様

一、御巡見様ニ付〃〃出、江良町村用意として庄内白米三斗七升九合入五拾俵今日相廻、宰料平尾鉄蔵差添遣し、

一、御巡見様御召船三艘浜上ケ之節人足共格別骨折いたし候付、一同江被下候趣ニ而津軽家役人中ゟ金五百疋包目録被差出候付、当日人足世話方之もの五人呼出ス、右之趣申聞目録相渡候、

但、津軽家宿工藤忠兵衛宅迄御礼ニ罷出候様、内々添心致ス遣し、

人足大工組ゟ百六十人、外ニ世話役　長左衛門　八右衛門　平左衛門

同　附舟ゟ十五人、外ニ世話役　久蔵　善兵衛

六月四日、当所中根様御旅館亭主西川准兵衛病身ニ付、江差ゟ御帰館明（ママ）後御座候得共迚も出勤難出来申出候間、兼而手代りに相成居候越前屋伊兵衛を以御取扱為仕如何御座候哉、三輪八之丞殿江相伺候処、御用之間江相窺候処不苦趣被仰出候間、准兵衛江相達、伊兵衛へも申渡ス、大切ニ相勤候様申聞候、

一、黒田様亭主役岩田金蔵江棒頭ゟ蝦夷錦帛紗地壱ツ調呉候様被願候へとも、市中売買に無之品ニ御座候間、　御上様御座候ハヽ私江御払被仰付度旨願出候付申上候処、御聞済ニ而今日御下ケ相成候、則金蔵へ相渡候、

一、金壱朱取集として東在江相越候福田定吉昨夜着、壱朱金村々取集金弐百拾五両持参、西在江相越候平尾鉄蔵罷帰、壱朱金十三両弐分二朱持参、外ニ金壱両壱歩二朱足し金いたし、村々合して金弐百三十両、

一、壱朱金弐百三十両　右東在村々之分

一、　同三十五両　兼テ〃ゟ差出候壱朱金之内上納残り之分

一、壱朱金三拾五両

〃ゟ昨夜差出候壱朱金高三十七両壱分壱朱候得共端金有之、為差登方紛敷候付、弐両壱分壱朱預り置、三十五両いたし候、

三口〃壱朱金三百両也、

右者江戸表江為差登ニ付、内御役所御番三村周太殿相納、請取書御下ケ相成塗箱入置候、一昨日張江又八持参相納候壱朱金共都合弐千三百両相成候、

一、社頭白鳥興美呼出、七社并其外末社々に夜宮祭礼之儀者　御巡見様御帰帆後に神事修行可致旨被仰出候段、三輪八之丞殿ゟ御達付相達ス、

一、津軽家江明日御使者青山栄治被仰付候趣御達有之候間、工藤忠兵衛へ相達、

一、御巡見様御召船三艘今日浜下ケ付、人足六十人余差出、外ニ右船水主四十人余、都合百人余焚出ス候処、波高ニ而昼後迄見合相成候得共、昼飯人足江為喰候、然処、今日者泙合ニ不相成候間、御船下ケ見合、明日之積り浜手掛り申来候、

一、西在掛り士中ゟ　御巡見様御通行相済候付引取之儀相伺候処、本陣（ママ）者亭主々江相渡引取候様被仰出候趣、三輪八之丞殿ゟ御達有之、茂草村・江良町村・小砂子村御本陣（ママ）亭主々江申達候、尤、亭主役之もの者家業体用向も有之可申候間、内実者右本陣（ママ）元家主引移留主居為致候而可然旨内々申聞候、

一、御巡見様六月七日東在御巡行ニ付今日御発駕被遊候、福嶋村御泊之積り、六月十一日、御巡見様御召船三艘今日浜下ケ、人足并焚出ス等名主へ手配為致候、

一、乙部村ゟ初木瓜廿五本同村年寄役之者を以差出候間、御番三輪八之丞殿

江申上、在方下役相添、御用部家へ差出候処、御披露相済候、
一、上及部村初瓜之儀者定例之通御台所へ差上候段、同役申出候、
一、馬形三御旅館江薪壱敷ツヽ、炭拾本ツヽ、今日ゟ為送候、尤、上及部江申付候、
一、黒田様御旅館御用人中之間雨漏いたし候ニ付御手入被下度旨、亭主役准兵衛ゟ申立、則申上候処、早速御作事方相越手入いたし候、
六月十二日、御巡見様明十三日東在ゟ御帰之御日取ニ付、又々支度手配いたし候、
一、市中備米売払候代金を以代り米買入候積り兼而被仰出有之候処、猶又、今日右買入方早々取斗へ候様被仰出候付、御用達へも申談候而買入米申上候積り、
一、中根様御給人衆ゟ御願、帆立かい十五、青大王三十、熊の皮五枚、右御旅館亭主役准兵衛ゟ申立候間、三輪八之丞殿江申上候処、玉三十、熊ノ皮五枚、内御役所ゟ御下ケ相成候、帆立貝者市中倹儀いたし候様被仰付候間、名主へ達置候、
六月十三日、御巡見様東西御巡行相済、今十三日昼八ツ時御帰館被成候、御出迎三輪八之丞殿并拙者共迄及部川端向詰迄罷出候、
一、中根様御旅館亭主西川准兵衛ゟ願受申立候熊ノ皮壱枚代七百五十文、青玉一ツ付百文ツヽ之趣、内御役所ゟ御達有之候、
一、先日黒田様御旅館亭主岩田金蔵ゟ願受申立候赤地夷錦壱切帛紗丈代七百文之趣御達、
一、越後蒲原御蔵米五百俵　　直段七匁六分
一、越後村上御蔵米三百俵　　直段七匁六分
一、越後米五百九十俵　　直段七三五

右之通市中備米之廉御買上ケ願出候間、三輪八之丞殿申上置候、
六月十四日、御巡見様昨日御至着被遊候付、御先触壱通、御添触壱通、御印鑑残り分拾二枚宛、都合三十六枚、同請取帳并江良町村御差立相成候追触一通、尚、請取帳共御先触箱ニ入候侭、岡田右近様御旅館亭主仲蔵江相渡候、
一、御巡見様御巡行ニ付東西村々ゟ相詰候人馬、今日両在江差立候、尤、御奉行所ゟ江差・箱館江御用状御差立相成候、
六月十六日、

京都大仏師法橋　福岡長慶
弟子　春慶
〆弐人

右者仏像并法器為再建申遣候処、今朝宿中嶋屋勘右衛門、佐渡松ヶ崎茂右衛門船ニ乗参り候間、九月迄滞留中引受之届書法幢寺ゟ差出候、
六月十七日、御旅館三軒ゟ薪炭〈一敷・十本〉ツヽ為付候様願出候間、上及部村役江申付、明日配り候積り、
六月十八日、三御旅館ゟ白米拾俵ツヽ、御下ケ被下度趣、亭主役願出候間、内御役所江差出候、
一、壱朱金引替付、金八百両代り金に御下ケ被成下候様奉願上候趣書面ニテ申上候、

六月十八日、御巡見様御出帆後、阿吽寺・八幡社江御代参蠣崎将監殿、神明社江御代参鈴木記[26]三郎殿御勤被成候趣、三輪八之丞殿御達付、右寺社江相達候、

一、中根様御供之内、東在ゟ帰り之節病身之仁壱人有之、藤田玄端被仰付相越、病人療治いたし居候処、昨十七日迄休薬仕候旨医師届出候、

六月廿日、黒田様御旅館亭主役岩田金蔵儀、御用人中ゟ金弐百疋御目録ニテ十八日頂戴仕候趣届出候、

一、岡田様御旅館亭主栖原仲蔵義、同様弐百疋御目録茶代として昨十九日頂戴仕候旨同断、

右両用とも三輪八之丞殿江申上候、

一、例年之通御秣代半金御下ケ被下度趣馬指ゟ願書差上候、御秣拾五万抱、直段壱わ付弐文三分ツヽ、

六月廿一日、御巡見中根伝七郎様御召船之水主三人江叶丸水主藤吉口論いたし手疵を為負候付薬用致居候由、右代り之もの三人差出候様半兵衛江可申付旨、蠣崎四郎左衛門殿ゟ御達有之候間、実体成者相撰差出可申様、岡田半兵衛代与三右衛門呼出ス申聞候、

六月廿二日、水戸様御内大関彦八郎様上下四人、

右者江差ゟ相廻り阿部屋利兵衛江止宿之趣、同人ゟ届書差上候、

六月廿二日、関東屋喜四郎代清兵衛、中村屋三右衛門代林蔵、市屋定右衛門、

右者御尋之義付御呼出ス有之、尤、長尾所左衛門取扱候金談之一件、

遠藤又左衛門殿

蠣崎四郎左衛門殿　　桜庭梅太郎

氏家六郎左衛門

六月廿三日、御巡見様御召船三艘、外御荷物船とも澗掛り之内者地他諸廻船澗繋之節右船等江勿束ヶ間敷義無之様心懸可申旨、触書を以御用達・問屋・小宿・請負人并市中一同へ触出ス、

一、　　長尾所左衛門

右御尋之義付御白渕[27]江御呼出ス之上、

遠藤又左衛門殿・蠣崎四郎左衛門殿ゟ御吟味被仰聞候、氏家六郎左衛門殿御立会御例座、町年寄桜庭梅太郎、右者幼年之砌御奉公始メゟ追々立身莫太之恩儀忘脚[28]いたし候事并関東屋喜四郎并中村屋新三郎抔江金談取扱之儀共御吟味有之候、

但、御足軽御奉公ゟ御用人迄出精いたし候仁ナリ、

一、長尾所左衛門取扱候関東屋喜四郎・中村屋三右衛門・市屋定右衛門、右三人之もの拝借金高弐千八百七十両相違無之趣書付差上候、

一、唐人張鏞七本、昨日中根様御旅館差上候処、御不用ニ付、亭主西川准兵衛持参差出候間、蠣　四郎左衛門殿江右鏞差上候、直段壱本付金五十疋之由、

一、近頃自船之内紅白紺等之縮緬ニ而目立候吹流立候船々も有之趣相聞候、右者何等之為ニ用候哉、全く船中不用之品ニ可有之候間、自今以後右用之品相用候儀堅く御停止之趣、他国之船々右用之品相用出入等いたし候半々当国之掟ニテ不相成旨其筋ゟ急度可申渡趣御触面、市中在々、蝦夷地江茂昨日御触出ス相成候、依之春中鯡漁之船々ニ而も決して相用不申様名主へも申達候、

一、北蝦夷地諸品代勘定いたし、兼而小川屋重兵衛拝借金上納為致候様被仰付候間、則相達、

七月朔日、御巡見御三方様御出帆、尤、中根伝七郎様御不例ニ付、藤田道束御差添被仰付、薬籠持壱人、草り取壱人、都合三人、

一、岡田右近様御宿亭主役栖原仲蔵ゟ申出候、御條目板二枚御失念ニ付、蠣崎四郎左衛門殿へ申上候、宿工藤忠兵衛、南部大畑之松右衛門船運賃金五両ニ相雇、態飛脚木下吉之進差添御差立相成候、

一、津軽家医師三上道周上下四人、外ニ賄方四人、都合八人、

三上道周家来

藤吾、春吉　　勘二郎

福治郎、幸吉　　下料理方　　嘉助

林二郎　　人夫　　清助　　都合八人

右八人、御飛脚木下吉之進同船、向地へ差送り候、

一、明二日御旅館亭主役三人麻上下ニ而恐悦可罷出旨被仰付、則相達、

一、御用達・名主・問屋・小宿・請負人一同麻上下ニ而恐悦可申上旨被仰付、向々江相達、

一、茶屋共是迄御巡見様御滞留中家業相休罷在候、今夕家業相始候而不苦哉伺出候間、氏家六郎左衛門殿へ相伺候処、不苦旨被仰聞候、其段名主庄右衛門江相達、

七月二日、御巡見様昨朔日無滞御出帆付、諸士一同継肩衣ニテ登城於御用之間恐悦申上候、

一、御巡見御用付諸士掛り之銘々御台子ノ間江相詰、蠣崎民部殿外御家老中御例席ニ而民部殿ゟ御達ニ者、此度御巡見使御三方御下向御用ニ付其方共義諸掛り相勤太儀及事ニ候、猶又、勤方行届候儀者江戸表へ申上候間、左様相心得可申候、藤田故流ニ者老年ニ而別而太儀尚又江戸表へ申上候趣共被仰聞候、

一、三御旅館亭主　西川准兵衛

岩田金蔵

栖原仲蔵

当御役所於御座敷右三人麻上下ニ而御巡見様御出帆恐悦申上候、

一、御用達藤野始、名主・問屋・小宿・請負人前同断、

一、昨朔日御巡見様御出帆之処、龍嶋崎江立火見得不申候、

一、遠藤又左衛門殿、此度御巡見御用無滞御勤被成候付、御上下拝領被仰付、尚当九日ゟ風待江戸帰府被仰付候趣共御風聴ニ候、

一、蠣崎四郎左衛門殿・三輪八之丞殿、前同様御上下拝領被仰付候、

一、小砂子村百姓善四郎粟畑ケ凡八十坪御巡見様御用中畑作御差止ニ付、右手当被下候積ニ而同村掛り藤林重治殿江調被仰付候処、畑作粟出石弐石四斗、此精壱石弐斗位の申立、右代り玄米壱俵被下候趣、三輪八之丞殿御達ニ付、在方掛清水重蔵申談、善四郎呼出し申遣候、

七月五日、壱朱金引替代り金八百両御下ケ之趣御達有之、名主中林九兵衛差添、藤野喜兵衛代之者差出、内御役所ゟ請取、直様喜兵衛へ相渡、

一、壱朱金先達而引替後蝦夷地ゟ持登候もの有之、通用も不相成難渋付、今弐百両程御引替被下候様、先蕃村山重左衛門ゟ申上置候処、今日御聞届相成候趣御達、

七月六日、御巡見様御下向ニ付入用品買入代金拝借願書、三輪八之丞殿差上候、左ニ、

覚

一、金千弐百両也

内訳

金四百三両余　右者越後庄内江注文物代金

金六百両　別紙御用達書上高ニ御座候、

金弐百両程　右者阿部屋熊治郎ゟ買上品代凡高

〆如高　右者市中在々買上品代

盆前払方見込御座候、

右者御巡見様御下向ニ付入用品注文代并当地ニ而買入品代相払申度奉存候間、書面之通拝借被仰付被成下候様奉願上候、尤、追而郷村取立之上上納仕度奉存候間、此段宜奉願上候、以上、

村山伝兵衛

桜庭梅太郎

張江又八

村山重左衛門

右書面半紙江相認メ、御用達惣代藤野喜兵衛書上壱通、阿部屋熊治郎願書壱通相添、三輪八之丞殿へ差上候、

一、壱朱金之儀上納金ニ者不相成旨被仰付候、尤、引替之儀者追々御用便之節為御登可被下候趣被仰出候、

一、浜小家の儀、先年ゟ不相成旨被仰出、殊当年者御巡見様御下向ニ付取払有之、已来とも浜小家決而不相成旨可被仰出旨、乍去左様相成候而者格別差支之儀も可有之哉御尋付、名主江尋置候、

一、御旅館御入用付、　御上様ゟ願受帛紗地、青玉、熊の皮、あざらし皮等取調書上候様被仰出候、

一、御巡見様御下向ニ付諸入用惣勘定仕候而其後郷村割取立相成候而者格別日数後れ可申候付、当時中考ニ而入用高見込附郷村割合致候方可然候間、其心得ニテ申談候様御沙汰御座候由御達ニ付同役江内談いたし候、

一、元御家来長尾所左衛門、今日於御白渕永揚家入被仰渡候、関東屋喜四郎代清兵衛、中村屋三右衛門代林蔵御呼出ス拝借金等之訳ニ付急度御呵被仰付候、

一、江戸栖原角兵衛并支配人元兵衛両人連印ニ而長尾所左衛門宛拝借金八百両証文壱通、三百両余の証文壱通、右者上納相済居候へとも是迄証文御下ケ無之ニ付、今日栖原仲蔵病身付代甚吉御呼出ス於御座鋪右被仰渡候上、証文二通御下ケ相成候、御請書差上候様被仰付候、

一、壱朱金代金弐百両、今日内御役所ゟ御渡付名主九兵衛を以請取候、追而藤野江相渡候事、

一、御巡見様付浜掃除人足并橋舟ニテごみ捨候人足何程遣候哉書上可申様被仰付候間、名主江申付候、

七月八日、阿吽寺書付を以、弘法大師一千年忌来ル十九日ゟ廿一日迄二夜三日之間御影供修行仕度趣書面差上ル、

一、御巡見様御入用諸品注文代并当所ニテ買入候代金凡積金千弐百両程御下ケ被下置度趣、先日書面差上置候処、御聞済相成候、

一、伊達林右衛門代元兵衛、小川屋重兵衛両人より北蝦夷地諸品代付仕、栖原仲蔵ゟ可請取分調書壱冊、重兵衛持参差出候間、御内々三輪八之丞殿入御覧候上ニテ栖原仲蔵呼出ス、ヶ様ニ調書重兵衛ゟ差出候間、得与一覧い

たし存知寄等も有之候半々可申出趣申聞、右之調書者仲蔵江見せ遣置候、

一、御巡見様御下向ニ付浜表掃除方行届奇麗ニ有之、以来塵芥不捨様堅く触出候間、其趣町々江厚く可申聞段、名主・町代江申聞へく事、

一、当時順気不宜諸国作モ不出来ニも可有之哉風聞も有之候間、不用之旅人相調候而差戻し可申候、尤、旅人掛り江茂御達相成候、

七月十一日、北蝦夷地残もの調子帳、栖原仲蔵方へ渡置候分、右者盆前取込調方行届兼候付、兼テ去秋中小川屋九兵衛ゟ右残品代金心当ニ金弐千両拝借仕候分、此度栖原仲蔵ゟ内金渡可仕趣被仰付候へ者何時ニ而も右弐千両者栖原仲蔵ゟ出金いたし小川屋九兵衛へ可相渡段、栖原仲蔵申出候間、三輪八之丞殿江申上置候、

一、北蝦夷地残もの代金盆前調子方行届不申候付、内金二千両栖原仲蔵ゟ差出候様、尤、小川屋九兵衛江相渡、九兵衛ゟ昨年拝借之分江上納可仕候趣被仰付候、

七月十二日、北蝦夷地去酉年残もの代之内、栖原仲蔵ゟ金弐千両差出、小川屋重兵衛江相渡、夫ゟ内御役所へ重兵衛持参相納、則重兵衛ゟ栖原江請取書差出置候、

七月十三日、北蝦夷地残もの代金之内、金弐千両栖原仲蔵江小川屋重兵衛ゟ相渡、右請取書左ニ、

㊞

一、金弐千両也　　㊞

右者北蝦夷地御場所残物代金五分之内慥ニ請取申候、以上、

戌七月十二日　　小川屋
重兵衛印

栖原仲蔵殿

右之通於当詰所昨日請取渡相済候、

七月十二日、御普請役田村五郎四郎殿子モロ場所迄廻浦相済帰着并佐藤豊七、村山伝兵衛同様御用済帰着、長崎役人西郷文之進同様廻浦御用済帰着、

一、小川屋重兵衛、昨年十月中北蝦夷地残物代金栖原仲蔵へ相渡候節の拝借金弐千両、此度栖原ゟ内請取之金子を以昨日内御役所へ相納候付、右御益金一ヶ月金廿五両付金壱分被仰出候、証文ニも有之候間、今日重兵衛江相尋候処、栖原仲蔵ゟ残もの代皆済請取候上御益金相納度重兵衛願付、三輪八之丞殿申上候、

一、長崎役人西郷文之進、東蝦夷地廻浦御用相済帰登ニ付、御挨拶として金弐百疋、巻のし相添、梅太郎を以被進候、

一、長崎役人壱朱金六百両程有之、引替之儀相願候処、無余儀訳ニ付御取替被下候積り、尤、御金御都合次第御下有之筈、村山伝兵衛致通達置候、

一、御普請役田村五郎四郎殿、東地廻浦御出立之節御目録金弐百疋御使者新井田主税殿被進、今度御帰登付御目録金弐百疋御使者高橋五郎作殿を以被進候由、

七月十四日、御普請役東蝦夷地廻浦相済、此度帰登ニ而申越候ニ者、クナシリ・エトロフ両場所之義、以前ゟ煎海鼠出方無之、目当高も無之候へとも、手配ニ寄漁事可有之哉ニ噺合も承り、請負人共手配いたし候様為致度旨、村山伝兵衛を以申来、御用ノ間江御窺相成候処、不苦候間手配為致候様被仰出候趣、三輪八之丞殿御達付、藤野喜兵衛江相達、西川准兵衛・岡田半兵衛江も喜兵衛ゟ致通達候、尤、当秋支配人登り之上申談之積り、

七月十九日、弁天祭礼去酉年順年之処、米穀高直其外とも差支当年江差延置

候ニ付、今般市中之もの江相談の上、当八月十五日船家台・山家台等者不差出候へとも、只神輿渡行の義者是迄の通可仕趣、一同熟談いたし候ニ付、窺書差上候、左ニ、

以書付奉願候

去酉年弁天祭礼順年御座候処、米諸色高直之時節故差延候付、来八月十五日神輿行烈而已ニ仕、祭礼致度熟談仕候間、御差支之儀も無御座候半々被仰付候様仕度奉存候、依之此段奉窺候、以上、

戌七月十八日

右祭礼熟談之義者当十七日御用達宮川増蔵宅おゐて相決候事、

一、当秋順気よろしからず米高直ニ候由、右付国益に不相成遊民其外共旅人の義相調渡海可致義者先達而御達之処、此節如何相成候哉、尚又、能々取調子可申趣被仰付候付、旅人掛之内、町方頭取清水重蔵江申談、名主も申談候、

一、先日相渡盲人相撲廿三人当所ニ而興行為仕度趣、旅人宿喜右衛門ゟ願上候へとも、御時節柄御聞済無之、渡海被仰付候分不残昨十八日津軽地江渡海仕候段御届相成候、

七月廿二日、御巡見様御滞留中ニ御旅館御入用ニテ差上候願受品代金三両壱分ト残廿五文、内御役所御番三浦周太殿へ相納候、

一、惣寄帛紗地十一反　但、壱枚付金三朱ツヽ、代金二両壱朱

一、青玉三十　但、壱ツ百文ツヽ、代銭三貫文

一、熊の皮三枚　但、壱枚七百五十文ツヽ、代銭弐貫五百五十文

一、同胆三匁　但、壱匁弐百文ツヽ、代銭六百文

一、水豹皮十五枚　但、壱枚百五十文ツヽ、代銭弐貫弐百五十文

代〆金弐両壱朱ト銭八貫百文　　此金壱両三朱ト銭廿五文

七月二十七日、阿部屋利兵衛ゟ

水戸様御飛脚嘉右衛門江差ゟ罷越、廻り御判共持参、同関平八郎家来白太吉郎右衛門同様相越候届書、

一、弁天祭礼の義、先達而大奇合之節神輿行烈斗りニ而山船両家台者差出不申積り相談相決、伺之通御聞済被仰付候処、昨廿六日、竹屋彦左衛門、山田屋文右衛門代半平、仙北屋仁左衛門代加賀屋多右衛門、右三人罷出、山船両家台差出度儀申立候付、名主・町代江も聞合候処、同様差出度旨申聞、又御用達・請負人も相心得差出相談相決候趣、名主ゟも申立候、乍併当年御巡見諸入用金郷村割合兼而被仰出御座候付、若格別金高相成候節当年限り上納も差出兼候節者年割之願も致度心組ニ候間、右等之差支ニ相成間敷哉の旨も精々名主中へも申聞候へとも、其儀者祭礼不相抱高金相成候節者当年切郷村之割合相納兼候義ニ候、祭礼多分ニ差出候御用達・請負人之方ニテ右船山之家台差出候義承知之儀候間、何分差出度趣申立候間、無拠同勤相揃、御奉行所へ罷出申上候処、御沙汰之上可被仰付旨御談御座候、

一、俵物方御用金七百両御用達七人ゟ御借入証文本紙相渡、仮請取書取戻し、尤、行司栖原仲蔵江相渡、

一、弁天祭礼付船山両家台差出候儀、御用ノ間伺之上、御聞済被仰付候趣、蝋崎四郎左衛門殿ゟ御達有之候、

一、昨廿八日、米売不足抔と義名銘之捨文有之、門前ニテ定例之通焼捨候、
一、壱朱金千五百両差引残御下ケ金之分、内御役所ニテ封印いたし御渡被成候間、当御役所ゟ御用達向々江相渡遣候様伺済の旨、三輪八之丞殿御達有之候、
八月朔日、法幢寺当四日ゟ五日迄入仏致候付、藤野喜兵衛宅ゟ繰出ス、大松前、小松前通、夫ゟ湯殿沢町、光善寺坂上り、同寺へ入仏相成候旨届書并差定書共弐通差出候、御奉行所へ上ル、
八月二日、法幢寺御普請替出来付、御役人中一同并掛り一同罷越候而御見分表向相済、御引渡無滞相済候旨、三輪八之丞殿御達、
一、同寺入仏藤野喜兵衛宅ゟ同寺参ル町筋通候節、如ヶ様ニ通行いたし候哉、蝋崎四郎左衛門殿ゟ御尋ニ付、役僧呼出ス相糺見候処、掛念仏ニ音楽ニテ参り候旨申出候、
一、御巡見様御入用付是迄拝借金御座候処、此節御金繰不宜候ニ付拝借金内納いたし候様被仰付候、
八月五日、御巡見様御用付、蝋崎民部殿・逮藤又左衛門殿江戸表ゟ相下り、道中諸入用并当所在勤中賄等都而諸入用之分、郷村割合ニ者不被仰付、内御役所ゟ御入用相立候趣御達、
一、北蝦夷地残もの代調子帳引合代銭、栖原仲蔵ゟ小川屋重兵衛江可相渡分、御旅館亭主役相勤候中之諸調書急キ差出候様被仰付、旁々手不足ニ而当月下旬迄御扣被下置候趣書面差出候へとも、右者小川屋重兵衛儀差配方并御用達格御免相成候付而者都而北蝦夷地引合等之儀伊達林右衛門御用相勤候様兼而被仰付有之候間、留主中之儀元兵衛呼出ス取扱可為致旨、三輪八之丞殿御達被成候間、伊達屋庄兵衛呼出ス、早速調子仕上ケ致候様仲蔵方へ申談取扱候様申付遣候、
八月八日、仲遊〈三十八才〉娘くにゑ、右者竹屋彦左衛門実之弟ニ而父長左衛門存生之内生駒鋌三郎様家中斎藤上苗方江養子差遣置候処、去四月用儀付罷下り候趣御届申上候、
一、御用達藤野喜兵衛儀、法幢寺御普請掛り付、町年寄格被仰付有之候処、此節者御普請成就付、右町年寄格之儀者御免被仰付度旨、喜兵衛口達ニ而願出候故、御奉行所へ申上候処、御用ノ間江御伺被成候処、松前内蔵殿御留主之義ニ候間、其侭可差置趣之義候、蝋崎四郎左衛門殿ゟ御達、
八月十一日、蔵町山田屋八五郎宅ニテ船家台子供手踊稽古処内見有之候、
八月十四日、祭礼ニ付、昼八ツ時御神輿阿吽寺ゟ繰出、馬坂上通り、士坂江相廻り、坂御門下タを通、八幡宮御仮家江御旅無滞相済候、御遷座修法相済候而当御役所江案内有之、其節御代参三輪八之丞殿被為入候、御初穂金弐朱内御役所より請取御備被成候、夜ニ入、八幡社之御仮家ニ而神楽有之、祭礼奉行村山伝兵衛・村山重左衛門御仮家へ相詰候、
一、阿吽寺ゟ行烈〔列〕操出ス之節、頭人手附之もの申出候間、其節町御吟味役江申上、尾見兵七殿・氏家六郎左衛門殿、町年寄桜庭梅太郎・張江又八、右一統着服羽織袴ニ而当御役所御桟敷江相詰、山船両家台江案内いたし、大松前橋際ニおゐて狂言三番叟之外壱幕宛有之候テ無滞相済候、
一、町御役所桟敷者天神坂下タ之処江弐間四方程相かけ、御紋付幕張、金屏風相建、毛氈を掛ケ候、木品るい都而借上ケ相用候、名主中林九兵衛手配致候、右御桟敷下タ江畳三丁斗り敷候小桟敷相掛、日除なしに候、是江者名主并町方頭取詰居候、
一、御桟敷江者御奉行所御吟味役衆御子様方被遣候様申上候、

八月十五日、祭礼付、今朝五ツ半時御神輿八幡社御仮家ゟ操出、行列押込、枝ヶ崎町入候処ニ而御奉行蠣崎四郎左衛門殿・三輪八之丞殿、御吟味役尾見兵七殿・氏家六郎左衛門殿、町年寄継肩衣ニて御桟敷江相詰、山船両家台為引出、山屋台者大松前橋きわ南へ片寄、船家台者〆ゝ小路ゟ西ノ方ニテ南側江片寄置、行列先払ゟ澗掛り船印迄小松前江通り、馬形七ツ道具ヨリ跡者大松前ニ留置、双方宿々ニテ昼飯の間ニ大松前橋ニて山家台狂言相済、直様小松前御馬出ス坂下タ南手江寄置、船家台狂言相済、同様小松前ニテ山家台江続南寄置、夫ゟ馬形七ツ道具大松前操出ス、御神輿者橋の上江相居、阿吽寺并社人祈祷有之、其節十二銅御初穂十二包惣輪へ上ケ、御桟敷ゟ名主を以相納候、是者前広内御役所ゟ請取置候、其後行列押迄通り相済、御奉行所始御桟敷引取申候、

一、御神輿、大松前ニ而御昼休之節、

昆布一わ　　干数ノ子一折
御樽一荷　阿吽寺江　　御樽一荷　社家江被下候、

右二廉者町御役所江頭人手附之もの呼上ケ、名主ゟ相渡候、

干数ノ子一折
一、御樽一荷　宛、山船両家台世話人壱人ツヽ呼上ケ、名主ゟ相渡候事、

右四廉前広御奉行所へ申上、内御役所へ御達済之上、請取置取斗へ候、

一、生府御仮家ゟ御神輿還行之節、町高張御神輿前江二本、祭礼奉行先江二本、山家台江壱本、船家台壱本、花山家台一本、右七本差出候、

一、跡祭礼之儀、此度御法用付一昨日ゟ御精進被仰出候間、今明日之内相勤申度趣、世話人申出候間伺上候処、御下り之節今明日之内勝手宜敷節跡祭いたし不苦旨、蠣崎四郎左衛門殿御達有之候間、両家台世話人呼出ス申遣候、

一、庄内米七百七十俵、直段十五匁五分御買上被下度旨、伺之上御用達江も相談の上買上ニ相決候処、右米之内、内御役所ニテ御買上ケ可被成候、尤、外ニ千弐百俵、都合千九百俵口候、不残買上ケ被仰付候由、工藤庄兵衛罷出申聞候、依而此段御奉行所へ申上候処、御用番蠣崎将監殿江相伺候処、当時内御役所ニ而御用有之候間、右米者不残御買上ケ可相成趣被仰聞候由、右ニ付、市中積石買入方遅候段追而御察度御座候而者恐入候趣、三輪八之丞殿ゟ申上候処、其儀者迷惑不致様御請合被成候与被仰候間、此度者右米不残内御役所へ御買上ケ為致候様三輪八之丞殿被仰聞候、依之工藤庄兵衛江其段申達候、

一、尾州様御雇舟名古屋直治郎船水主拾壱人無程東蝦夷地ゟ登り付、宿手宛致置候様被仰出候間、頭取工藤庄兵衛へ右宿手配いたし候様申達候、

〔奥端書〕「天保九ノ十七」

〔端書〕「天保九ノ十八」

一、御巡見御用中東西村々江出役付太義料於御用ノ間被下置候、則金三百疋ツヽ桜庭梅太郎・村山重左衛門、

一、町方頭取之内炭竈改掛清水重蔵書付を以、東西村々炭竈之義是迄白黒炭共御役炭三本ツヽ内御役所上納仕、別段市中備米之廉江取立之分者一ヶ月黒炭竈より七百五十文、白炭竈ゟ壱〆六百廿文宛上納仕候得共、近年米高直炭焼共難渋仕居候間、往々上納方遅滞候而者恐入候間、可相成者備米之廉へ一ヶ月黒炭三本半、白炭七本上納為仕度、右様正納物ニ相成候得者、精々遂吟味麁略無之様為仕候間、此段奉伺候趣書面、此間中差上置候処、窺之通正納ニ被仰付候趣三輪八之丞殿ゟ御達、則清水重蔵へ相達、

八月廿七日、越後白川米三百五十五俵、直段拾三匁弐分、

一、栖原仲蔵ゟ伊達林右衛門代元兵衛を以申出候ニ者、先頃小川屋重蔵ゟ差出候北蝦夷地残りもの品代付帳得与熟覧可仕旨被仰付候付一覧仕、乍恐如何ニ存付之分下ケ札いたし差上候間御覧被下置度旨申聞候間、蝋崎四郎左衛門殿申上候処、御覧の上御同役方御揃ニ而先刻之調子帳之儀者昨年十月廿四日小川屋九兵衛差配方并御用達格御免被仰付候付、都而北蝦夷地之儀談事可取扱旨、林右衛門江被仰付候間、此段調子帳江仲蔵下ケ札致候分得与一覧いたし、不相当之代付有之候半々利解申聞、双方事静ニ用済候様可申付、勿論九兵衛如何様申聞候迚同人者御免ニテ手離候事故、林右衛門引受同様相心得、双方熟談為致候様可致被仰聞候間、伊達屋元兵衛呼出ス、右之趣相達候、

九月朔日、箱館高田屋庄兵衛ゟ同所御役所へ差上候願書御廻相成、蝋崎四郎左衛門殿ゟ御渡ニ付、藤野喜兵衛・西川准兵衛・岡田半兵衛三人江申諭、庄兵衛願之通出金致遣候様ニ可取斗旨、御用番蝋崎将監殿ゟ被仰聞候間、篤与申談、後々御手数ニ不相成様済方可致被仰聞候間、仍藤野・西川・岡田呼上ケ申談候、願之趣意、

一、金八百四十三両　証文壱通
一、金八百四十三両　証文壱通
二口
〆千六百八十六両

右者ヱトロフ仕入残物代金之内請取残金之処、当時金五百両残金千百八十六両戌年ゟ向五ヶ年賦ニ仕、三店ゟ年々無相違請取度願、

一、金千六百九十二両ト永九十三文四分四り

右者ヱトロフ御場所諸道具代年割之内請取残金当戌年ゟヱトロフ御請負年季中年割返金之積りニ金主へ申向候半々承知も可仕哉、右様ニ済方致度候願書、箱館町年寄奥印之願書、右前二口金千六百八十六両者　公儀御用達嶋田八郎左衛門方ゟ二千両余借財之方へ引当置、同人ゟ出訴相成難渋之趣申立候、千六百九十二両ト九十三文四分四り之分ハ大坂并外金主ゟ借金之廉へ差向有之候趣、嶋田同様出訴ニ相成難渋の趣申立、

一、坪田屋友八ゟ袋町平左衛門江相懸り候公事願書、同人ゟ願下ケ之義兼而願出候付、中林九兵衛江下ケ遣候、

一、ヱトロフ高田屋ゟ関東屋・中村屋江相渡候節即金もの并残品代請取残三千三百両余之処へ当戌年ゟ向巳年迄八ヶ年請負之内年々金四百両ツヽ町御役所へ可差出趣、藤野・西川・岡田ゟ申出候付、此段御奉行所へ申上候、

九月六日、当月御勘定御入用ニ付、　御巡見御入用郷村割之内金三千両相納候様先日被仰付候得共、未夕割合出来不申候間、十月納御運上金之内三千両上納為仕度旨申上候而請負人より十月納候為納金三千三百三十壱両二分今日内御役所へ相納候、

九月十八日、近江屋忠右衛門ゟ去八月二十四日能州七尾久太郎船積下り蔵入致置越後高崎蔵米三百俵口、元升四斗弐升入、直段十三匁二分、

一、光善寺ゟ再建付御財木御寄附被仰付、冥加至極難有奉存候、尚又、和尚兼々心願付、　御位牌所同寺限りニ而此度出来申度奉存候願并大工棟梁仕候彦之丞儀拝借仕度趣願書差出候間、前同断、

九月二十四日、北蝦夷地残物代付帳不相応之積り致候分も相見得候様栖原仲蔵ゟ下ケ札いたし差出候付、右扱方之儀伊達林右衛門代元兵衛ニ先頃被仰付候ニ付、庄兵衛・元兵衛両人度々双方へ利解申聞候へとも、迚も相片付

不申、元兵衛限り此度幾度申談候迚中々熟談不及、誠ニ奉恐入候、此上者宜敷様被仰付度旨申出候間、今朝同勤相揃、御奉行所江相伺候、直違間違等之分相調子何程直違之〆高相成候哉、仲蔵申年之振合を以思わく通下札ニ而相調子、直違高早々為差出可申、其上又々可申談之趣、三輪八之丞殿御達付、元兵衛方ゟ代付帳為差上、則栖原仲蔵江相渡、右之趣申聞候、

九月晦日、御巡見御入用方金子之儀者市中へ軒別割合私共名ニテ凡積りいたし候間、名主五人ゟ五冊惣〆高書面壱通共ニ御奉行所迄御覧被下度趣ニテ右之割合書面一同ニテ蠣崎四郎左衛門殿江差上置候、

一、江差引合之分関東屋清次兵衛小松前町居地面土蔵家作共、此間喜四郎罷出、私共一同江差出候旨申聞候付、今日名主半右衛門立会、町代嘉兵衛為請取候間、清次兵衛罷出引渡相済申候、

十月朔日、御礼後、於御用ノ間御掛蠣崎将監殿ゟ被仰渡候ニ者、御巡見之節無滞御用相勤候付御目録金三百疋ツヽ村山伝兵衛・張江又八両人江被下之、尤其外浜掃除掛侍・御徒士江も御目録被下置候、

十月三日、昨夜九ツ半時頃湯殿沢町光善寺坂上り口南ノ方岩田金蔵借家多右衛門と申もの裏ノ方江付火有之、早速消防いたし候趣、町代ゟ名主詰所江届出候、

一、昨夜八ツ時馬形上町喜右衛門宅ゟ出火ニテ新町へ焼家数四十一軒、竈数五十八軒、潰家六軒、同板蔵一ヶ所有之候間、此旨認メ、

一、馬形類焼極難渋之もの江御米壱斗五升ツヽ被下置候段、中白渕[洲]おゐて町年寄申渡候、

十月十二日、ヱトロフ残金藤野喜兵衛・西川准兵衛・岡田半兵衛三人ゟ高田屋庄兵衛江当方町年寄四人、箱館同五人連印書面弐通白鳥五三郎江相渡候付、元入置候書面五通同人持参ニテ請取、委細之儀者一件袋入、

一、金五百両藤野・西川・岡田三人ヨリヱトロフニ付渡金、当年分高田屋庄兵衛相渡申候、尤、白鳥五三郎立会有之候、

一、御巡見御下向御入用金市中并郷村割書付差上候通御用済相成候、

十月廿七日、御用達・問屋・小宿・請負人・町代迄一同郷村割御巡見御入用当所分御印付切手ニ而壱人別相渡、尤、

牧田七郎右衛門殿ゟ被仰渡候上、金高者伝兵衛読上ケ、切手者重左衛門ゟ相渡申付候、

十月廿八日、郷村割合之儀、田中九八持、宮川半右衛門持、川岸重三郎持半分、右一統江昨日同様之被仰出候而名主ゟ切手壱人別ニ相渡申付候、

同二十九日、中林九兵衛持、加藤専右衛門持、川岸重三郎持半分、昨日同様被仰渡、壱人別ニ切手相渡候、

十一月朔日、御城下附東西在々重達候もの江御巡見御入用郷村割合於　御座敷御奉行衆ゟ御申渡切手相渡候、

一、法幢寺御普請替出来付、

高金四千百九十両三分ト永廿九文七分

内

金二千〇七拾七両三分ト永六十壱文

右者去ル申年ゟ来亥年迄諸向ゟ寄附金御下ケ金高

差引残

金二千百拾二両三分ト永弐百拾六文七分

右者去未年十一月中法幢寺御再建被為在候付、右御普請掛被仰付難有奉存候、依之当戌年十一月中替出来御勘定惣目録書御進達相成候趣承

知仕候、右付、前書之残金可相成御儀御座候半々上納仕度、故喜兵衛以来以御影家業永続仕難有仕合奉存候、兼而当喜兵衛義、右金子為御冥加奉上納度候様精々申付置候間、御差支之御儀も無御座候半々右願の通被仰付被下置度、此段宜御執成奉願上候、以上、

天保九戌年　　藤野喜兵衛
十一月廿五日　　代治兵衛
町年寄四人宛

右定例之通奥書印形差上候、

一、栖原仲蔵・小川屋重兵衛去酉年北蝦夷地品代勘定、右引方之有無其外間違之品等有之、彼是双方不熟談付、御奉行所へ申上候、尤、小川屋重兵衛方ゟ差出勘定書并伊達代庄兵衛取調候書付等袋入之侭差上候、

十一月廿七日、法幢寺御普請替出来付、惣差引残高金二千百拾二両三分、永弐百拾六文七分、藤野喜兵衛ゟ上納仕度願差上候処、願の通被仰付候付、藤野代治兵衛呼上ケ相達候、

一、光善寺再建付、御用達六人江世話方被仰付候、尤、寺和尚ゟ三百両、其外檀家末寺等ゟ出金之分三千三百両有之候趣ニ候間、御用達ゟ持出金等之心配有之間敷候、則寺絵図、其外書付四通、都合五通袋入ニテ相渡、何れ寺并重檀家ゟ相談可有之候趣共申達候、但、伊達・栖原・西川・岡田・岩田・宮川、右六軒、外藤野之義者法幢寺御普請掛り相済候付、是江者不被仰付候、

十二月三日、川原町風呂屋源六ゟ年々道妙寺弐百俵ツヽ献上仕候間、御冥加仲間割合ニ而上納仕候分金子者御免被仰付度願書名主加印ニ而此間中差出候へとも、如何可有之哉付奥印不致御覧ニ入候処、御役物故御免ニ者不相成、其上六軒之処別段薬湯風呂与壱軒相増被仰付候事故、御冥加金等御免願等差出候而者不宜旨、蠣崎四郎左衛門殿并御番牧田七郎左衛門殿御両人ゟ被仰聞候、此間名主九八江申談候間、願書者其侭相下ケ遣候、

一、ヱトロフ新残品代金八ヶ年ニ割上納方仕度内願有之候間、表向願書差出候様ニ被仰付候、西川准兵衛方へ此旨申付遣候、

一、関東屋喜四郎外両人ゟ拝借金并残物代廉々差引書并残金之分金高者追々行立次第上納仕度趣共御聞済相成候旨御達付、此段喜四郎江申付遣候、

十二月十四日、藤野喜兵衛麻上下ニ而明日御用有之、登　城可致旨御達有之候へとも、同人義者上京ニ而居合不申候付、町年寄格ニ被仰付有之候間、家内之内外人ニ而者不相成候故、村山伝兵衛麻上下ニ而名代として罷出候様、御番蠣崎四郎左衛門殿ゟ御達付、此旨喜兵衛方へ申聞置候、

一、ヱトロフ新残もの代金場所年限通八ヶ年割ニ而上納仕度趣、願の通被仰付候間、此段准兵衛方へ相達候、

金千百九十七両二分、永七十九匁
当戌年ゟ七ヶ年之内金百五十両ツヽ十月中上納可仕候末江巳年者金百四拾九両二分ト永七十九文十月中上納皆済可仕事、

十二月十五日、

時服　二　御熨斗目ノ由　惣御掛り
一、御羽織　一　松前内蔵殿
金壱枚

寺社町奉行　蠣崎四郎左衛門殿
江差奉行　三崎八之丞
箱館奉行　牧田七郎左衛門

一、御紋付壱宛

沖ノ口奉行　岡本時蔵
同断　藤田陸郎
御勘定奉行　三村周太
御目附　新井田百右衛門
吟味役　工藤織右衛門

右法幢寺替出来付御賞詞として於　御座之間御書取、御月番鈴木紀三郎殿、御作事掛り目付

一、御先手家席　水牧喜左衛門

右者御用ノ間ニ而麻上下着用被仰付候、

一、御上下一具　同継上下
一、銀七枚　御上下一具　町年寄　土谷官兵衛
一、銀　五枚　御作事　桜庭梅太郎
一、一代中ノ間江御操出ス　御先手組ゟ　佐藤豊七　大場伝左衛門　梅沢宇左衛門
一、御作事御徒士ゟ一代御先手組江御操上ケ　平沼五郎吉　杉村孫壮
一、御徒士ゟ一代御先手組御操上ケ　中嶋俊蔵　村山重左衛門
一、新組御徒士江御操上ケ　御作事勤　御足軽五人

右上御台子ノ間ニ而鈴木紀三郎殿ゟ御書取を以被仰渡候、

一、一代拾五人扶持町年寄格是迄の通　藤野喜兵衛
枝ヶ崎浜築地九百七十四坪余

右法幢寺御普請惣請負被仰付、万端行届、其上御入用残金弐千両余上金願上被仰付候付、名代村山伝兵衛罷出候処、前同断被仰渡候間、御礼申上相下り、惣御掛り故ニ内蔵殿方へ罷上り、其余相廻候義者喜兵衛方ゟ麻上下ニテ代之もの ニ而御礼として相廻候様、次兵衛へ申聞、御書取相渡候、

一、当御役所おゐて御用番蛸崎四郎左衛門殿ゟ被仰渡候分、左之通り以御書取被仰渡候、

御用達一同　問屋一同　小宿一同
請負人一同　右壱通ツ、
御口上ニ而
一、御上下壱具　大工頭
銀二枚　宛　竹内七郎兵衛
同　橋詰彦之丞
一、銀壱枚ツ、　石工頭
甚吉
日雇頭
忠蔵
木挽頭
善五郎
同世話役
藤治郎

御口上ニ而　　〃　元大工世話方

一、大工頭職中壱人扶持宛　　長左衛門
　　八右衛門
　　平左衛門
　　吉之丞
　　太郎治
　　斧作
　　文右衛門
　　幸治郎

同　　〃　元日雇

一、日雇頭中壱人扶持　　伊兵衛

右之通氏家六郎左衛門殿、村山伝兵衛罷出被仰渡候、

十二月十九日、法花寺ゟ此間願上候西館町ニテ

御料中　小笠原伊勢守様ゟ祠堂地ニ同寺江寄附之分、門前市中地面と取替申度、江戸表ニ而

小笠原様方へ同寺ゟ相願候処、差支之筋無之書面相下り候間、右相添取替候様被仰付度願書差上候処、願の通り被仰付候間、此旨相達ス、

十二月廿日、御普請役岡田様ゟ明亥四月中に西蝦夷地御廻浦被成候ニ付一昨日表向御達ニ付、御番三輪八之丞殿江申上候処、御用ノ間江被仰上候間、請負人共一同江為心得相達置候様ニ被仰聞候間、右之趣一同へ申付遣候、

十二月廿六日、北蝦夷地去酉年伊達林右衛門・小川屋九兵衛両人ニテ北会所相建、御場所半方者小川屋九兵衛差配方被仰付候、右半方之分当戌年伊達林右衛門・栖原仲蔵江御預ケ改而被仰付候ニ付、去酉年同所残品代半方之分栖原仲蔵方ゟ可差出候処、品々混雑之儀是迄長々手間取候処、此度双方江利解申聞相済候、尤、伊達林右衛門江も申諭、是ゟも出金方無之、右一件相済候、

一、金弐千九百四十六両壱分ト永七文六分　　栖原仲蔵出金
一、金弐百四十壱両三分ト永百七十六文四分　　伊達林右衛門出金
　〃金三千百八拾八両ト永百八十四文

右之高金小川屋九兵衛江相渡候、

但、小川屋九兵衛北蝦夷地半方差配方被仰付候節御用達格ニ被成下候付、小川九兵衛ニ候処、酉年一ヶ年切ニ而相離候付、御用達格御免并差配方も御免ニ相成候付、小川屋と屋号ニ相成候、九兵衛者名主中林九兵衛支配ニテ名主支配付重兵衛与改名、依而其後者小川屋重兵衛と有之候、

右北蝦夷地残品代取引一件者別紙ニ而袋入、外ニ双方ゟ請書共御檀箇有之候、

余市水産博物館研究報告別冊

平成26年3月31日　発行

編集・発行　余市水産博物館
〒046-0011　北海道余市郡余市町入舟町 21
TEL＆FAX　0135-22-6187